

上ノ国漁港遺跡

—昭和58・60年度発掘調査報告書—

1987. 3

上ノ国町教育委員会
函館土木現業所

序

無錫の呼名を旧字名に伝え、大瀬と通称される本地区は、地形的にも風波の影響が少く、夙に天然の良港として名高く、海図上にも避難港としてその位置が示されているところであります。

この大瀬湾に本格的な港湾施設を造成する事は上ノ国町の長い間の懸案でありました。

昭和48年第5次漁港整備計画に基き、上ノ国漁港修築工事が北海道・函館土木現業所によって開始されました。

昭和57年春頃、この大瀬湾の上ノ国漁港工事予定地内から引き揚げられた多数の陶磁器類が上ノ国町教育委員会に届けられ、町教育委員会は文化庁、北海道教育委員会文化課のご指導を受け、文化財保護法の定めるところに従い、ここにあたることといたしました。

上ノ国漁港工事を担当されます函館土木現業所及び同江差出張所の特段の理解のもと、昭和58年に第一次調査を、60年に第二次調査を実施し、61年度報告書の刊行をもって本事業を終了する運びとなりました。

調査の結果、国指定史跡上之国勝山館の時代から、北前船の活躍する時代を経て今日に到る数百年間の日本海航路の文物の交流と、この間の上ノ国町の歩みを、出土した多数の遺物で跡づけるところとなり、あらためて、私たちの郷土上ノ国の歴史の深さを痛感した次第です。

発掘調査は我が国の水中考古学の権威でおられます、埼玉大学荒木伸介先生を当初から担当者にお願い申し上げ、経験豊かな調査員を遠隔の地からお迎えし、順調に取り進められ、多大な成果の得られました事は誠に幸いでありました。

この間、工事を担当される函館土木現業所・同江差出張所はもとより地元漁業関係者等、諸機関、多数の方々から多大のご理解とご協力を戴きましたが、本事業を進めることができましたことを深く感謝申し上げまして序文といたします。

昭和57年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 布 施 潤一郎

例　言

1. 本書は函館土木現業所と上ノ国町との委託契約に基づいて上ノ国町教育委員会が、昭和58・60年度に実施した上ノ国漁港遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成は調査に関わった調査員が分担し、上ノ国町教育委員会が編集した。地形図等の作製は齊藤主税が行った。
3. 遺物実測図の縮尺は腕・皿等を3分の1、擂鉢類を4分の1とし写真図版もこれに従ったが、一部異なるものもある。
4. 本事業の推進にあたって次の各機関、各位からご指導とご助言、ご協力を頂戴した。記して感謝申し上げたい。

文化庁記念物課 黒崎直、北海道教育委員会文化課 大山武士、中野慎悟、鎌田幸彦、酒匂憲司、竹田輝雄、中村福彦、大沼忠春、高橋和樹、桧山教育局社会教育係 五十嵐丸人、松久明、函館土木現業所 三浦瞳、森池正人、同江差出張所 西森茂、稻葉昭三、佐野敏雄、波賀野博昭、現場監督員小島弘見、東洋文庫 渡辺兼庸、京都大学 朝尾直弘、国立歴史民俗博物館 小野政敏、佐賀県立九州陶磁文化館 前山 博、大橋康二、佐賀県教育委員会文化課、

名護屋城址発掘調査事務所 高島忠平・松尾法博・森田孝志・徳富剛久、長崎県教育委員会文化課 高野晋司・副島和明・宮崎貴夫、有田町歴史民俗資料館 尾崎葉子、肥前波佐見焼振興会、伊万里市教育委員会 盛峰夫、岡山県古代吉備調査センター 福田正継、銚路市立博物館、千歳市教育委員会 田村俊之、市立函館図書館、新冠町教育委員会 乾芳宏、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、江差町教育委員会 浜谷一治・藤島一己、二風谷遺跡調査委員会 前田正憲 上ノ国漁業協同組合 組合長市山亮悦、森一夫、竹内茂彦、久末久義、中村広、京谷昌治、上ノ国町役場商工水産課滝本豊・北村克夫・折戸幸博、上ノ国町教育委員会嘱託 鈴木正語・宮宏明・松本尚久

調査作業 富士海洋土木KK。

作業員：伊勢敏子・笠谷奈智子・沢村聰子・辻美保子・七尾美也・浜田寛子・平井登美子・布施末子・布施幸美・福田楨子・松原笑子・森恵美子・山崎洋子・鷺田文子。

5. 出土遺物、図面その他の資料は上ノ国町教育委員会が保管する。

目次

挿図・表目次

序
例言
目次

本文目次

I 事業の概要	1
1 事業概要	1
2 調査組織	1
3 調査にいたる経緯	1
II 遺跡の概要	4
III 調査の経緯	7
1 昭和58年度発掘調査の経過と概要	7
2 昭和60年度発掘調査日誌	7
IV 調査の方法と結果	12
V 出土遺物	19
1 陶磁器	19
(1) 碗類	19
(2) 盆類	28
(3) 碗、皿から見た若干の考察	38
(4) 搖鉢、その他の陶磁器	41
(5) 出土搖鉢について	54
2 その他の遺物	55
VI 近隣遺跡との関連、並遺跡の性格	59
1 出土遺物の構成	59
2 遺物の分布状況と埋蔵量	59
3 近隣遺跡との関連	69
4 遺跡の性格	69
(1) 船上投棄遺物	69
(2) 番屋生活廃棄遺物	70
(3) 市街生活廃棄遺物	70
(4) 上ノ国市街の変遷	71
VII 総括	72
引用参考文献	73
図版	75

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺地形図	5
第3図 遺跡地形・調査区位置図	13
第4図 S-30・50ライン 海底土層堆積柱状図	16
第5図 発掘開始前海底地形図	17
第6図 碗	20
第7図 碗	22
第8図 碗	23
第9図 碗	25
第10図 碗	27
第10図 碗	27
第11図 盆	29
第12図 盆	31
第13図 盆	33
第14図 盆	34
第15図 盆	35
第16図 盆	37
第17図 盆	39
第18図 盆	40
第19図 搖鉢	42
第20図 搖鉢	43
第21図 搖鉢	45
第22図 搖鉢	46
第23図 搖鉢	47
第24図 搖鉢	48
第25図 搖鉢	49
第26図 瓢・その他	51
第27図 鉢・瓶・その他	52
第28図 香炉・その他	53
第29図 金属製品・銭・木・石製品・石器	56
第30図 その他の遺物(瓦)	57
第31図 陶磁器出土分布図	60
第32図 出土遺物変遷概念図表1(碗・他)	63
第33図 出土遺物変遷概念図表2(盆・盤)	65
第34図 出土遺物変遷概念図表3(搖鉢・甕・鉢・瓶)	67
第1表 陶磁器集計表	61
第2表 陶磁器集計概括表	76

挿図写真目次

Fig. 1	調査地点	7
Fig. 2	調査地点	7
Fig. 3	エアーリフト	7
Fig. 4	筏	8
Fig. 5	グリッド設定作業	8
Fig. 6	グリッド設定状況	8
Fig. 7	発掘調査	9
Fig. 8	テレビカメラによる撮影	9
Fig. 9	濁水の広がり	9
Fig. 10	エアーリフトによる発掘	10
Fig. 11	海底堆積状況	10
Fig. 12	遺物の吐出	10
Fig. 13	堆積断面	11
Fig. 14, 15	実測作業	11
Fig. 16	史跡上之国勝山館跡	12
Fig. 17	調査箇所	12
Fig. 18	海底堆積状況	12
Fig. 19	調査機材	15
Fig. 20	潜水装備	18
Fig. 21	筏上での遺物の精査	18
Fig. 22	調査機材	18

写真図版目次

PL. 1	遺跡近景他
PL. 2	出土陶磁器（碗）
PL. 3	出土陶磁器（皿）
PL. 4	出土陶磁器、伝世参考品
PL. 5	遺跡遠望
PL. 6	遺跡近景
PL. 7	遺跡中景
PL. 8	遺跡中景
PL. 9	遺跡近景
PL. 10	調査位置
PL. 11	番屋とハネダシ
PL. 12	天ノ川河口と遺跡

PL. 13	出土陶磁器（碗）
PL. 14	出土陶磁器（碗）
PL. 15	出土陶磁器（碗）
PL. 16	出土陶磁器（碗）
PL. 17	出土陶磁器（碗）
PL. 18	出土陶磁器（碗・皿）
PL. 19	出土陶磁器（碗）
PL. 20	出土陶磁器（皿）
PL. 21	出土陶磁器（皿）
PL. 22	出土陶磁器（皿）
PL. 23	出土陶磁器（皿）
PL. 24	出土陶磁器（皿）
PL. 25	出土陶磁器（皿）
PL. 26	出土陶磁器（皿）
PL. 27	出土陶磁器（皿）
PL. 28	出土陶器（擂鉢）
PL. 29	出土陶器（擂鉢）
PL. 30	出土陶器（擂鉢）
PL. 31	出土陶器（擂鉢）
PL. 32	出土陶器（擂鉢）
PL. 33	出土陶器（擂鉢）
PL. 34	出土陶磁器（瓶・徳利）
PL. 35	出土陶器（甕・鉢）
PL. 36	出土陶器（甕、他）
PL. 37	出土陶磁器（香炉、他）
PL. 38	瓦
PL. 39	金属製品他
PL. 40	参考品（陶磁器）

I 事業の概要

本書は昭和15年、60年函館土木現業所の委託を受けて上ノ国町・上ノ国町教育委員会が実施した上ノ国漁港遺跡発掘調査の報告書である。

58年度の発掘調査は13ヶ所の調査区約120m²を実施し360点余の遺物を検出した。調査の結果は尚、相当量の遺物の包蔵されている事が予測される事、遺物の種類が多種におよび、その年代幅も長期に亘る事等が予測され、再調査の必要があるとの結論に達した。

これに基づき昭和60年3,000m²余を調査対象面積とする発掘調査を実施し、60・61年度の冬期に整理作業を行い、もって事業を終了した。

1 事業概要

本事業は函館土木現業所が第7次漁港整備計画に基き上ノ国町勝山1496番地先外の公有水面を選択して土し漁港施設用地を造成するに際し、同地内の埋蔵文化財包蔵地、上ノ国漁港遺跡（C-02-78-海底遺跡）を文化庁等の指導の下、上ノ国町が函館土木現業所の委託を受けて実施した遺跡発掘調査事業であり、上ノ国町教育委員会がこれにあたった。

2 調査組織

調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 布施潤一郎

調査担当者 埼玉大学講師 荒木伸介

調査員 日本習字教育財団 石原渉 日本考古学研究所 齊藤主税 上ノ国町教育委員会 藤田登 松崎水穂 齊藤邦典

事務局 上ノ国町教育委員会文化課長 山本吉春（昭和56年5月～昭和58年6月）、同 木村幹郎（昭和58年7月～昭和59年1月25日）、同 森勇一（昭和59年1月26日～昭和60年3月31日）、同 関登志夫（昭和60年4月1日～）

3 調査にいたる経緯

本調査が実施される迄にはいくつかの重要な契機があった。即ち57年5月の遺物（陶磁器）の発見と埋蔵文化財包蔵地としての北海道教育委員会（文化庁）の登載（7月）、同5月の函館土木現業所による事前協議書の提出とそれに基づく9月の北海道教育委員会文化課による範囲確認調査及び10月の文化庁黒崎直調査官、北海道教育委員会文化課の現地視察並びに指導がそれである。

本調査はこれらの経過の中で文化財保護法に基づき、58年10月・61年7月1日～8月31日実施するにいたったものである。以下にやや詳しくこの間について記述するものである。

昭和57年2月頃から字上ノ国在住の竹内茂彦氏から大溝湾内より採集したものとして陶磁器類が上ノ国町教育委員会へ届けられた。教育委員会文化課では、その扱いについて、北海道教育委員会の指導を仰ぎ乍ら種々検討した結果、文化財保護法57条6に基づき遺跡発見通知書を提出しそれによって文化庁の判断を受けることとし5月31日提出した。尚、同書中に於て58年5月以降函館土木現業所による港湾工事に伴い現状変更の生ずる可能性のあること、又函館土木現業所江差出張所には遺跡の所在する可能性があり、工事に際しては、事前協議等の配慮方を依頼した旨申し添えた。

57年7月28日、7月21日付をもって埋蔵文化財包蔵地として登載された旨北海道教育委員会から上ノ国町教育委員会宛通知があった。

これによって本地区は以後、上ノ国町漁港遺跡（海底遺跡）として文化財保護法の適用されることが確定した。

一方57年5月31日、函館土木現業所長提出の5月13日付北海道教育委員会教育長宛の工事に伴う第1次事前協議書が上ノ国町教育委員会から松山教育局長宛進達された。協議内容は57年度港湾工事と埋蔵文化財包蔵地との関連に関するものであった。

57年9月24日、前述の事前協議に基く北海道教育委員会による遺跡範囲確認調査及び函館土木現業所江差出張所と北海道教育委員会との現地協議が行われた。

調査は、港湾工事請工中の田中組潜水夫が海底から埋蔵文化財と思われる物件を採集し、それによって所在、範囲を推定しようとするものであったが、潜水夫自身にその知識がないこと、又海中の汚濁が甚しかったことなど、作業が困難であったと思われる。

現地協議は57年の港湾工事の進捗に併せ同年10月末頃に現場潜水夫等による遺物の収集作業を実施、58年度事業費による整理作業、報告書刊行、業務の完了を図るという概略の方向性を示したも

第1図 漁港遺跡図（国土地理院25,000分の1）



ので、帰郷後検討の上北海道教育委員会から、文書で回答がなされることとなった。

57年10月9日、先の現地協議内容について、請工業者の負担を強いることが予想されることから、遺物収集を含めた一切を58年度事業費として予算化することを検討中であるので、57年度中に遺物収集は実施しない旨、函館土木現業所江差出張所より、上ノ国町教育委員会宛協議があり、57年度の作業は実施しないこととした。

57年10月10日、上ノ国町教育委員会は函館土木現業所所長より文化庁長官宛の57年度工事に関する57年10月6日付の発掘通知書の提出を受け同20日桧山教育局宛送達した。

57年10月24日、文化庁記念物課、黒崎直調査官、北海道教育委員会文化課埋蔵文化財係による現地視察があり、正規の発掘調査をすべき旨の指導がなされた。

57年11月4日、上ノ国町教育委員会は北海道教育委員会教育長の函館土木現業所所長宛5月13日付の事前協議書に対する9月24日実施の範囲確認調査結果に基づく工事の着手に際し事前に文化財保護法に定める発掘通知書を提出すべき旨の10月20日付回答書写とその通知の送付を桧山教育局を経て受けた。

57年11月20日、上ノ国町教育委員会は、北海道教育委員会教育長が10月6日付提出の発掘通知に対し、10月20日付けの回答及び文化庁の指導に基づき、発掘調査を実施すべき旨を11月12日付をもって函館土木現業所所長宛に通知した事を北海道教育委員会桧山教育局を通して通知された。

58年2月3日、上ノ国町教育委員会は北海道教育委員会の58年度以降の埋蔵文化財包蔵地にかかる土木工事等の有無に関する調査に対し上ノ国漁港遺跡他を回答した。

58年7月26日、上ノ国町教育委員会は函館土木現業所所長より埋蔵文化財発掘調査に係る費用積算の依頼を受けた。同29日、積算資料を提示した。

58年8月24日、かねて北海道教育委員会より推せんのあった埼玉大学荒木伸介講師に10月上旬発掘調査実施の日程で発掘担当者承諾の依頼を行った。

58年9月1日、上ノ国町教育委員会は函館土木現業所所長より業務委託及び同委託契約締結の依頼書を受けた。9月13日、上ノ国町教育委員会は

9月末の受託事業予算措置をもって契約締結したい事、及び受託者は上ノ国町長となる旨函館土木現業所へ回答した。

58年9月28日、函館土木現業所より委託契約締結の依頼があり同30日契約を締結する。

同9月29日、上ノ国町長と上ノ国町教育委員会は文化庁長官宛発掘通知書を桧山教育局経由で提出出した。

58年10月11日～26日発掘調査を実施した。

58年10月 調査終了結果に基づく協議が行われ、尚相当量の遺物の包蔵する事が報告され、埋め立て工事実施前に再調査をしなければならない事が確認された。

59年3月 58年度事業の概要報告書を発行し、この間の経緯その他のを明らかにした。

59年5月 61年度に港湾施設造成のため遺跡所在地を埋め立ての予定であるので60年度中に発掘調査を実施できるよう計画を立てる事等の申し入れが函館土木現業所よりなされた。

60年7月 60年度に発掘調査を実施し遺物の出土量によっては、60・61年度に跨がって整理作業を行う事を骨旨とする協議が整い、上ノ国町と函館土木現業所が委託契約を行い発掘調査を実施した。

発掘調査は予定通り8月末をもって完了したが、調査体制を組織する時点で当初、発掘調査から整理作業迄一貫して専従の調査員を1名確保する事を前提としていたがそれが不可能であった事から、その基本的整理作業は上ノ国町教育委員会で実施することとなった。加えて大量かつ多岐に亘る遺物が出土したため、その整理作業量も大きなものとなった。これらのことから整理作業を60年10月～61年3月、61年10月～62年3月の間に実施し業務を完了することとした。
(松崎)

註 上ノ国漁港遺跡調査報 1984年 上ノ国町教育委員会

II 遺跡の概要

遺跡の所在は、北海道桧山郡上ノ国町字勝山496番地先の公有海面下の海底である。上ノ国町の北部を天ノ川が東から西に貫流し日本海へ注いでいる。遺跡はこの天ノ川河口から西へ700m大洞湾の湾入する入り江の中である。本地区は更に南西3kmの洲根子岬等によって南西-北西の風波を避け、他方渡島半島の脊梁遊楽部岳・乙部岳・元山、笛山の連山が北東-東を遮って海岸を形成している為、この方向からの風波の影響もまた少なく古来天然の良港として夙に名高く、「無難」の旧地番名を有し、現在も避難港として海図上にその位置を示しているところである。

天ノ川河口から本遺跡所在地迄の海岸沿いに宇上ノ国町の集落が形成されている。その現居住地の下位には前代の遺跡が形成されている。山神社遺跡及びその付近からは縄文時代後期末葉の注口土器と青龍刀型石器が出土し^{註1}竹内屋敷遺跡から宮ノ沢川右岸の間の住宅下には縄文時代晚期の遺物包含層があり、竹内屋敷遺跡出土資料には上ノ国式の型式名も付与されている^{註2}。宮ノ沢川左岸には縄文時代晚期、統繩文時代の遺物を出土する宮ノ沢遺跡があり^{註3}本遺跡南の陸地は縄文時代後期-擦文時代の遺物を出土する大洞下遺跡である^{註4}。先述の竹内屋敷遺跡からは更に終末期の擦文式土器が出土し、13世紀前後、珠洲第1期に比定されるツボも出土している^{註5}。

湾の南後方に、15-16世紀に蝦夷交易の一大中心地として100-150年間繁栄を欲しいままにし、北海道の政治経済文化の拠点を築き、後の松前藩の基礎をなした武田、蛎崎氏の居館史跡上之国勝山館跡がある。同館の二万点余りの出土品をみると、その大部分が本州から搬入されたものであり、中国大陆から招来された陶磁器類がその半数になんなんとする状況は、その背景として、この上ノ国漁港遺跡の所在する大洞湾をその直下に擁する優れた交易地としての恵まれた条件が備わっていたことなしにはあり得ないものと推測されるところである。

その後も当地区は松前藩攻取、藩の重要な特産物のアスナロヒノキの積み出しをはじめ様々な物資の出入に関わる重要な港としての役割を果して今日にいたっている。

昭和の初期にはこの湾岸に、はねだしを有する建物群が並びたち眼をみせたという事である。

この頃天ノ川流域のブナ材が搬出されたが、この積み出しに際しても、河口まで流送されてきた材木の、直接その場での船積が風波等の影響でどうしても出来ず、筏でこの湾内まで曳き入れ船積して搬出したという。

昭和30年頃までは、満内各所に纏を繋ぐ網取りの柱癪が見られたのであり、今も岩場にその柱の抜けた跡が散見され、往時を偲ぶことが出来る。

他方当地区から大崎に至る海岸は鯨の群れる場所として知られ安政末-明治にも多数の刺網の設けられる千石場所であった。例えば明治23年の漁場は建網28ヶ所28区に分けられていた。この頃函館本署では鯨漁業取締りのため漁期中上ノ国へ巡回1名を特派したという^{註6}。又、この間の前浜で漁獲された鯨は枡船に移され、波静かなこの大洞湾内に止められたと往時を知る人は語る(中村広氏-明治42年生談)。従ってこれらの漁に携わる漁夫達の寝泊りする“番屋”も当地区一帯の海岸に立ち並んだと思われる。

漁の終了後、櫛等の大謀網が昭和30年頃迄設けられ、數棟の番屋が存続し、尚その跡地が一部石積みの平坦地として現存している。

本遺跡は、これらの上ノ国町、ひいては本道西海岸に於ける数百年に亘る人々の生活の具体的な内容を裏づけ、その時にこの港に繁縟を結び来たった人々の足跡を示す遺物の埋蔵されたところとすることができよう。(松崎)

註1 桧山南部の遺跡 1955年 上ノ国村・江差町教育委員会

2 上ノ国遺跡 1960年 上ノ国村教育委員会

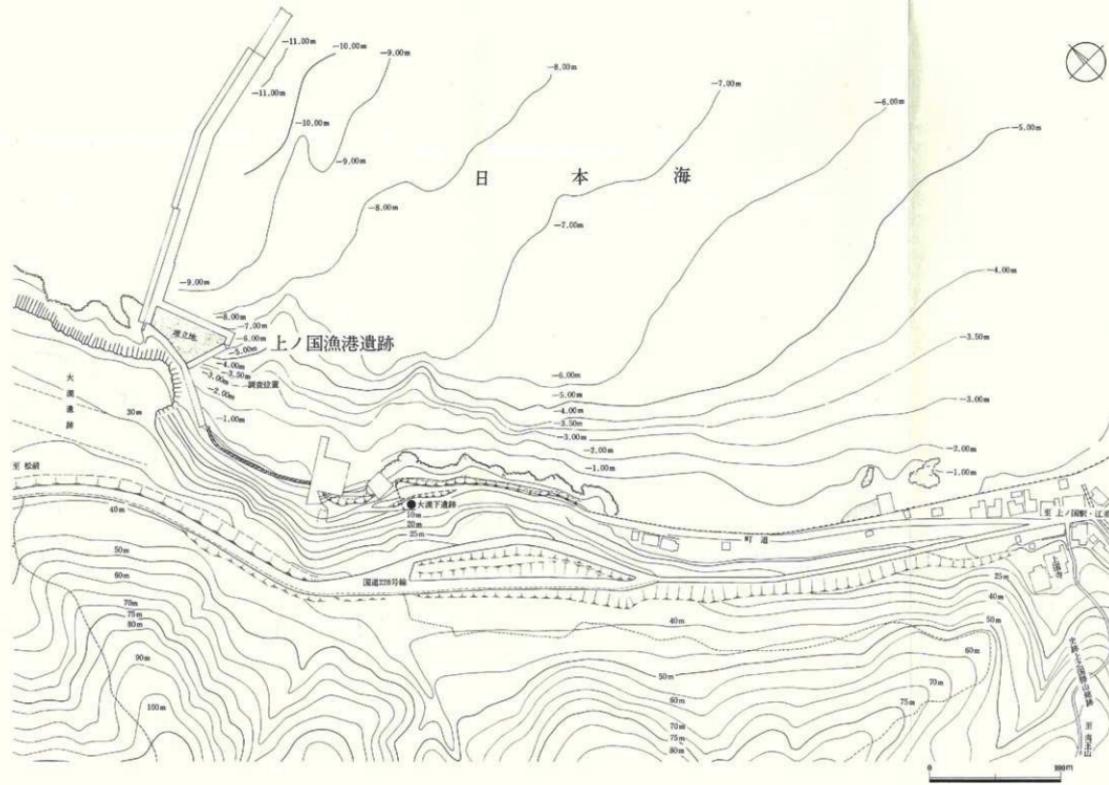
3 北海道桧山郡宮ノ沢遺跡 1970年 考古学雑誌56巻1号

4 考古学ジャーナル No213 1983年

5 北海道の中世陶器 1979年 日本書文化6号

6 史跡上之国勝山館跡 I ~ III 1980-86年 上ノ国町教育委員会

7 上ノ国村史 1955年 上ノ国村



第2図 遺跡周辺地形図

III 調査の経緯

1 昭和58年度発掘調査の経過と概要

調査は函館土木現業所の第7次漁港整備計画に基づく、上ノ国町勝山496番地先外公有水面域の漁港施設造成に伴う、水底埋蔵文化財包蔵地事前調査として着手された。

昭和58年9月28日、上ノ国町教育委員会は函館土木現業所所長より、調査の委託依頼を受け、同30日契約を締結、翌10月11日～26日の日程で調査を実施した。以下はその概要要約である。

調査スタッフ

担当者 荒木伸介

調査員 藤田 登、松崎水穂

海中作業員等 (ダイバー他) 3名
(富士海洋土木K.K)

調査期間 昭和58年10月11日～10月26日

調査面積 試掘穴13コ (約120m²)

調査方法

遺跡が存在すると推測される海底面に、東西方向および南北方向の直交するラインを設定し、それぞれ東西50m、南北80mを試穴基準ラインとして、エアーリフトによる排土作業を実施した。

なお排土作業中、エアーリフトによる遺物の吸い上げ、並びに紛失を防止するため、排水口には袋状の網を付加して万全を期した。

土層の堆積状況は、おおよそ海底面直下の5～15cmのヘドロ層、25～30cmの転石と砂の混合層、30～50cmの貝と砂の混合層、以下砂層の順で推積し、遺物包含層は、30～50cm深の転石と砂の混合層中であることが確認された。

出土遺物

採集品目 総点数360点 (大半が陶磁器類)

陶磁器類種別 中・小皿類、碗類、浅鉢、徳利、壺、甕、擂鉢、香炉等。(17c～昭和初期)

金属製品 古銭「寛永通宝」、釘、留金等。

整理作業

陶磁器類は一時真水につけ、後日附着物の除去を実施し、引き続き整理作業を行った。

(以上、昭和58年度発掘調査概報より要約)

2 昭和60年度発掘調査日誌

調査は昭和58年度の調査結果を受けて、調査対象範囲の全面調査を目標に以下の日程で実施した。



Fig. 1 調査地点 (北から)



Fig. 2 調査地点 (西から)



Fig. 3 エアーリフト



Fig. 4 筏



Fig. 5 グリット設定作業

Fig. 6 グリット設定状況

すなわち昭和60年7月1日～8月30日までの約2ヶ月に及ぶ調査で、10m×10mのメッシュ30ヶを精査し、更に周辺部に於ける遺物遺構確認調査を実施し終了した。その結果、実に3,000点に及ぶ遺物の出土を確認し、水底埋蔵文化財包蔵地における事前調査を終了した。以下はその調査時ににおける記録である。

発掘調査日誌

昭和60年7月1日（月曜）

上ノ国町教育委員会内において調査スケジュールの検討。

7月2日（火曜）

海底発掘作業の調査補助のため、富士海洋土木と契約、潜水作業員7名、陸上作業員1名の計8名が調査に参加予定。

漁協、船主、教育委員会による調査区域内の漁船立入り禁止、並びに荒天時の緊急入港の事前通告の打ち合わせ会議。

調査基準点の設定及びトランシットによる調査区域の測量を実施。

7月3日（水曜）

入港中の漁船はすべて調査区域外に移動。海底面にロープを投入して、グリッド設定を準備する。

7月4日（木曜）

海底面のロープは、10mのメッシュを組み、各交点のメッシュにはアクリル板に位置関係を示して付加した。

7月5日（金曜）

海底に張った方向線のロープを修正し、鉄筋を打ち込んでメッシュを海底に固定、アクリル板の交点位置ネーム札を付加し、発掘区画の方眼が完成した。

7月6日（土曜）～7月8日（月曜）

調査区域内の海底地形及び堆積状況を事前確認のため潜水。

7月9日（火曜）

調査区画E10S20を発掘開始。発掘には口径6インチのエアーリフト2本、50HP 5 m³/分の空気圧縮機を使用。

7月10日（水曜）

早朝より東南の風が強く、調査区域内の波高が高いため調査を中止する。

なお、エアーリフト排水口を積載する筏を設置、

排水口より遺物の細片が損失しないよう、筏の上面に金網を張って万全を期した。

7月11日（木曜）

沖合は風雨が強く時化模様のため、漁船の緊急入港が相次ぐ。午後より入港船のため海底発掘作業を中止する。

7月12日（金曜）

海底発掘作業を再開。緊急避難の漁船群は港内に定泊中。排土のもどりは顕著である。

7月13日（土曜）

遺跡の堆積状況を確認するため、E30S20のグリッドをテストピットとして発掘中である。ヘドロ層直下には、比較的大形の転石が散布しておりその除去作業に苦労する。

遺物は、いずれも近世陶磁器の細片である。

7月15日（月曜）

E30S20グリッドの発掘状況を確認。調査海域は透視度、透明度とも不良である。この海中の濁りは外洋の時化に伴う濁水の流入と考えられる。

7月16日（火曜）

午前中、水中テレビによるE30S20グリッドの堆積状況撮影を試みたが、海水の濁りが強く断念せざるを得なかった。

午後より陸上において、周辺の地形測量を実施する。

7月17日（水曜）～7月19日（金曜）

E40S30グリッドを精査。

7月20日（土曜）～7月23日（火曜）

E10S20グリッドの精査。23日は午前中から水中テレビを導入して、調査状況を撮影。

7月24日（水曜）～7月26日（金曜）

E20S30グリッドの精査。小礫がかなり堆積しており作業は困難を極める。

7月27日（土曜）～8月1日（木曜）

E0S30、W10S40、W0S50グリッドの精査。W10S40は遺物の出土が顕著である。

8月2日（金曜）

昨日からの降水により、調査海域は全面に茶褐色の濁水が広がり、透視度、透明度共に0の状態であり、海中での調査中止を決定する。

8月3日（土曜）

調査海域は本日も濁水の広がりが続いているが、午後より状況が好転したためE10S40の最終精査を実施する。



Fig. 7 発掘調査



Fig. 8 テレビカメラによる撮影



Fig. 9 濁水の広がり



Fig. 10 エアーリフトによる発掘



Fig. 11 海底堆積状況

Fig. 12 遺物の吐出



8月5日（月曜）～8月6日（火曜）

降水による濁水の発生から4日間が経過したが、以前として海水の濁りが残り調査に支障をきたしている。E20S50のグリッドに移動して精査を実施する。

8月7日（水曜）

海の状態は好転し、潜水による調査区の視認が比較的容易となった。E30S40のグリッドに移動する。

8月8日（木曜）～8月10日（土曜）

E40S50に移動して精査。遺物の出土は少数で小破片程度の確認にとどまる。E50S40に移動。

8月12日（月曜）～8月16日（金曜）

盆休みのため作業中止。

8月17日（土曜） 盆休み明けで作業を再開する。E30S60の精査に移る。浅場の透明度は良好である。

8月18日（日曜）

E20S70、E10S60の精査に入る。遺物の出土は少なくなり、遺物散布地区がほぼ遺跡調査地区の中央部に集中しているらしいことが予測される。

E20S40（拡張区）を設定してエアーリフトによる排土作業を実施する。E10S30も拡張を検討する。

8月19日（月曜）

E20S40（拡張区）からは遺物の出土が顕著である。平板測量で海岸線の地形を測量する。

8月20日（火曜）

波高が若干あり、海中にも濁水が広がっている。E20S40を終了してE10S30に移動する。

8月21日（水曜）

午後より海中の状況は極めて良好で、透明度、透視度共に良く写真撮影を実施する。E10S30を終了しE30S30に移動。

8月22日（木曜）～8月23日（金曜）

拡張区E30S30を精査中。陸上の設点から沿直ラインを延ばし、調査区沖合まで5mごとの海底上面のレベル測量を実施する。

8月24日（土曜）

E20S30を沖側から陸側にかけて10m深掘し、セクション取りを計画したが、濁水のため断念せざるをえない。

8月26日（月曜）

荒天のため、漁船の緊急入港5隻あり。レベル

測量終了。E40S45の深掘りを実施する。

8月27日（火曜）

午前中、透明度が良好のためセクション図を取るため潜水。S30ラインを石原が、S50ラインを斎藤が担当して土層図を作製した。

土層の状況は前日の排土がもどり、2次擾乱が見られ正確な層位状況の記録は困難である。

8月28日（水曜）

EW 0 S40を終了。E10S50に移動する。沖合が荒天のためか調査区内にも濁水が広がる。

8月29日（木曜）

調査も最終段階に入り、未調査区も残すところ2ヶ所のみとなった。E30S50を調査。

8月30日（金曜）

E40S40、E20S20の精査をもって全調査区発掘調査を終了した。最終的には10m×10mのメッシュで30ヶ所、3,000m²の調査区画を全面発掘し、周辺部での遺構遺物確認調査等を行い調査対象区内における本調査を終了した。

8月31日（土曜）

調査機材の撤収を完了する。

(石原)

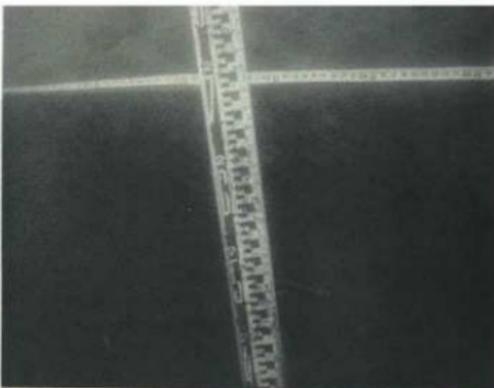


Fig. 13 堆積断面



Fig. 14、15 実測作業



IV 調査の方法と結果

1. はじめに

水底に埋もれた遺跡・遺物を対象とする、いわゆる水中考古学の実例は、陸上に比較するにはあまりにも少ない。近年、多少増加の傾向が見られるが、ほとんどの場合、表面採集的段階にすぎず、水底を掘り下げて調査を行なうような本格的な調査例は、少なくともわが国内では皆無に等しい。

わが国における本格的な海底発掘調査は、昭和49年以来継続して行なわれている「開陽丸」の調査が最初である。「開陽丸」は、徳川幕府の発注により、1856年オランダで建造された軍艦で、当時としては東洋一の戦艦としての規模と装備を誇っていた。しかし、維新の動乱に際し、旧幕臣らによって北海道に回航され、江差沖に錨泊中、折からの暴風雨によって座礁、破砕され海底に没した。この「開陽丸」の発掘調査によって、これまでに3万点を超える遺物が引き上げられ、当時の生活文化、科学技術を実証する貴重な文化遺産として保存され、わが国近代化の道程を研究する上にも重要な調査として評価されている。

これに次ぐ調査は、昭和58年7月から9月にかけて行われた「床浪遺跡」の調査である。その遺跡は、長崎県北松浦郡鷹島の南岸にあり、弘安4年(1281)7月、蒙古の10数万の軍勢が4千数百の艦船で来襲した際、折からの暴風のため、世界の海難史上にも例のない壊滅的打撃を受け沈没した地域である。この時の暴風こそ救国の「神風」として伝えられているものである。床浪港はこの蒙古軍沈没の地として、周知の遺跡として登録されており、港湾改修工事に伴なう事前調査として発掘調査が行われていた。この調査では10数点の遺物が引き揚げられたにすぎないが、今後、改修工事が進むにつれ、調査も引き続き行なわれる予定であり、その成果が期待されている。

以上のわずか二例がわが国における本格的な海底遺跡の発掘調査であるが、この二つの調査に参加したスタッフによって、当上ノ国漁港遺跡の調査も行われる運びとなったのである。これまでの体験に基づき、遺跡の性格に合ったより効果的な調査方法が検討され、実施された。

2. 調査の方法

前述したように、この調査の契機となったのは、

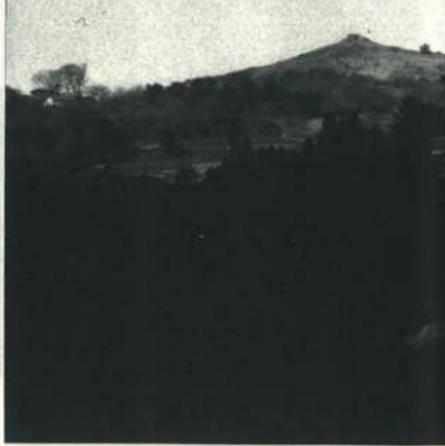


Fig. 16 史跡上之国勝山館跡（後方夷王山）

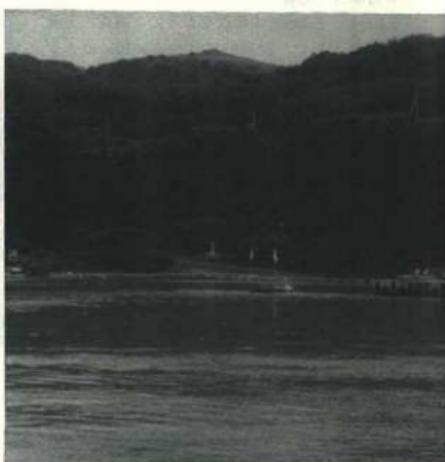
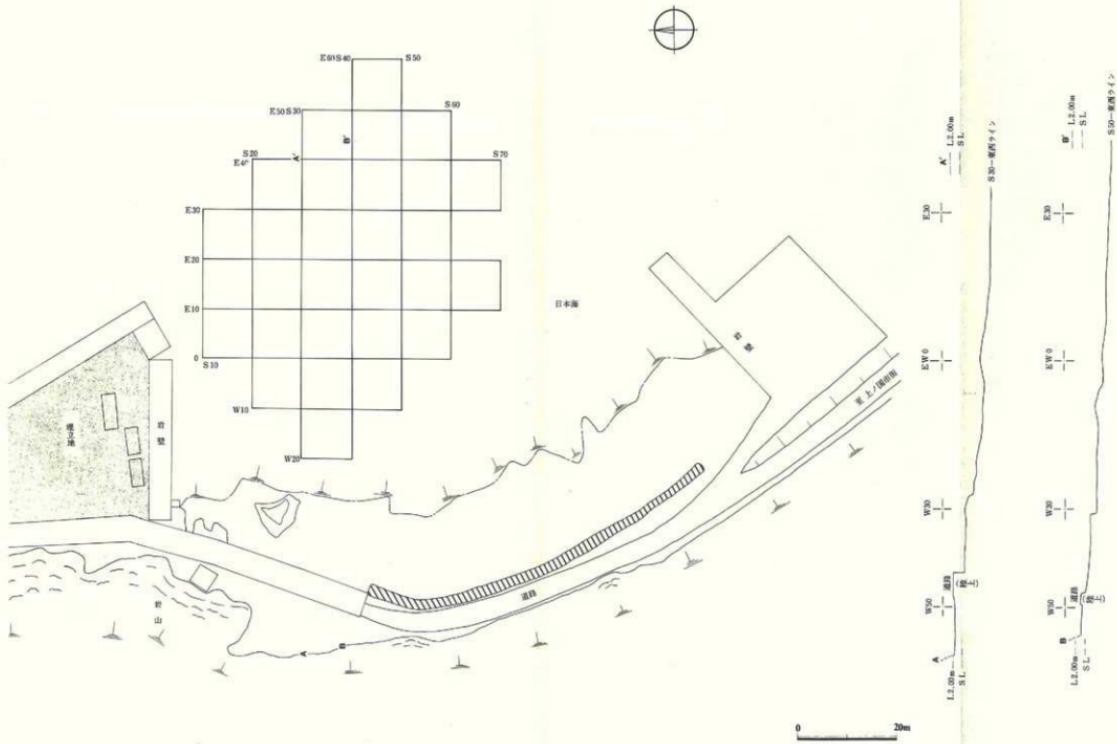


Fig. 17 調査個所（後方夷王山）



Fig. 18 海底堆積状況



第3図 遺跡地形・調査区位置図

地元在住の竹内茂彦氏によって湾内より採集された陶磁器類が多数当教育委員会に届けられたことによる。その陶磁器類が上ノ国町の管理する国指定史跡「勝山館跡」からの出土遺物との関連から注目されるところとなった。

昭和58年10月、最も遺物が集中しているとされた地点を中心に東西方向の直交する2本のトレチを設定し、試掘調査を開始することにした。

まず、潜水し海底を直視して観察することから始めたが、ほとんど全面にわたってヘドロが堆積し、このヘドロを除去しなければ、遺物の発見は困難な状態にあった。

通常、陸上の発掘調査では、設定されたトレチ内の全面にわたって、上層から順次削り取るようにして掘り進めて行くのだが、海底のしかもヘドロのような堆積層は、掘り下げてもすぐに周辺部から埋め戻されてしまう。このため、ポイントを絞った迅速な調査が求められる。

予備調査時には、設定されたトレチ内の13ヶ所合計120m²について、1ヶ所、1ヶ所調査を完了しながら進めることにした。地点によっては岩礁によってヘドロの戻りが多少いとめられるため、そのような地点では調査面積を広げるようにした。

水深は約1.5m~7mと比較的浅く、海底面は全般に緩やかな傾斜で沖へ向っていた。ヘドロ層とヘドロに砂利、貝殻片などを含む層とを合わせれば、厚いところで70~80cm、平均約50cmほど堆積し、その下層には小石や貝殻片を多く含むシルト質の層がある。これらの層は、いずれも崩れや

すぐ、掘り下げたところに埋め戻されてくるため、上部をかなり広く掘らなければ、下層を観察するのは困難であった。最も深く掘り下げたヶ所で現海底面から約2mであったが、いずれの地点でも最下層部は岩盤、あるいは粘土質の盤であり、これより下に遺物が残存することはない。

遺物は第Ⅰ層のヘドロ層（玉石、貝殻を含む）の下部から第Ⅱ層（貝殻、小石を含むシルト質層）にかけて含まれており、大多数は陶磁器類であった。発掘面積の割には出土遺物点数が360点と多く、なほ多くの遺物がこの海底に残存するものと推定され、本格的な全面発掘を行なう必要性がより明確にされた。

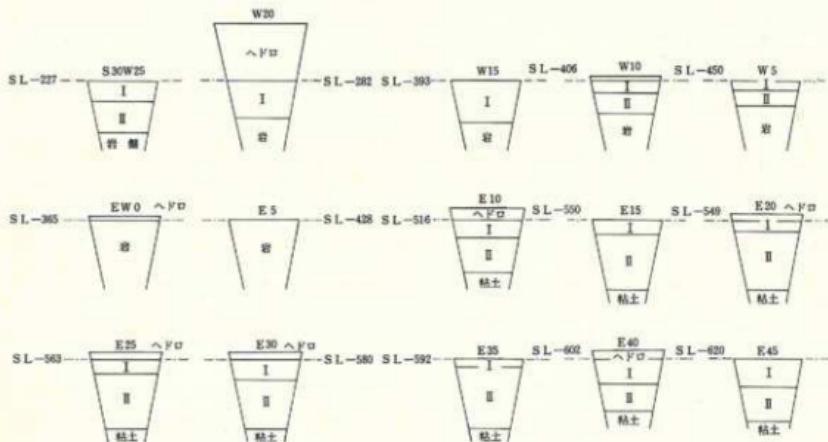
本格的調査は昭和60年7月から9月にかけて行なわれた、対象となる範囲は漁港整備事業によって埋立てが予定される約3,000m²とした。

すでに整備事業は進められており、この工事のために設けられている基準点を発掘調査においても基準点として用いた。この点から東西方向、南北方向とも各10mごとのグリットを設定することにし、陸上からのトランシット・ワークにより、海面上に各交点を求め、その点から鉄筋（13m/m²）を海底に垂下して位置を定め、各点をロープで結び調査位置の正確を期すことにした。また、深さについては、陸上での調査と同様に、海底の調査地点に箱尺を立て、陸上からレベル・ワークによって読み取りを行った。このような方法にも水深が浅いために可能であった。

海底の発掘では堆積した土砂等を除去するには、バケットによってすくい上げるか、水流を起こし



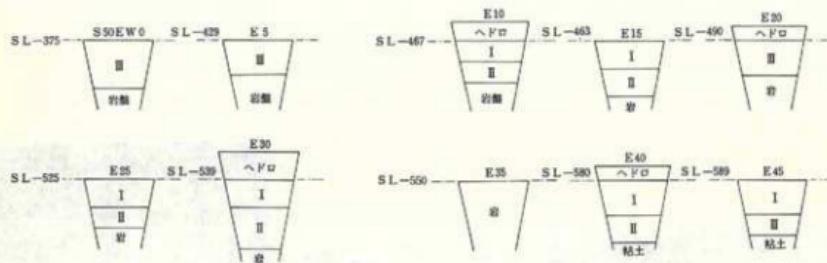
Fig. 19 調査機材
エアリット、コンプレッサー



S-30ライン

土層説明

- I ペドロ、玉石、貝殻を含む。
- II 貝殻及び貝殻の細片、小石を含む暗褐色のシルト層
- *粘土は灰褐色を呈しており、また何も混入していない。



S-50ライン

土層説明

- I ペドロ、玉石、貝殻を含む。
- II 貝殻及び貝殻の細片、小石を含む暗褐色のシルト層
- III I及びIIの混入層
- *粘土は灰褐色を呈しており、またほとんど何も混入していない。

0 20m

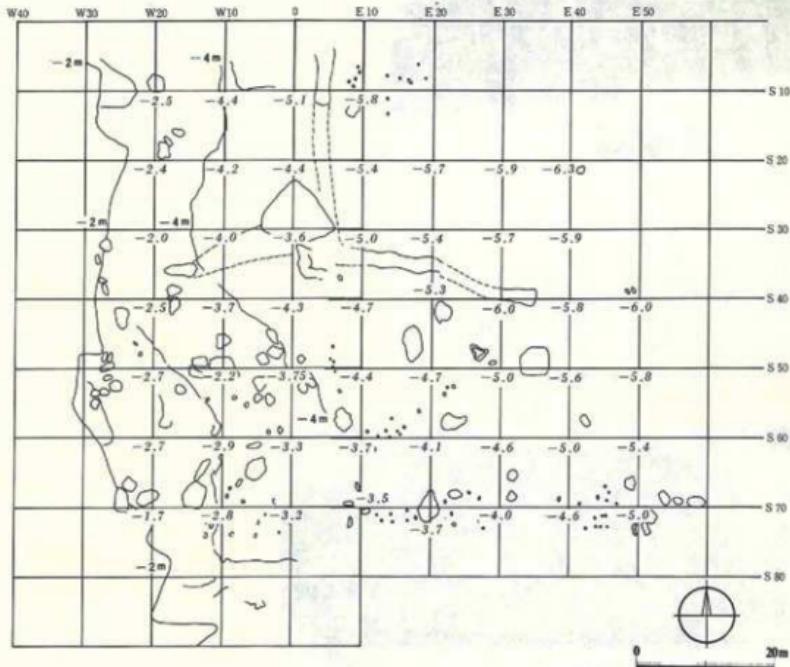
て調査地区外へ押し流すか、あるいはエアーリフトを用いて吸い上げるかであるが、この調査で予想される遺跡の性格は、陶磁器類の散布地であり、遺物包含層までの堆積もさして厚いものではなく、パケットを用いるまでもない。また、水流により押し流す方法は陶磁器類のように比較的軽い遺物をも押し流してしまう恐れがあり、最善の方法としてはエアーリフトによる吸い上げ方式と判断された。

エアーリフトという方法は、陸上に設置したエアコンプレッサーから、内径約24cmのパイプの先端近くに圧縮された空気を送り込む。この空気は膨張して浮力を増しながらパイプの中を上昇する。この時、パイプの先端に強い吸引力が生じ堆積物を吸引し、吐出口から吐き出されるのである。このパイプ内には何等の障害物もないため、万一吸引込まれた遺物も損傷されることなく吐出されて

くる。また、吐出口の先端は、いわゆるドラムカンで組み立てたフロートを作り、その中央に張った網の上に取り付けた。そのフロート上には常時調査員を配置し、吐出物を観察し、もし遺物が吸い上げられた時には、これを拾い上げると同時に、ただちにその地点に潜水し、位置を記録したり周辺部の掘り下げにより一層注意を払うようにした。遺物出土地点は10mごとに張り廻されたロープを基準にして巻尺によって計測し記録した。また、水中カメラ(35M/M版)による記録撮影も行なったが、透視度、透明度も悪いため、もっぱら16M/M広角レンズを用いざるを得なかった。全体的な作業の進捗状況は、陸上の作業も含めてTVカメラで撮影し、ビデオテープに記録するようつめた。

3. 調査の結果

海面上から見ると澄み透って見えるが、発掘が



第5図 発掘開始前海底地形図



Fig. 20 潜水裝備

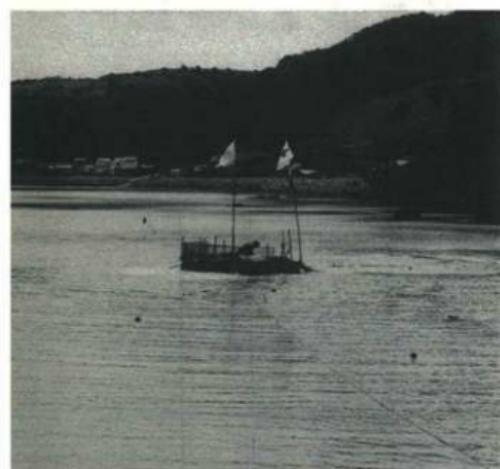


Fig. 21 筏上での遺物の精査

Fig. 22 調査機械 ブレーカー



進むにつれ、ヘドロや土砂が舞い上がり透明度が落ちてくる。潮流や風向に応じてフロートの位置も移動させないと、吐出する土砂が再び海底に沈み、調査地の見透しをさらに悪化させる。遺跡全体を見渡すようなことは不可能であり、この見透しの悪さが調査の精度を大きく左右するのである。

いろいろと工夫をこらしながらこれに対応して調査を進め、完形品を含む多量の陶磁器類を引き上げることができた。これらの遺物が15世紀から19世紀にかけて巾広い時期にわたっているが、その残存していた地点は、調査地のほぼ中心に集中していた。遺物の年代と堆積する層序との関係についても充分に配慮したが、堆積層を細かく分類することはきわめて困難であった。また、きわめて浅いため、波浪による影響を受け、堆積層もそれほど厚くなく、陸上の場合はほどここでは層序がそれほど意味をもつものではないと判断された。一時期のものが集中して残存している様子もなく、海底地盤上の堆積層の厚さから見ても、沈船が残存している可能性はまったく考えられなかった。また、残念ながらこれらの遺物が何故にこの海底に集中的に残存しているかの理由を明確する手掛かりも発掘調査からのみでは得られなかった。海岸付近においては、船を繫留するような施設が設けられていたかどうかについても注意して調査したが、それらしい痕跡も認めることができなかった。

(荒木)

V 出土遺物

本調査で出土した遺物類は、陶磁器を中心に鉄製品、銅製品（古鏡を含む）などが多く量に得られ、中でも陶磁器においては、質・量の面においても道内屈指の貴重な資料がもたらされたと考える。

なお欠損のある遺物は復元を試みて図化した。

1 陶磁器

(1) 瓢類（第6図～第10図）

出土した瓢類は、おおむね次のように区分される。すなわちA類（17世紀前半～末頃）、B類（17世紀後半～18世紀前半）、C類（17世紀末～18世紀中頃）、D類（18世紀前半～中頃）、E類（18世紀中頃～後半）、F類（18世紀末～幕末）、G類（19世紀前半～幕末）、H類（幕末～明治）、I類（明治以降～昭和）である。

では各類に相当する瓢類について検討を加えていきたいと思う。

A類（17世紀前半～末頃）

1～2 肥前の染付碗である。底径4.6cm、器高7.2cmの半球状の碗で、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で海浜風景を描いた山水画で、17世紀中頃のものと思われる。

3 肥前の染付碗である。底径4.8cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し青海波文に欠損部分は墨絵があったものとみられる。17世紀中頃のものと思われる。

4～7 肥前の染付碗である。底径3.6cm、厚手の碗で胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、網目文を施文する。17世紀代のものと思われる。

8～9 肥前の陶器で、底径4.6cm、胎土は茶褐色で精良、釉調は暗茶褐色で高台は無釉である。17世紀前半～中頃のものと思われる。

10 肥前の染付碗である。底径4.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳灰色で焼成不良、山水と折枝文が描かれており、見込部分にも折枝文が施文されている。17世紀後半～17世紀末のものと思われる。

B類（17世紀末～18世紀前半）

11 肥前の染付碗である。器高5.8cm、胎土は乳白色で、釉調は乳青色を呈し、唐草文が施文され、高台裏には「太明年製」が印判刷で施文されている。

12 肥前系の染付碗である。底径4.5cm、胎土は乳白色で精良、焼成は不良。若松が施文され高台裏部分は「太明年製」の字銘が施文されている。17世紀～18世紀前半のものと思われる。

14～20 肥前の京焼風陶器である。底径4.8cm、器高6.5cm、胎土は乳灰白色で精良、釉調は黄褐色を呈し、一部に窯変を呈す。17世紀後半～18世紀前半のものと思われる。

21 肥前の染付碗である。底径4.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で折れ葉文を施文する。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。

22 肥前の染付碗である。口縁径9.8cm、底径4.3cm、器高5.8cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で草花文を手がきしている。高台裏には「福」の字銘が施されている。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。

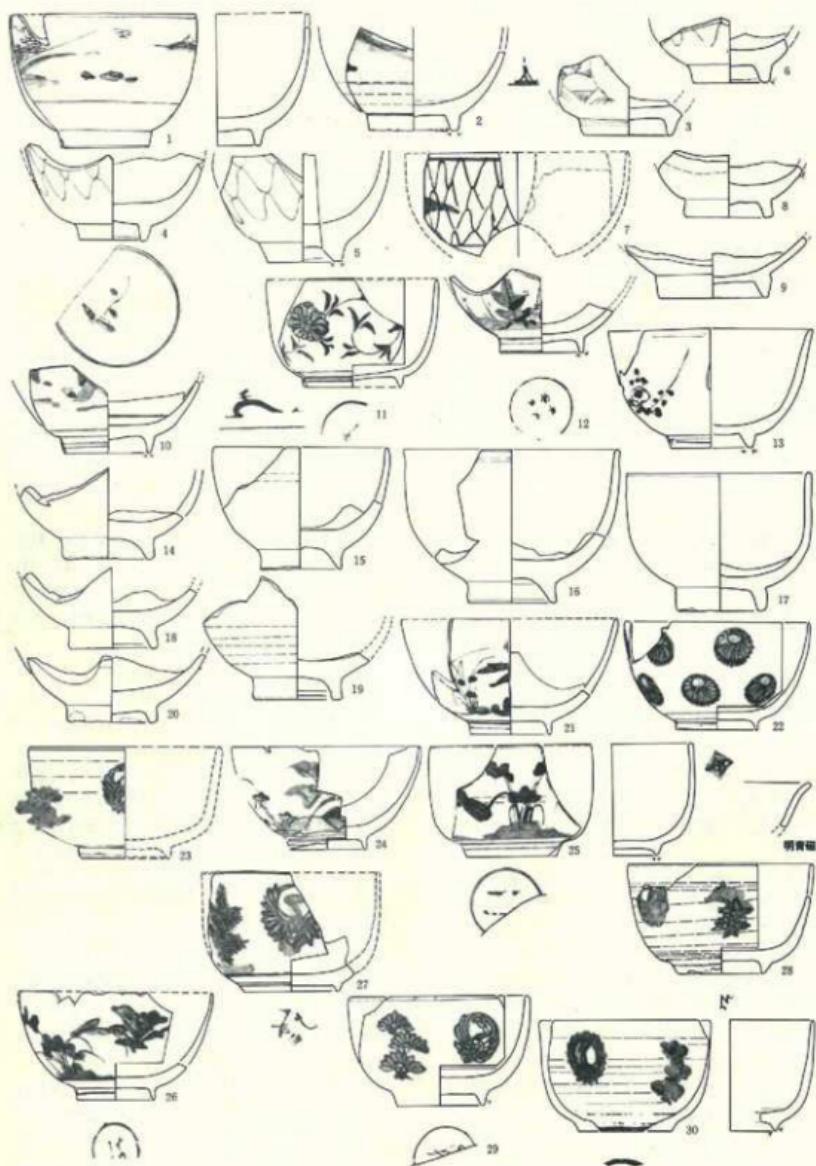
23 肥前の染付碗である。口縁径10.4cm、底径4.7cm、器高6.0cm、湯呑の丸型碗で胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で、コンニャク印判により松と鶴を施文している。17世紀末～18世紀のものと思われる。

24 肥前の染付碗である。口縁径11.0cm、器高5.5cm、底径4.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、草花文を施文する。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。

25 肥前の染付碗である。口縁径8.6cm、底径4.8cm、器高6.0cm、湯呑の丸型碗で胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、草花文が手がきで施文され、高台裏には「太明年製」の字銘が施されている。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。

26 肥前の染付碗である。底径4.2cm、器高5.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、草花文が施され、コンニャク印判による鶴頭が併用されている。高台裏には「太明年製」の字銘が施されている。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。

27～30 肥前の染付碗である。27、28は底径5.0cm、器高6.45cm、湯呑の丸型碗で胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で、コンニャク印判により松と鶴が描かれている。27は高台裏に「太明年製」が字銘で施され、28も高台裏に字銘が施され



第6図 碗

ている。29、30は口縁径9.8cm、底径4.6cm、器高5.9cmとやや高台が小さく、底部も厚手である。施文はコンニャク印判で松と鶴、27、28に比べ量産型の雑器窯で製作されたものであろう。17世紀末～18世紀のものと思われる。

C類（17世紀末～18世紀中頃）

31～32 唐津系陶器の刷毛目碗である。底径4.2cm、器高6.5cm、湯呑の丸型碗で胎土は茶褐色で精良、釉調は暗茶褐色を呈し、一部に焼成時の窯変によると思われる青褐色の色調を残す。17世紀末～18世紀中頃のものと思われる。

33 唐津系陶器の刷毛目碗である。底径3.5cm、器高4.9cm、31、32に比して腰が張り、胎土は赤褐色で精良、釉調は灰赤褐色、見込は蛇ノ目釉はぎである。17世紀末～18世紀中頃のものと思われる。

34 陶胎染付碗である。口縁径10.2cm、底径4.8cm、器高7.3cm、胎土は灰褐色を呈し、釉調は灰緑色を呈す。施文は舟須で山水を描き、釉は化粧がけで、窯は佐世保か波佐美のいずれかであろう。17世紀末～18世紀中頃と思われる。

35～36 京焼風の碗である。胎土は黄灰色で精良、釉調は黄褐色を呈し高台付近は無釉で、山水画が施文されている。17世紀後半～18世紀中頃のものと思われる。

40 肥前系陶器の刷毛目碗である。底径4.4cm、厚手の成形で胎土は暗褐色で精良、釉調は暗茶褐色である。17世紀末～18世紀中頃のものと思われる。

39 肥前の染付碗である。口縁径10.4cm、底径4.0cm、器高5.5cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で、竹の文様が施文されており、見込部分には字銘が施されている。17世紀末～18世紀中頃のものと思われる。

D類（18世紀前半～18世紀中頃）

38、41～45 肥前の染付碗である。口縁径10.0cm、底径4.0cm、器高5.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、厚手の碗である。梅樹文と雪の輪が施文され、38、41に「太明年製」のくずし字銘が施されている。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われ、窯は波佐見あたりの雑器生産窯と推定される。

46 肥前の染付碗である。口縁径6.0cm、底径4.2cm、器高5.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は

乳青色を呈し、梅樹文と雪もち筆を施文し、高台裏には「太明年製」のくずし字銘が施されている。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

47 肥前の染付碗である。底径4.3cm、器高5.3cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で梅と草花を施文し、高台裏には「太明年製」のくずし字銘が施されている。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

48 肥前の染付碗である。口縁径10.0cm、底径4.2cm、器高5.5cm、胎土は茶褐色で精良、釉調は乳青色で梅樹文を施文している。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

49 肥前系の染付碗である。口縁径9.8cm、底径3.8cm、器高5.3cmの厚手碗で、胎土は乳白青色で精良、釉調は乳青色を呈し、萬の葉を施文する。また高台裏には「福」の字銘を施文している。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

50 肥前系の染付碗である。底径3.8cm、器高5.1cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し銀杏と柿を施文する。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

51 肥前の染付碗である。底径4.1cm、器高5.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、いわゆる雨降り文を施し、見込部分は蛇ノ目釉はぎを施している。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

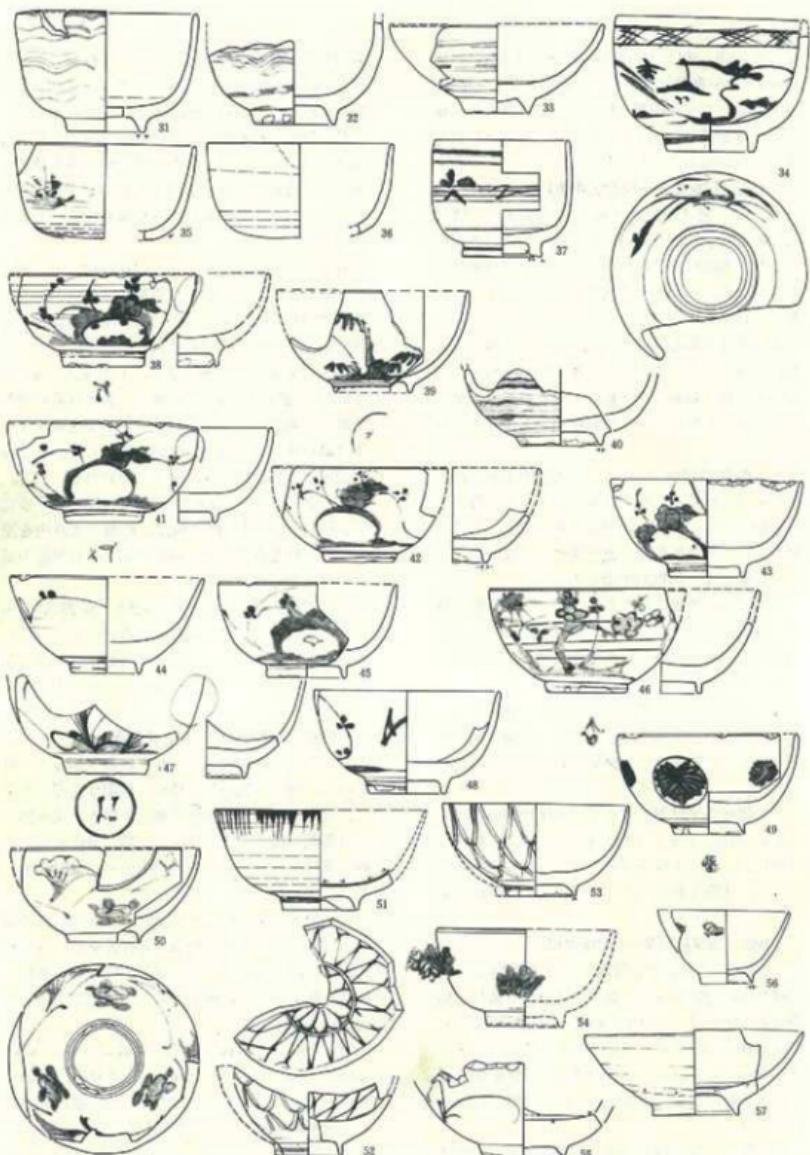
E類（18世紀中頃～18世紀後半）

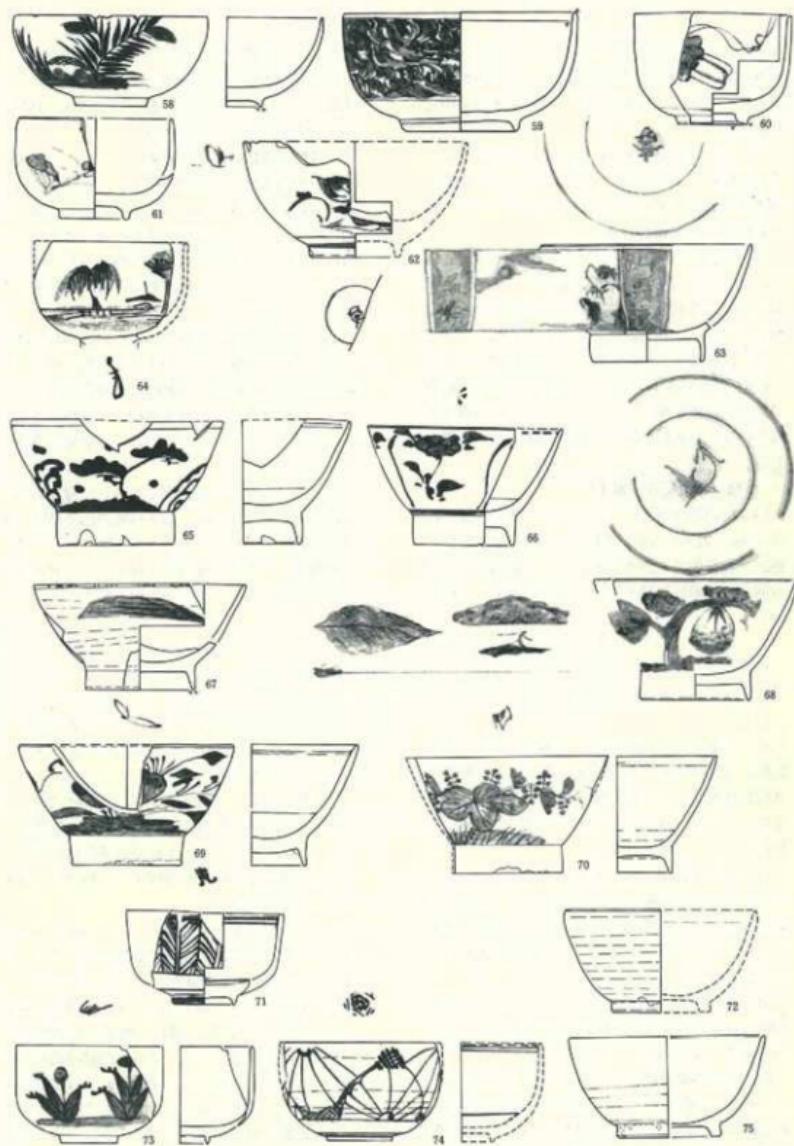
52 肥前の染付碗である。底径3.6cm、器高4.75cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、器形の内面には単線の網目を描き、見込部分には菊花を描く、また外面には割り筆による二重線の網目を施文する。18世紀中頃～18世紀後半のものと思われる。

53 肥前の染付碗である。底径4.3cm、器高5.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈する。52と同様に器形の外面には、割り筆による二重線の網目を施文する。18世紀中頃～18世紀後半のものと思われる。

54 肥前の染付碗である。口縁径9.7cm、底径4.0cm、器高5.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で、コンニャク印判により桐が描かれている。18世紀後半のものと思われる。

55 肥前系の染付碗である。底径4.4cm、器高5.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳灰色を呈





する大碗で、折松葉を施し見込部分は蛇ノ目軸はぎを施している。窓は波佐見あたりの雑器生産窯を推定できる。18世紀前半～18世紀末のものと思われる。

56 肥前系磁器の猪口である。口縁径7.0cm、底径2.6cm、器高3.85cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し花の文様を施している。18世紀代のものと思われる。

57 関西系の碗である。口縁径11.8cm、底径4.6cm、器高4.4cm、胎土は茶褐色で、釉調は透明釉による暗茶褐色で焼成不良。見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀代のものと思われる。

58 肥前系の浅碗である。口縁径10.2cm、底径3.8cm、器高4.3cmの浅碗で、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、ススキないしは葦が施文されている。18世紀中頃～18世紀後半のものと思われる。

F類（18世紀末～幕末）

59 肥前系の蓋ものである。口縁径12.7cm、底径6.0cm、器高6.5cm、胎土は乳白色を呈し精良、釉調は乳青色で、流水文を施し見込部分には時計回りの纏模様跡を残す。18世紀後半～19世紀前半のものと思われる。

60 肥前系の染付碗である。底径3.8cm、器高6.1cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、瓜の文様を呈する。18世紀末～19世紀前半のものと思われる。

61 肥前の染付碗である。口縁径8.2cm、底径3.5cm、器高5.5cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳灰白色を呈し、草花と蝶の文様を施文し、見込部分には字銘が施されている。18世紀後半～19世紀前半のものと思われる。

62 唐津系陶器の染付碗である。底径5.0cm、器高6.3cmの厚手碗で、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で草花文を施文しており、高台には字銘が施されている。18世紀後半～19世紀前半のものと思われる。

64 肥前の染付碗である。胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈する、山水画が施文されており、18世紀末～幕末のものと思われる。

63 肥前の染付碗である。器形はいわゆる広東型の碗で、高台が高く、口縁径11.4cm、底径5.9cm、器高6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、施文は窓絵に仙人図を筆書きし、漢詩と

思われる「孤論、山頭夜」の字が読み取れる。また口縁内側には二重平行線の縁文様が施され、見込部分には「寿」の字銘が施されている。18世紀後半～幕末のものと思われる。

G類（19世紀前半～幕末）

65 肥前染付の広東碗である。口縁径11.4cm、底径6.2cm、器高6.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し波と松の文様が施文されている。口縁内側には二重平行線の縁文様があり、見込部分には「寿」の字銘が施されている。19世紀～幕末のものと思われる。

66 肥前染付の広東碗である。口縁径10.6cm、底径5.4cm、器高6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で清朝風の影響による草花文を施している。口縁内側には二重平行線の縁文様と見込に字銘らしきものが施されている。19世紀～幕末のものと思われる。

68 肥前系染付の広東碗である。口縁径11.2cm、底径6.0cm、器高6.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し茄子と山水が施文されている。口縁内側には二重平行線の縁文様が、また見込部分には鷺が描かれている。19世紀～幕末のものと思われる。

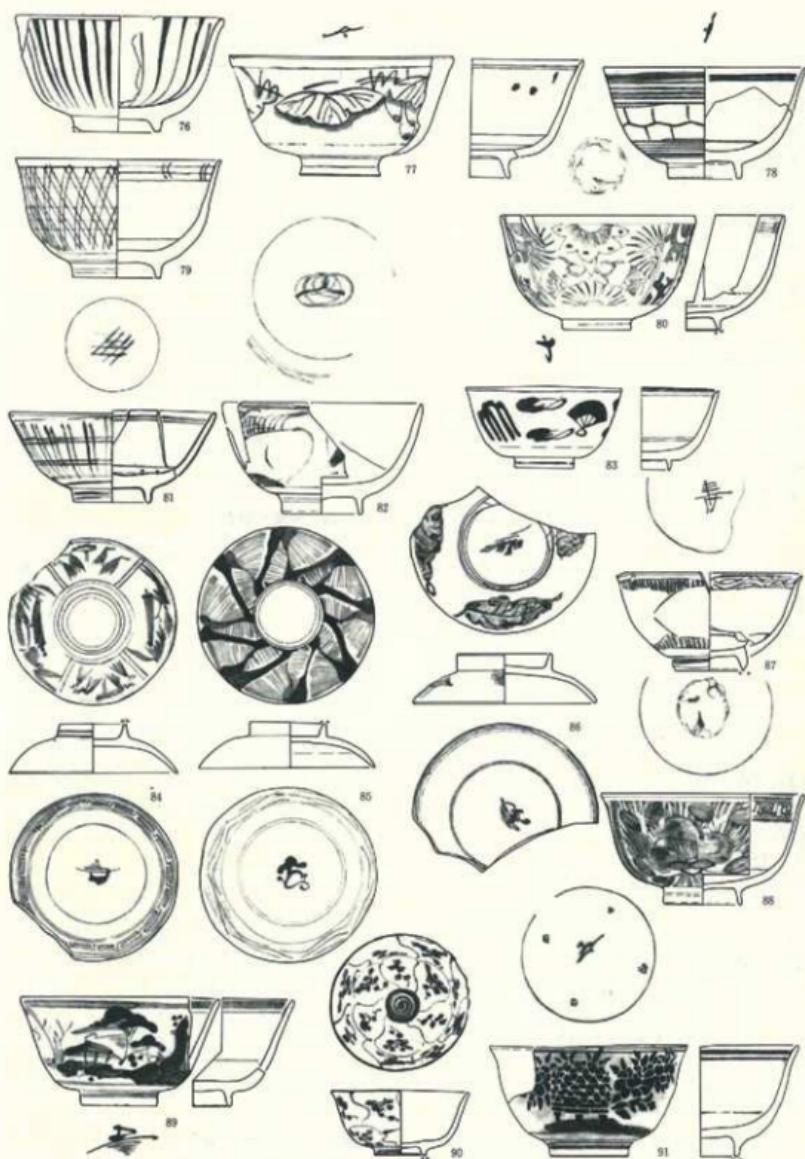
69 肥前染付の広東碗である。口縁径11.7cm、底径6.0cm、器高6.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で草花文を施文し、口縁内側には二重平行線の縁文様を施し、見込部分には鷺文様のくずしと思われる施文が見られる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

70 肥前染付の広東碗である。底径6.0cm、器高5.85cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、山水を施文する。また見込部分は足付きハマによる積み重ねの跡が残存する。19世紀～幕末のものと思われる。

72、75 関西系の陶器碗である。器高5.5cm、胎土は灰褐色で精良、釉調は暗褐色を呈する。高台は無釉である。19世紀代のものと思われる。

71 肥前系の染付碗である。底径3.4cm、器高5.1cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し矢羽根文様が施文されている。口縁内側には大小の二重平行線が施され、見込部分には字銘が施されている。19世紀前半～幕末のものと思われる。

73 肥前系の染付碗である。底径3.0cm、器高5.3cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で草



第9図 碗

花文を施し、見込部分には字銘が施されている。19世紀前半～幕末のものと思われる。

76 濑戸美濃系の端反り碗である。口縁径11.2cm、底径4.6cm、器高6.2cmで、やや端反りの口縁を有する。胎土は乳褐色で精良、釉調は乳灰褐色を呈し、黒と紺色の織文様が施文されている。19世紀～幕末のものと思われる。

77 肥前系の端反り碗である。底径4.4cm、器高6.45cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で葡萄文を施文し、口縁内側の縁文様は二重平行線で、内側にも葡萄が描かれている。また見込部分には鷺のくずし文と思われる施文が見られる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

78 肥前系の染付碗である。口縁径10.0cm、底径4.0cm、器高6.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、平行線の施文を中央部分において亀甲文で切断するような文様で、口縁内側には二重平行線の縁文様と、見込部分に鷺のくずれ文と思われる施文が見られる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

81 肥前系の端反り碗である。口縁径10.8cm、底径3.8cm、器高4.85cm、胎土は乳白色で精良、釉調は灰緑白色を呈し、格子文を施文し、口縁内側に二重平行線の縁文様と見込部分の蛇ノ目釉はき部分にも格子文が施されている。19世紀前半～幕末のものと思われる。

79 肥前系の端反り碗である。口縁径11.0cm、底径4.6cm、器高6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳褐色で斜格子文が施文され、口縁内側に縁文様を施し、見込部分にも斜格子文を施している。19世紀前半～幕末のものと思われる。

82 肥前系磁器の端反り碗である。口縁径10.7cm、底径4.2cm、器高6.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で草の文様が施文されている。見込部分には卷寿の字銘の施文が見られる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

80 肥前の染付碗である。口縁径10.5cm、底径3.7cm、器高6.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で三方割りの線画とだみ筆により唐花文を施文し、口縁内側の縁文様は雷文帯、見込部分には松竹梅が施されている。19世紀前半～幕末のものと思われる。

70 肥前染付の広東碗である。底径6.0cm、器高6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を

呈し葡萄の文様が施文され、口縁内側には二重平行線の縁文様と、見込部分には欠損部分が多く判断がつきかねるが、やはり文様が施文されているようである。19世紀～幕末のものと思われる。

84 肥前系端反り碗の蓋である。口縁径9.0cm、底径3.6cm、器高2.65cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、草花文の施文に縁文様は雷文、見込部分は水辺に岩の文様である。19世紀末～幕末のものと思われる。

85 肥前系端反り碗の蓋である。口縁径9.5cm、器高2.6cm、底径3.8cm、完形品で、釉調は乳青色を呈す、見込部分は唐草の施文が見られる。19世紀末～幕末のものと思われる。

86 肥前系広東碗の蓋である。口縁径9.5cm、器高2.6cm、底径3.8cm、胎土は乳白色で、釉調は乳青色を呈す、施文は木の葉で、見込部分にも施文がみられる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

H類(幕末～明治)

83 濑戸美濃系の端反り碗である。口縁径8.2cm、底径3.2cm、器高4.3cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、肩に源氏香を施文し、口縁内側には大小二重平行線による縁文様が施され、見込部分には字銘を施している。幕末～明治のものと思われる。

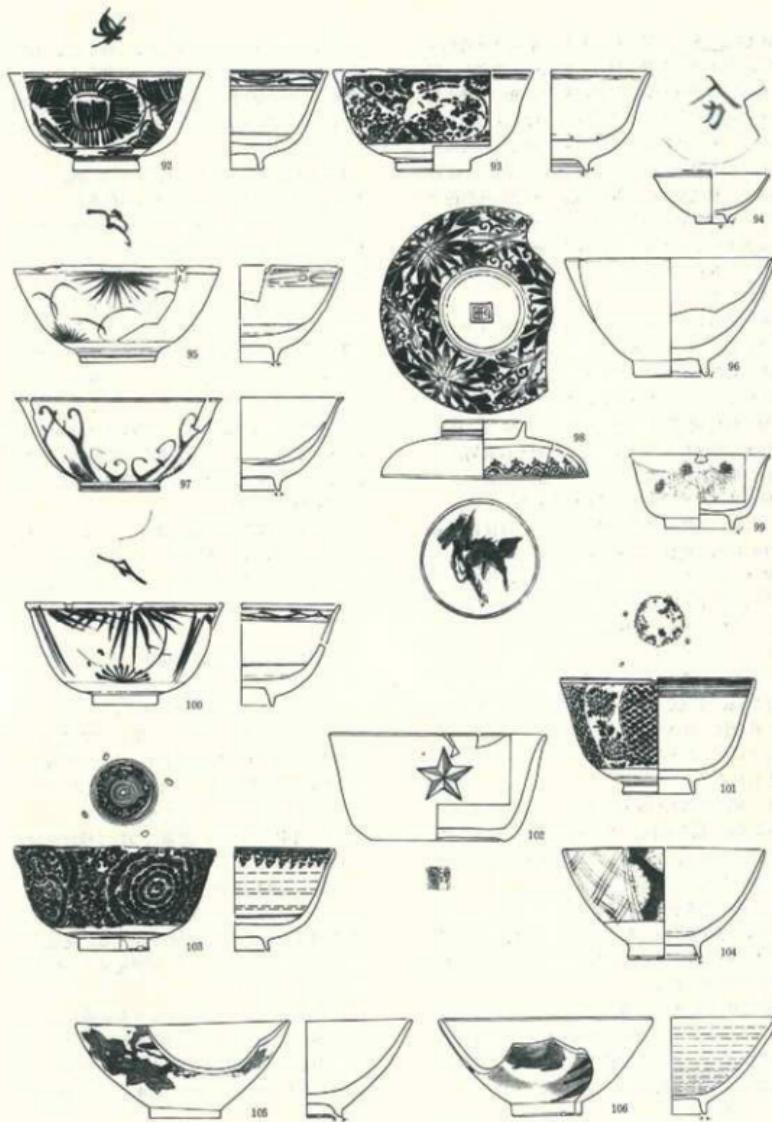
87 濑戸美濃系の端反り碗である。底径3.5cm、器高5.3cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で器外表面の中央部分を細筆書きの扇文を重複させ、縱方向に連続する織文を切断したように施文し、口縁内側にも縁文様の連続文が、また見込部分には「寿」の字銘が施されている。幕末～明治のものと思われる。

89 濑戸美濃系の端反り碗である。口縁径10.7cm、底径4.0cm、器高5.8cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で山水を施文し、口縁内側には太い縦と細い縦の平行線が施され、見込部分には簡略化された海浜風景が描かれている。幕末～明治のものと思われる。

90 濑戸美濃系の猪口である。口縁径7.26cm、底径2.6cm、器高3.55cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、仙芝祝寿文を器面の内外に施している。幕末～明治のものと思われる。

I類(明治以降～昭和)

91 肥前系の端反り碗である。底径4.2cm、器



第10図 碗

高4.95cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、だみ筆で鳥籠と牡丹を型紙刷りで施文し、縁文様は二重平行線で、見込部分には鷺の文様と思われる施文が認められる。なお足付ハマの跡が残存している。明治10年～中頃のものと思われる。

92 潤戸美濃系の端反り碗である。口縁径10.8cm、底径3.6cm、器高5.5cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、型紙刷りによる草花文を施文し、口縁内側には連続縁文様、見込部分には「寿」の字銘が施されている。明治のものと思われる。

93 肥前系の端反り碗である。口縁径11.0cm、底径4.1cm、器高5.58cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、型紙刷りにより窓絵に草花文を施している。明治～大正のものと思われる。

94 潤戸美濃系の鉄軸茶碗である。口縁径11.6cm、底径4.2cm、器高6.5cm、胎土は乳褐色で精良、釉調は赤褐色を呈する。明治～大正のものと思われる。窓は東北の可能性を考慮したい。

95 潤戸美濃系の染付碗である。口縁径11.3cm、底径4.16cm、器高3.35cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、松葉文を施文し口縁内側には連続文による縁文様を施している。見込部分には鷺の文様と思われる施文が認められる。明治～大正のものと思われる。

96 潤戸美濃系の猪口である。口縁径6.2cm、底径1.8cm、器高2.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で見込部分には「入力」の字が読める。星号ではないかと考えられる。明治～大正のものと思われる。

97 潤戸美濃系の猪口である。口縁径7.6cm、底径3.8cm、器高4.1cm、胎土は乳白色で精良、釉は乳白色を呈し、上絵付けで山水を施文する。大正のものと思われる。

98 潤戸美濃系の碗である。口縁径11.4cm、底径4.4cm、器高5.1cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で蘿と羊齒の文様を施文している。大正のものと思われる。

102 潤戸美濃系の軍用食器である。口縁径11.8cm、底径6.6cm、器高5.9cm、胎土は乳白色的白磁で、器の中央には陸軍の星を施文し、底部には印判による銘が施されている。大正～戰中のものと思われる。

100 潤戸美濃系の端反り碗である。口縁径

10.8cm、底径3.5cm、器高5.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は灰乳白色を呈し、三方割りの松葉文を施文し、口縁内側には縁文様が施され、見込部分にも鷺と思われる文様が施文されている。明治のものと思われる。

106 めし茶碗である。底径3.8cm、器高5.4cm、胎土は乳白色で精良、釉は乳青白色を呈し、スプレーにより月と兎が白抜きの樹色、草葉が緑色の配色で施文されている。明治後半～大正のものであろう。

105 めし茶碗である。口縁径11.8cm、底径3.8cm、器高5.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色で楓と鳥が施文され、クロムにより緑色と紺色の二色を配している。明治後半～大正期のものであろう。

98 肥前系の碗蓋である。口縁径11.4cm、底径4.5cm、器高3.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で、花と見込部分に麒麟を施文する。明治期のものであろう。

104 潤戸美濃系のめし茶碗である。口縁径11.2cm、底径4.0cm、器高6.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、ゴム印判により斜格子と菊花文を交互に配している。昭和のものである。

(2) 盆類(第11図～第18図)

出土した盆類は、おおむね次のように区分される。すなわち、A類(16世紀末～17世紀前半)、B類(17世紀前半～中頃)、C類(17世紀後半～18世紀中頃)、D類(18世紀前半～後半)、E類(18世紀後半～19世紀前半)、F類(19世紀末～幕末)、G類(明治～大正)の7期に大別される。

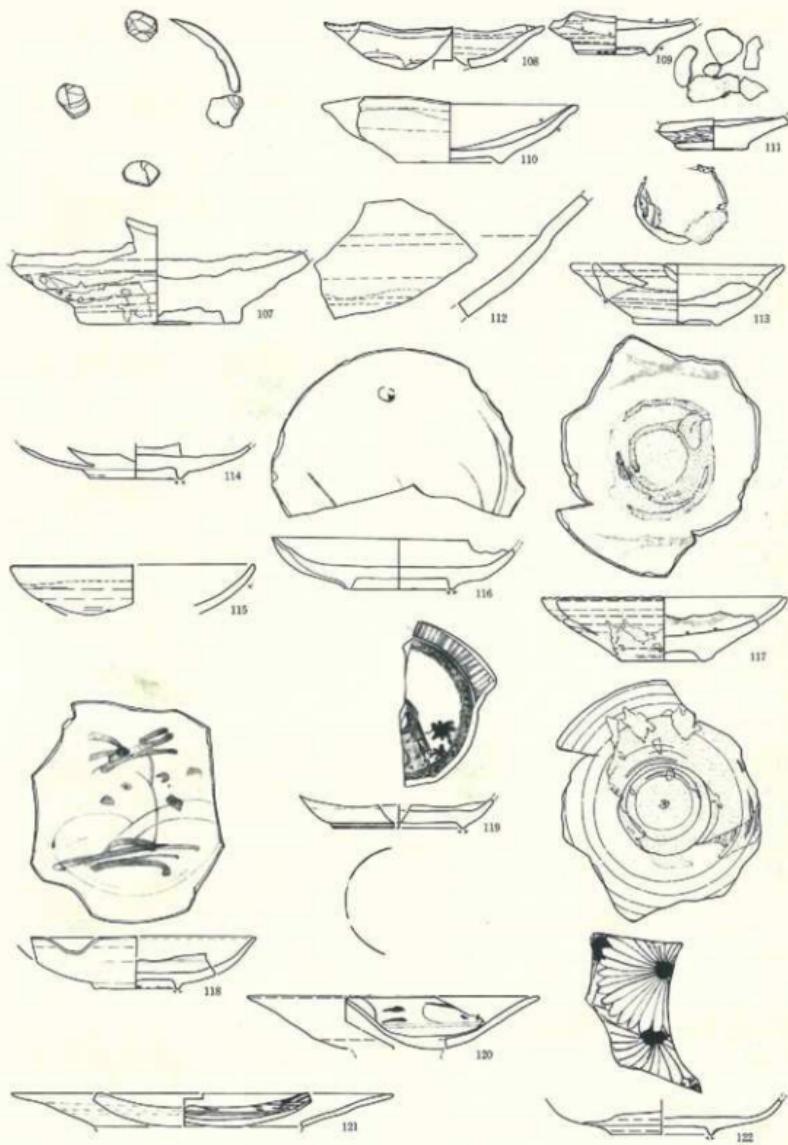
では、各期に相当する盆類について検討を加えていきたいと思う。

A類(16世紀後半～17世紀前半)

107 唐津の大皿である。底径8.8cm、胎土は灰白色で精良、釉調は灰乳緑色を呈する。見込部分には胎土目の跡が残存する。16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。

108 肥前の皿である。胎土は灰茶褐色を呈し精良、釉調はわらびや釉により薄灰褐色を呈す。器形は欠損部が多いものの、残片から輪花の皿と思われる。16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。

112 長津の大皿である。欠損部分が多く器形の



復原是不可能であった。胎土は茶褐色で精良、釉調はわらばい釉により、乳緑色を呈す、おそらく胎土目積みであったと思われる。17世紀前半のものと思われる。

110 越中瀬戸の皿である。おそらく富山あたりの窯であろう。底径5.8cm、器高3.6cm、胎土は明黄褐色を呈し、口縁部のみ鉄釉により暗褐色を呈し、底部付近は無釉。焼成不良で焼きくずれがうかがえる。16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。

B類（17世紀前半～中頃）

111 唐津の皿である。口縁径13.5cm、器高3.5cm、底径5.08cm、胎土は茶褐色で精良、釉調は灰緑色を呈す。17世紀前半のものと思われる。

111 唐津の皿である。底径3.95cm、胎土は灰白色を呈し精良、釉調は乳緑色を呈す。見込部分に砂目積みの跡が残存し、底部は糸引きである17世紀前半のものと思われる。

113 唐津陶器の小皿である。口縁径11.75cm、器高3.3cm、底径4.9cm、胎土は灰茶褐色を呈し精良、釉調は乳緑色を呈す。見込部分には砂目積みの跡が残存する。17世紀前半のものと思われる。

109 肥前の皿である。底径4.1cm、胎土は茶褐色で精良、釉調は灰茶褐色を呈し、見込部分は蛇ノ目釉はぎである。17世紀前半のものと思われる。

114 唐津の皿である。底径5.0cm、型うち成形で砂目積み、胎土は灰茶褐色で精良、釉調は灰乳緑色を呈す。17世紀前半のものと思われる。

115 高取焼の陶器小皿である。胎土は乳白色を呈し精良、口縁部のみわらばい釉の釉がかりがあり乳白色を呈す。17世紀代のものと思われる。

116 肥前の染付皿である。底径6.0cm、器高2.75cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈す。施文は草花文であろう。17世紀中頃のものと思われる。

118 肥前の染付皿である。底径4.5cm、器高2.8cm、胎土は乳白色で精良、灰白色を呈し、焼成不良、施文は草花文である。17世紀中頃のものと思われる。

119 肥前の染付皿である。底径4.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈す。施文は鳥と手彫りの波頭である。17世紀中頃のものと思われる。

123 肥前の青磁染付皿である。底径7.2cm、器

高4.1cm、胎土は乳白色で精良、釉調は濃緑色を呈し、梅花文を施文している。17世紀中頃のものと思われる。

126 唐津刷毛目の大皿である。底径10.6cm、胎土は暗褐色を呈し精良、釉調は灰黄緑色を呈し銅緑釉と鉄釉の二彩がけで、砂胎土目である。17世紀代のものと思われる。

C類（17世紀後半～18世紀中頃）

124 肥前の染付皿である。口縁径13.2cm、器高3.4cm、底径3.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、折技文を施文する。見込は蛇ノ目釉はぎで、17世紀後半～18世紀中頃のものと思われる。

125 肥前の染付皿である。口縁径13.2cm、器高4.2cm、底径4.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳灰緑色を呈し、梅花文を施文する。やはり見込は蛇ノ目釉はぎで、17世紀後半～18世紀のものと思われる。

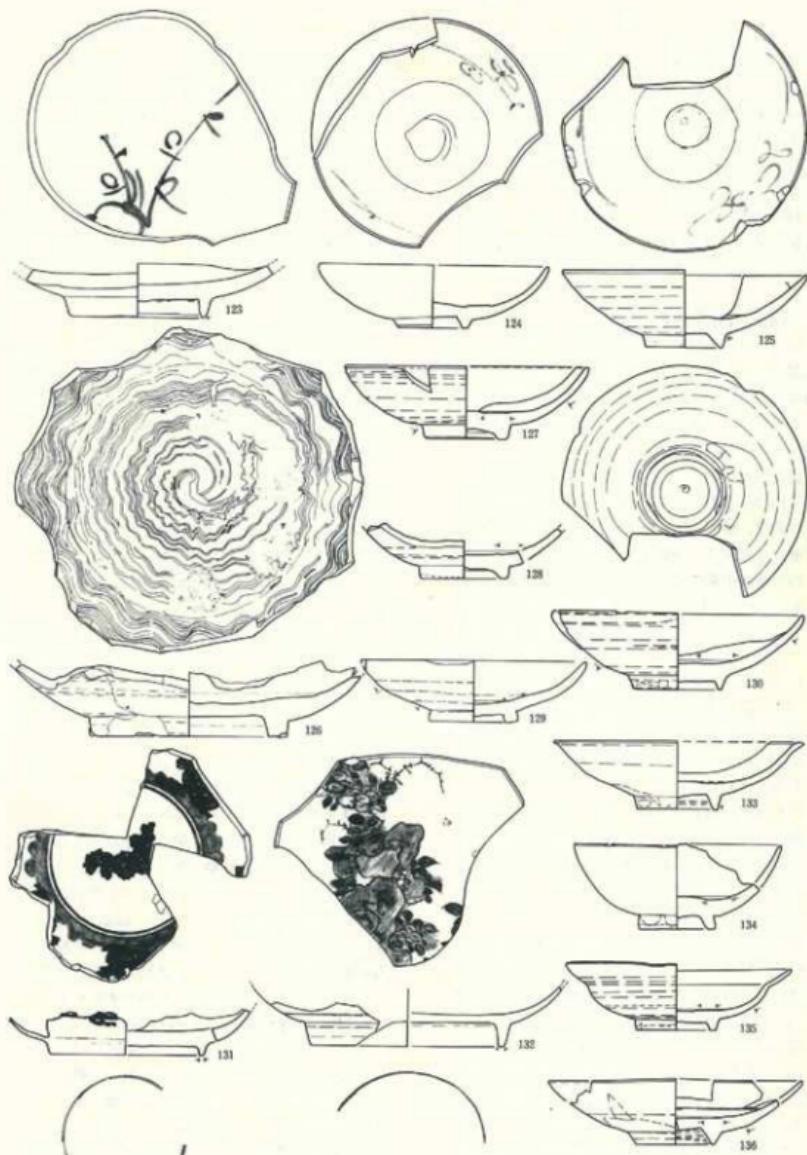
127～130 肥前の皿である。口縁径13.2cm、器高3.9cm、底径4.6cm、胎土は茶褐色で精良、釉調は内面に銅緑釉で乳灰緑色を呈す、外面は高台付近が透明釉がけで、見込は蛇ノ目釉はぎを呈す。17世紀後半～18世紀前半のものと思われる。窯は内の山窯あたりと思われる。

133 肥前の白磁皿である。口縁径13.6cm、器高3.7cm、底径4.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色である、高台は無釉で見込部分は蛇ノ目釉はぎである。17世紀後半～18世紀中頃のものと思われる。

134 肥前の皿である。口縁径11.2cm、器高4.6cm、底径4.2cm、胎土は灰黄白色で精良、釉調は透明釉がけで灰黃色を呈す、焼成は不良である。見込は蛇ノ目釉はぎで17世紀後半～18世紀中頃のものと思われる、窯は内ノ山窯あたりと思われる。

135 肥前の皿である。口縁径12.2cm、器高3.7cm、底径4.3cm、胎土は灰白色で精良、釉調は灰赤褐色を呈し、口縁部分はやや端反りする。釉は透明釉と銅緑釉の流しがけで、砂目積みである。17世紀後半～18世紀中頃のもので、窯は内ノ山窯と思われる。

136 肥前の染付皿である。口縁径13.8cm、器高3.6cm、底径4.2cm、胎土は乳白色を呈し精良、釉調は乳青色を呈す。高台は無釉で見込は蛇ノ目釉はぎを呈し、欠損しているものの絵付であると思



第12図 四

われる。17世紀後半～18世紀前半のものと思われる。

143 濑戸美濃系の陶器皿である。底径7.6cm、胎土は灰白色で精良、釉調は灰褐色を呈し、型紙刷りで柳文を施文する。高台は無軸である。17世紀後半～18世紀のものと思われる。

145 肥前の中皿である。器高4.4cm、胎土は灰白色で精良、釉調は乳白色を呈す。見込は蛇ノ目軸はぎである。17世紀～18世紀中頃のものと思われる。

D類 (18世紀前半～後半)

137～141、144 肥前の皿である。口縁径13.0cm、器高3.8cm、底径4.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、割り筆により斜格子を施文する、見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀中頃～後半のものである。

142、146、148～151 肥前の白磁皿である。口縁径13.2cm、器高3.4cm、底径4.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は灰白色を呈す。見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀前半のものと思われる。

152 肥前の染付皿である。口縁径11.9cm、器高2.5cm、底径3.95cm、胎土は乳白色で精良、釉調は灰白色を呈す、折技文を施文しており18世紀前半のものと思われる。

157 肥前の白磁染付皿である。口縁径12.0cm、器高3.5cm、底径3.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、折技文を施文する。見込部分は蛇ノ目軸はぎで高台は無軸である。18世紀中頃のものと思われる。

138、140 肥前の染付皿である。口縁径13.0cm、器高4.1cm、底径4.5cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳緑白を呈し、割り筆により斜格子文を施す、なお見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀中頃～後半のものと思われる。

153 肥前の白磁皿である。底径4.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色で高台は無軸。見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀代のものと思われる。窯は内ノ山窯であろう。

156 関西系の皿である。口縁径12.8cm、器高4.1cm、底径4.8cm、胎土は乳灰白色で精良、釉調は乳緑色を呈し高台は無軸。見込部分は蛇ノ目軸はぎである。18世紀代のものである。

154 関西系の陶器皿である。口縁径11.6cm、器高4.4cm、底径4.3cm、胎土は灰褐色で精良、釉調

は緑白色を呈す、18世紀代のものと思われる。

161～164 肥前の染付皿である。口縁径13.4cm、器高4.85cm、底径7.6cm、胎土は灰白色で精良、釉調は乳青白色を呈す、施文は雪の輪と草花文で見込部分は五弁花、高台裏は「福」字銘を施している。18世紀前半～18世紀後半のものと思われる。

165～168 肥前の染付皿である。口縁径13.2cm、器高4.4cm、底径8.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈す、施文は宝文と雪もち笹で、見込部分は五弁花、高台裏には字銘が施されている。18世紀中頃のものと思われる。

169 肥前の染付皿である。口縁径14.0cm、器高4.1cm、底径4.2cm、胎土は乳灰色で精良、釉調は乳灰白色を呈す、施文は竹と宝文で高台裏は字銘が入るものと思われる。また口縁は輪花である。18世紀中頃～18世紀後半のものであろう。

170～171 肥前の染付皿である。口縁径13.6cm、器高3.0cm、底径7.3cm、胎土は乳青白色で精良、釉調は乳白色を呈し、施文は唐草で見込部分は五弁花である。また見込部分に蛇ノ目軸はぎを施している。18世紀中頃～18世紀後半のものと思われる。

172 肥前の大皿である。口縁径22.2cm、器高6.6cm、底径5.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、草花文を施文する。見込部分は蛇ノ目軸はぎを呈し。18世紀前半～18世紀中頃のものと思われる。

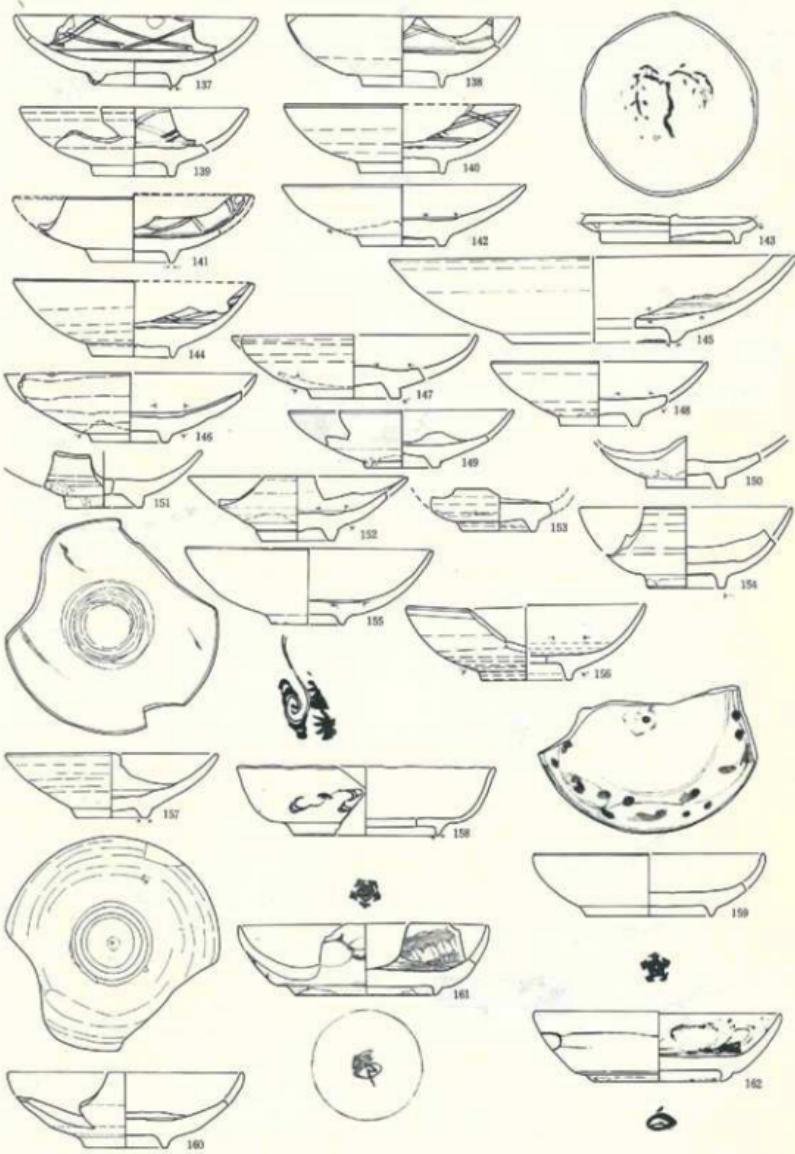
174 肥前の染付大皿である。底径14.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は薄青色を呈し、唐草文を施文する。18世紀前半のものと思われる。

173 唐津の大皿である。胎土は赤褐色で軟質、釉調は白化粧がけと鉄釉が施されている。また高台は面取りである。18世紀代のものと思われる。

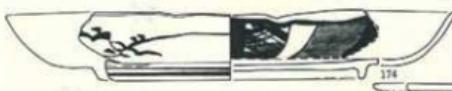
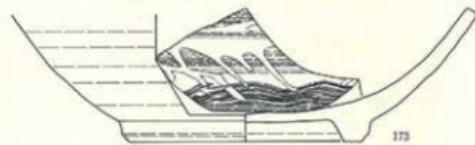
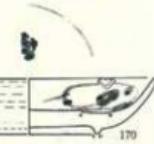
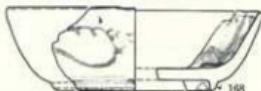
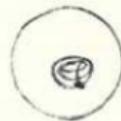
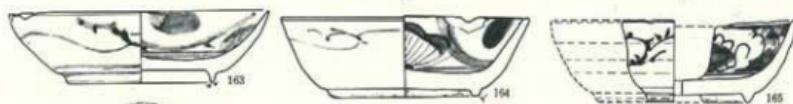
175 関西系陶器の大皿である。器高4.3cm、底径9.0cm、胎土は灰色でやや軟質、釉調は灰緑色で、透明釉と鉄釉がけである。見込部分は蛇ノ目軸はぎで高台は無軸。18世紀代のものと思われる。

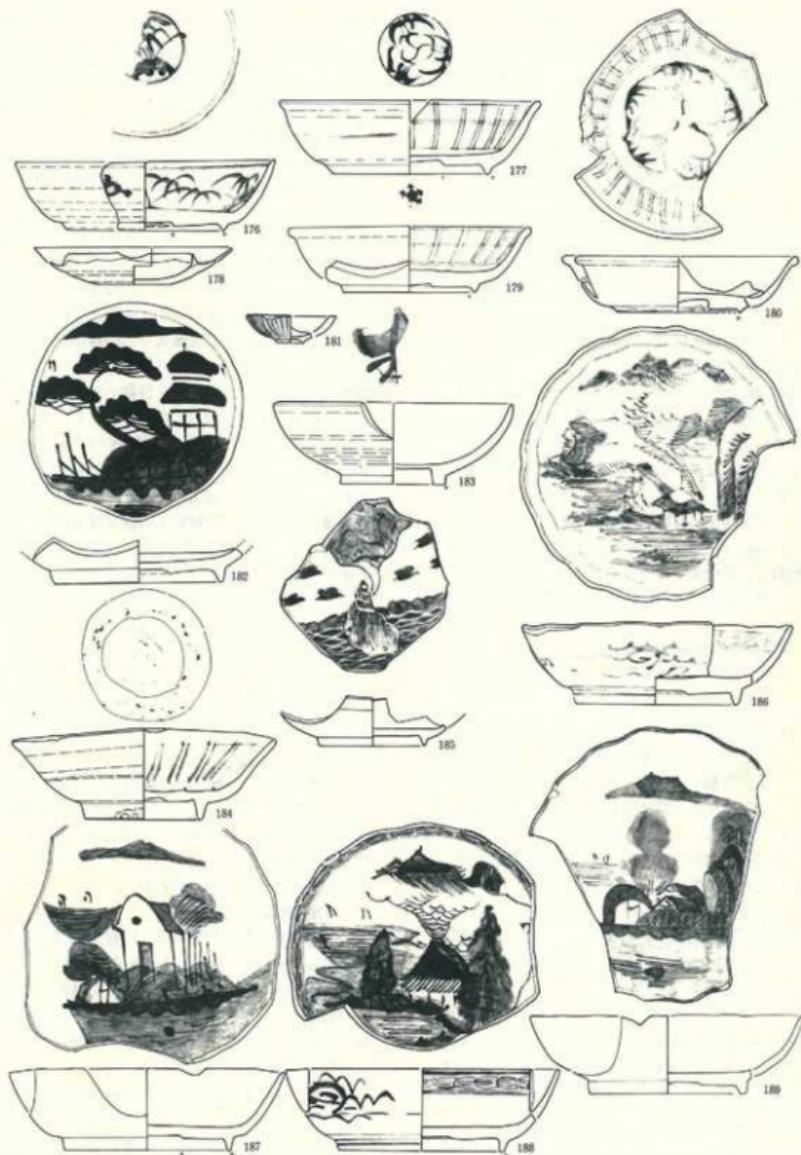
E類 (18世紀後半～19世紀前半)

176 肥前系の染付皿である。口縁径13.8cm、器高3.8cm、底径8.4cm、胎土は乳赤褐色で精良、釉調は薄緑灰色を呈し、雪の輪と竹を施文する。見込部分の施文もやはり雪の輪と竹である。高台は蛇ノ目軸はぎを呈する。18世紀後半～19世紀前半のものと思われる。



第13図 盆





177 肥前系の染付皿である。口縁径14.0cm、器高3.95cm、底径8.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、割り筆による格子文と見込部分に竹を施す。また足付ハマの跡を残す。高台は蛇ノ目釉はぎを施している（蛇ノ目凹型高台）。18世紀～19世紀後半のものと思われる。

179 肥前系の染付皿である。口縁径13.0cm、器高3.55cm、底径7.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、施文は176と同じ格子文で、見込部分はコンニャク印判による五弁花を施している。見込部分、高台とも蛇ノ目釉はぎである。18世紀末～19世紀前半のものと思われる。

180 肥前系の染付皿である。口縁径12.4cm、器高3.0cm、底径6.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、格子文と見込部分に竹を施している。また見込部分には足付ハマの跡を残す。高台は蛇ノ目釉はぎである。18世紀末～幕末のものと思われる。

178 関西系の灯明皿である。口縁径10.6cm、器高2.0cm、底径3.8cm、胎土は灰黄褐色でやや軟質、釉調は黄褐色を呈する。裏面には墨書きが施されているが判読不能である。18世紀～幕末のものと思われる。

F類（19世紀前半～幕末）

184 肥前系の染付皿である。口縁径14.0cm、器高4.9cm、底径6.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、177、179同様の格子文を施文し、見込部分にも格子を施している。また見込部分は蛇ノ目釉はぎを施しているものの、釉はぎ部分に滑石の付着が認められる。なお高台も蛇ノ目釉はぎであるが、やはり焼成時の付着跡を残している。また器形自体も焼きくずれが認められる。19世紀末～幕末のものと思われる。

185 肥前の染付皿である。底径5.6cm、胎土は乳白色を呈し精良、釉調は乳青白色で、墨はじきにより、波と巻貝と千鳥を施文している。19世紀前半～幕末のものと思われる。

187 肥前系の染付皿である。口縁径14.8cm、器高4.4cm、底径8.8cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳綠白色で、口縁は輪花で口堵、施文は山水である。また高台は蛇ノ目釉はぎを施している。19世紀～幕末のものと思われる。

186 肥前系の染付皿である。口縁径14.3cm、器高4.35cm、底径8.35cm、胎土は乳白色で精良、釉

調は乳青白色で、口縁は輪花、施文は山水で上絵は赤色顔料による梅花文を施し、雷文を縁文様とする。高台裏は中央を蛇ノ目釉はぎとし、本来は無釉である。19世紀～幕末のものと思われる。

189 肥前系の染付皿である。口縁径14.8cm、器高4.2cm、底径8.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、山水文を施文する。口縁部分は187、186と同様の輪花で、高台裏底の蛇ノ目釉はぎも186と同様である。

188 肥前系の染付皿である。口縁径14.6cm、器高4.45cm、底径8.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で、山水文を施文し、口縁部分は雷文に似た連続文を施し、やはり輪花である。また高台裏は186、189と同様に蛇ノ目釉はぎを施している。19世紀前半～幕末のものと思われる。

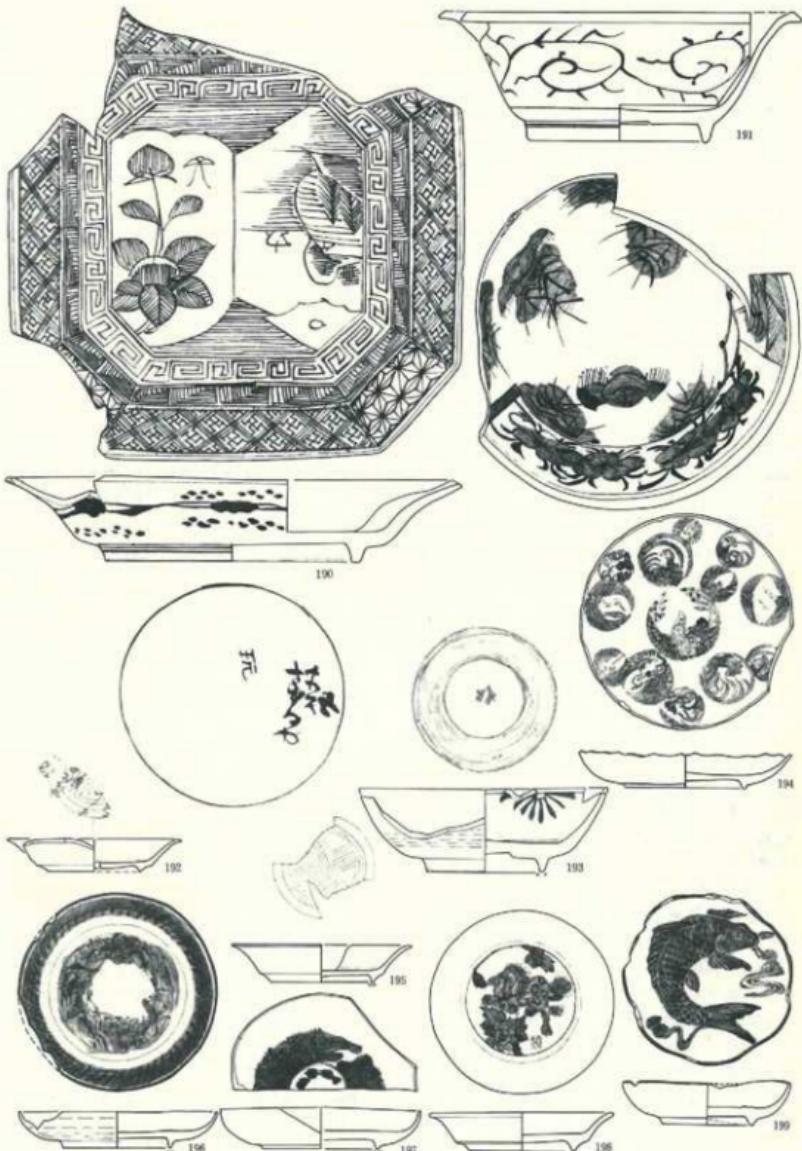
190 肥前の角皿である。口縁径24.7cm、器高4.45cm、底径13.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈す。施文は山水文と蝶、麻の葉が窓絵風に施文され、口縁直下の縁文様も四方棒と水波文、変形のうず巻文、そして雷文の三段重ねである。またこれらはすべて線描きであり、当時としては高級品と思われる。なおこの皿には焼き継ぎの跡が残っているのも大きな特徴で、船ガラスのフリトによる接合焼き継ぎの跡かと思われる。また高台裏には「玩」の字銘の他に、墨書きの跡が認められるが、これは焼き継ぎ依頼人を表したものと思われる。19世紀前半～幕末のものと思われる。

191 肥前系の鉢皿である。口縁径19.6cm、器高7.0cm、底径10.5cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で筆と鳥の施文に、縁文様は四区画で草花と筆とを交互に施しているものと思われる。19世紀末～幕末のものと思われる。

G類（明治～大正）

193 肥前系の染付皿である。口縁径13.4cm、器高4.45cm、底径6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈す、施文は草花文で見込部分は蛇ノ目釉はぎで、中央にはやはり草花文と思われる施文が認められる。高台裏底も蛇ノ目釉はぎである。幕末～明治のものと思われる。

201 瀬戸美濃系の皿である。口縁径11.2cm、器高2.35cm、底径7.4cm、胎土は白色で精良、釉調は乳青色を呈し、山水を施文する。また高台裏には「文化元製」の字銘が入る。明治のものと思わ



れる。

195、192 潤戸美濃系の白磁小皿である。口縁径9.7cm、器高2.05cm、底径5.6cm、胎土は乳白色で精良、施文は寿を表わしたものである。また192には上絵付の文字が認められる。明治のものと思われる。

198 潤戸美濃系の小皿で、完形品である。口縁径10.0cm、器高2.1cm、底径5.7cm、釉調は乳白色を呈す。施文は見込部分に陰刻の型紙刷りにより牡丹と唐獅子を施している。明治のものと思われる。

196 潤戸美濃系の小皿である。口縁径10.9cm、器高1.95cm、底径5.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、施文は草花文を施している。明治以降のものと思われる。

199 潤戸美濃系の小皿である。口縁径9.1cm、器高2.45cm、底径4.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色で、型押しにより鶴を施文する。なお口縁は輪花であり、高台裏には判読出来ないが墨書きが認められる。明治のものと思われる。

200 潤戸美濃系のクロム青磁である。口縁径11.2cm、器高は1.9cm、底径6.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は内面がガラス質の青緑色で、外面は乳白色で、施文は寅と竜である。明治～大正のものと思われる。

214 潤戸美濃系の小皿である。口縁径10.4cm、器高2.0cm、底径6.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色であり、施文は銅版転写で梅と竹、鶴である。縁文様は雷文と笹を施文する。明治～大正のものと思われる。

211 潤戸美濃系の小皿である。口縁径11.0cm、器高2.0cm、底径5.7cm、胎土は乳白色を呈し精良、釉調は乳青白色を呈す。施文は銅版転写による柿文である。明治～大正のものと思われる。

213 潤戸美濃系の白磁小皿である。口縁径10.4cm、器高2.25cm、底径5.65cm、胎土は乳白色で精良、釉調は白色で上絵付により魚文を施文する。明治～大正のものと思われる。

182 肥前の皿である。底径8.8cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で、施文は山水である。欠損しているが口縁はおそらく輪花であろう。高台は蛇ノ目輪はぎである。明治のものと思われる。

202 肥前系の皿である。口縁径14.2cm、器高3.8cm、底径7.3cm、胎土は乳白色で精良、釉調は濃青色で山水を施文し、焼成不良。高台は蛇ノ目

輪はぎである。明治のものと思われる。

207 肥前系の皿である。口縁径14.7cm、器高4.2cm、底径8.9cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で、施文は牡丹と石榴、蝶である。高台は蛇ノ目輪はぎを施している。明治～大正のものと思われる。

208 肥前系の皿である。口縁径14.4cm、器高4.1cm、底径9.0cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色で型紙刷りにより柿を施文する。高台は蛇ノ目輪はぎである。明治～大正のものと思われる。

204 肥前系の皿である。口縁径14.8cm、器高3.9cm、底径8.2cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色で、型紙刷りにより菊花文を施文する。高台は蛇ノ目輪はぎである。明治～大正のものと思われる。

203 肥前系の皿である。底径8.7cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色で型紙刷りにより松竹梅を施文する。高台は同じく蛇ノ目輪はぎである。明治～大正のものと思われる。

206 肥前系の皿である。口縁径14.6cm、器高4.3cm、底径8.6cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳青白色を呈し、施文は松竹梅である。見込部分はやはり蛇ノ目輪はぎを施している。明治～大正のものと思われる。

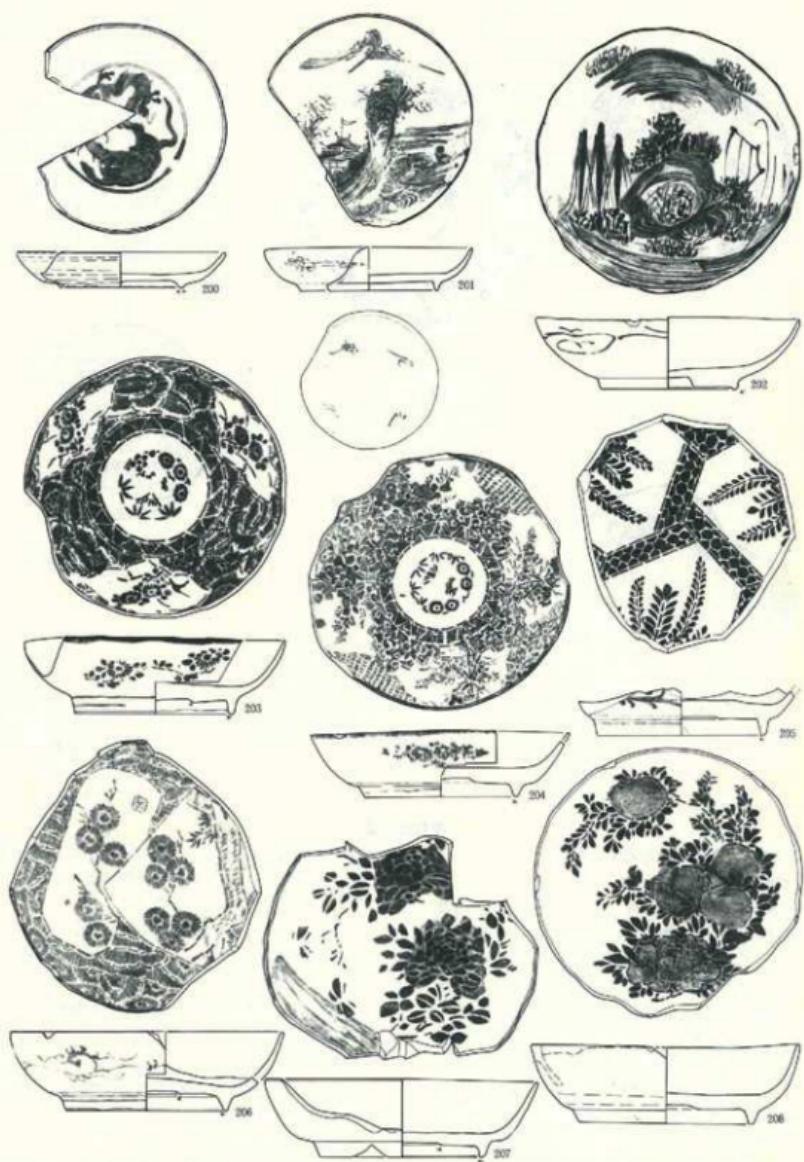
212 潤戸美濃系の皿である。口縁径13.4cm、器高2.3cm、底径7.3cm、胎土は乳白色を呈し精良、釉調は乳白色で、銅版転写により「福禄寿」の字銘を施文する。明治～大正のものと思われる。

209 潤戸美濃系の皿である。口縁径11.8cm、器高2.3cm、底径6.8cm、胎土は乳茶褐色で精良、釉調は乳青白色で、型紙刷りにより竹とすずめを施文する。なお高台裏底は菊花文である。明治～大正のものと思われる。

210 潤戸美濃系の皿である。口縁径15.3cm、器高4.75cm、底径9.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色を呈し、ゴム印刷により梅花と水翠文、窓絵は仙人画であり、見込にも施文がみられる。高台は蛇ノ目輪はぎである。昭和に入ってからものであろう。

215 潤戸美濃系の皿である。口縁径17.55cm、器高5.4cm、底径8.4cm、胎土は乳白色で精良、釉調は乳白色で墨絵の上絵付けである。高台は蛇ノ目輪はぎを施している。明治～大正のものと思われる。

(石原)



第17図 四



第18図 皿

(3) 碗、皿から見た若干の考察

碗類について

碗類の登場は17世紀代に入ってからで、肥前の染付碗を中心に使用されたらしく、いわゆる丸碗のタイプが多い。B類で注目したいのが京焼風陶器の出現であり、出土数も多いことから、この地に一括して流入し、使用されたことが推定される。またB類の特徴としてはコンニャク印判による鶴や松文を施す碗類が増加する点である。

このタイプには二種類の器形が存在するが、碗の高台径が大きく、薄手の方方が高級品で、肉厚の高台径が小さいものが雑器生産窯によるというから、同時期に商品価値の高いものと安価のものが存在したことになる。

C類の特徴としては、唐津系陶器の刷毛目碗がみられることで、やはり京焼風陶器と肥前の染付が併存して使用されていることである。

D類に入ると、やはり肥前の染付碗が主流となり、その傾向がE類へと受け継がれていく。但し、E類では若干はあるが関西系が混じりはじめ、染付も肥前の影響を受けた肥前系へと移行し始めている点は注目したい。

F類に入ると、いわゆる蓋ものが登場し、器形もそれまでの丸碗に広東碗が混じり始め、窯は肥前を中心で肥前系が主流をしめている。

G類では広東碗がさらに増え、足付ハマが見られるようになる。また瀬戸美濃系が混じり始めるのもこの頃からで、染付碗も肥前系の割合が増加

し、肥前は広東碗のみで、肥前系は端反り碗がその主流となる。

H類からは瀬戸美濃系の端反り碗が中心となり肥前を凌駕して瀬戸美濃全盛期を迎えるようとしており、I類では肥前系の端反り碗を除けば、すべてが瀬戸美濃系に逆転してしまう。

皿類について

A類は16世紀後半から存在し、その中心はA、B類にみるように、唐津の皿で、B類から肥前の染付皿が混じり始める。またB類で福岡の高取焼が入っており、生産地が西北九州に限定されている点は注目される。

C類からは本格的に肥前の染付皿があり、その全盛期を迎えるまでD類へと受け継がれる。但し、C類に瀬戸美濃系の陶器皿と、D類に閩西系の陶器皿がみられるので注目しておきたい。またD類の特徴としては、雑器窯によると思われる斜格子を施した肥前の染付皿と、いわゆる三平皿の器形を有する染付皿が大量に流入されている点であろう。

E類からは肥前系の染付皿が主流となり始め、F類では肥前の高級品を除けば、すべてが肥前系にとって変わる。G類からはこの肥前系に混じって瀬戸美濃系が加わるようになり、瀬戸美濃系全盛を迎えることになる。

碗、皿の両類から見た場合

碗、皿ともに肥前、唐津を中心とする西北九州の窯から生産されたものが最初に登場し、18世紀中頃から、肥前系がその主流をしめるようになり幕末以降は瀬戸美濃系がその主流となっている。従って、大別すると肥前、肥前系、瀬戸美濃系へと移行している姿が伺える。
(石原)

(4) 摺鉢、その他の陶磁器

碗、皿以外の陶磁製出土品は摺鉢、甕、水差、片口、壺、鉢、盤、徳利、瓶、焰灯、行平、土瓶、素焼土器、瓦、陶鑄等である。以下主なものについて若干ふれる。

摺鉢：唐津及び肥前系、瀬戸・美濃系、備前系、越前系、不明のものの各群があり若干の類別が可能である。

第一群唐津及び肥前系

A類 口端を折返したつば状の凸帯を有し、底部糸切底を基本とするもの。内面に胎土目と思われる重ね積みの痕がある。内外口唇直下に鉄釉が

施される。やや薄手陶質のもの。口縁の形態から二種に底部の形態から三種に分かれるがこれらを合せ四種を推測した。

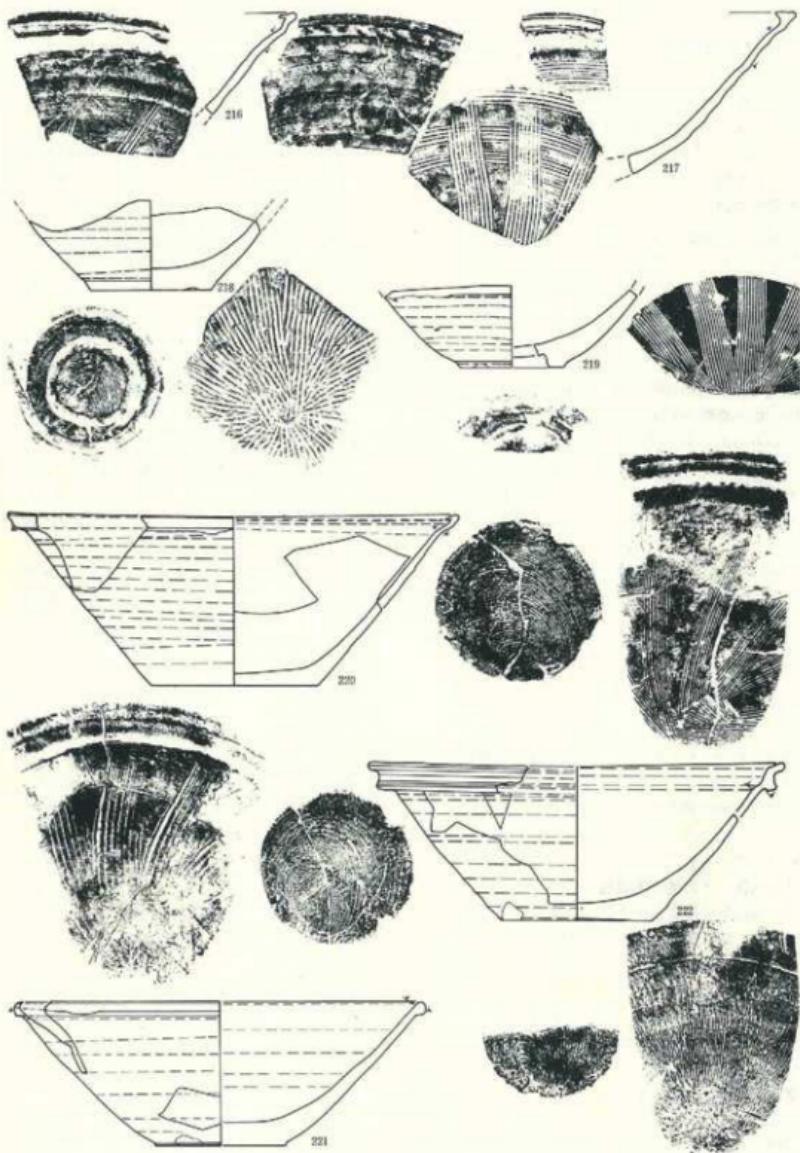
A-1 口縁外側が一旦くびれ凹線状を呈し、以下底部に至る。胎土は陶質である。底部形態は不明であるが次の2、3のいずれかの可能性がある。尚217は腰部が一旦膨みをもって底部に至るもので、内外とも現存部全面に鉄漿がかけられ、口縁部に灰釉がかけられ、暗い緑に発色している。216は内底から口唇下3~5cmまで、軽い弧を描いて8条1単位前後の卸し目が引き揚げられているが、卸し目には細い沈線状のものと凹線状のものがある。口縁外側の鉄漿は口端から5cm程までに施されるものもある。217は横位に4~6条1単位とする凹線を4~5段廻らせ、8条1単位を放射状に引き揚げて卸し目をつくるもので、交差部が格子目を呈す。卸し目の端は口縁下5cm前後まである。外面は整形痕が顕著であり、胎土は炻器質である。1個体分のみで底部形態は不明である。

A-2 糸切り後に中央を割り上げて揚げ底に高台を作る底部破片。10条1単位の卸し目が内底まで反時計回りに施される。高台ウラは縮縫状を呈す。腰部8ミリ前後の巾の削り整形痕が5段認められる。やや固めの陶質である(図219)。

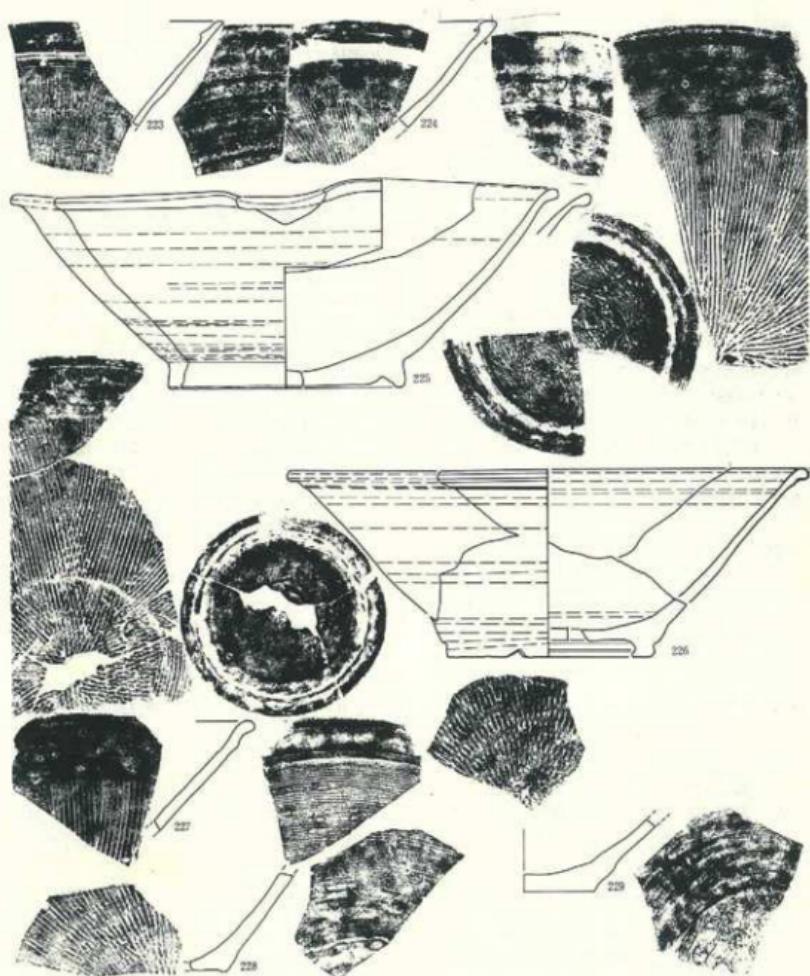
A-3 糸切り後に底部内側1cm前後の所に時計回りに巾8mm前後の削りを加えて輪高台風に作る底部を有するもの。内面7条1単位の卸し目を反時計回りに施す。外面刷毛目整形後、高台脇1cmを削って高台の作り出しを行っている。陶質である(図218)。

A-4 口縁外側が直立し一旦内にくびれて底部に至る。糸切底で2ヵ所の弓痕が残る。内面見込みから反時計回りに軽い弧を描いて11条1単位の卸し目が施される。口縁下5cm程迄達する。幾つかための陶質である(図224)。

B類 口唇を外側に折返して作出されたと思われる凸帯を口縁下1.5cmのところに有し、糸切底を呈するもの。凸帯部以下ほぼ直線的に底部に至り、内面口唇下1.5cmのところに1段がつく。凸帯部から段乃至口唇部に鉄釉が施される。糸間広目の7~9条1単位の卸し目が見込みから段直下まで、やや弧を描いて施される摩耗等の為施順は不明。中位で卸し目が重合する。Aに比し幾分器



第19図 摺鉢



第20図 摺鉢

壁が厚い。陶質が殆んどであるが一部炻器質に近いものもある(図222)。

C類 外側へ折り返された凸帯が口唇部に縮約し、玉縁状を呈する糸切底のもの。内側口縁下2~3cm程の所に浅い段を有する。陶質気味のものもあるが炻器質が殆んどである。内側段上半から玉縁部に鉄釉が施される。片口部は僅かに外側に開く程度になる。卸し目は細い11~12条1単位として段直下乃至はその内まで密に重合して反時計回りに施されている(図221)。

D類 口唇を内側へ折り返し肥厚帯をつくり、底部は糸切りと推されるもの。肥厚帯の直下は凹められた段を呈する。幅1cm程と薄い肥厚帯の1と内側上部に縮約されて丸味を帯びる2とがある。いずれも炻器質で、段直下迄細い11~12条1単位の卸し目が反時計回りに施される。(図223は逆の例)。全面鉄漿が施され、外面口縁1~2cm、内面、肥厚帯部又は段まで鉄釉がかけられている。

E類 口縁部が大きく端反り気味に開きしきりとした高台の作出されるものである。

外側へ折り返して肥厚帯とし揚げ底の高台を有する1と、外側へ折り返した口縁を上部に縮約して玉縁状に作り、軽い揚げ底の高台際を1.5cm巾程にえぐり太い糸底状の高台をつくる2、やや厚手の端反りする3、揚げ底で高台脇まで鉄釉の施される4がある。21~24条1単位の細目の卸し目が反時計回りに密に重合して施されるが、口縁下3.5~4.5cmを巾広く素文とする。1~3は胎土に赤味があり陶質気味であるが、4は所謂青灰色の炻器質である。(図225、226)。

F類 不明のもの、A~Eの何れにも帰属し難いが、胎土等から肥前系かと推し本群に含めたもの。

図227、229、は同一個体で口縁直下に巾広の凹線を廻らして段をつくり底部に至るものである。これにより端部は端反り気味となり、内面微妙に凹んだ浅い段を有する。段直下まで細目の9条1単位とする卸し目が時計回りに施され上半で重合する。外面段の直下から底部まで密な櫛具による横位の調整痕が顕著に残り、その上から、中・下位2段に格子目状のスタンプが横畫して押される。このスタンプは唐津大甕に共通している。底部は軽い揚げ底である。胎土赤味のある陶質気味で白色の土が縞状に層をなすのはE-3に近い。

図222は細身の12条1単位の卸し目を密に施す底部破片であるが底部脇が幾分外側へ張り、底面は凹凸が激しく荒れている。胎土は赤味を帯びた陶質気味であるが、白色土の縞状の重なりは顕著でない。底部の荒れ具合は後述の越前系としたものに共通しておりあるいは四群に含まれるかと推する。

第二群 濑戸・美濃系と推されるもの。

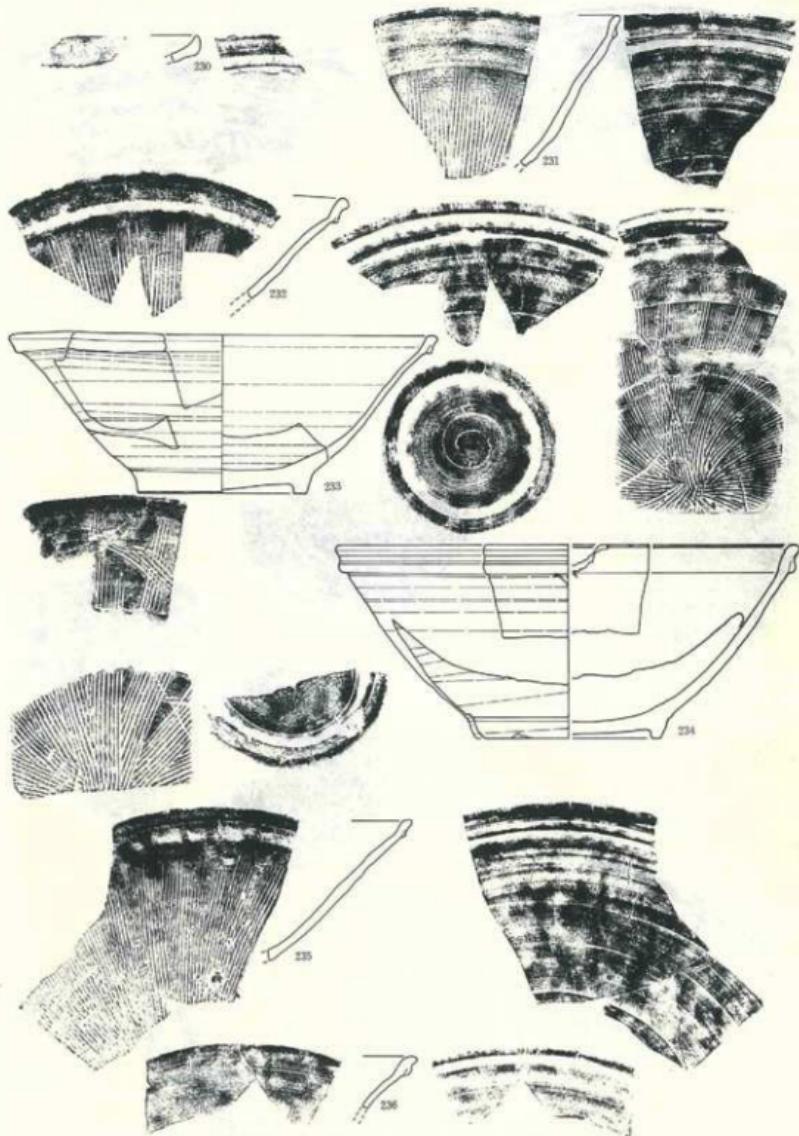
A類 口縁外側1cm余を直立させ三角形の肥厚帯とし、以下一旦くびれて底部に至ると推される口縁部破片、内面は内抱え気味に立ち上がる。現存内外面とも鉄漿が施される。陶質である(図230)

B類 口唇を外側へ折り返して凸帯とし、底部を輪高台風に削り出すものである。口縁部を直立させ内面に一段を有するもの、直立が弱まり、内側の段が不明瞭なもの、口縁部が外へ押し出され、内面の段は四線状となり、外面の折り返し凸帯部は縮約気味となり、貼付帶化するものの三種が認められる。前二者は陶質で全面、外面上半及び内面に鉄漿が施される。8、9条1単位の卸し目が、中~下半部で重合するように施されるが、第3者は硬質となり全面に鉄釉が施され卸し目は11条1単位として上半から重合して密に施され、1部は凹縁部を越えて内口端に迄達する。同図236は著しく内傾する陶質のもので、内外とも薄く鉄漿が施されている。

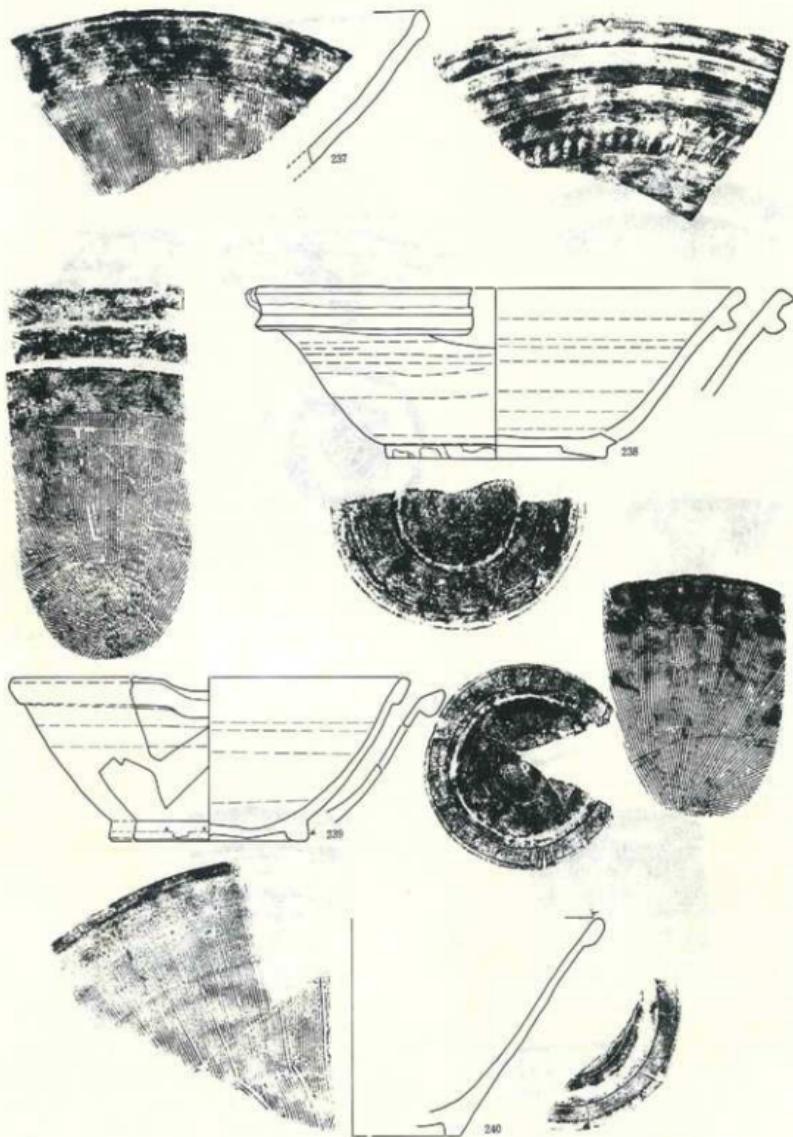
C類 口縁部に簡略化した肥厚帯を有し、内抱え気味に立ち上がるもの。内外面とも鉄漿が施されている。内面、口縁下4.5cm程のところまで、20条1単位の卸し目が反時計回りにつけられている。外面中位に飛び飽状の割りが残る。胎土は赤味のある軟質である。第二群としたが胎土から一群とすべきかも知れない。

D類 外面に太い凸帯を廻らした段を有し、膨み気味の脇部から底部に至る。1cm弱を削って直立させ高台部とする。底部中央をくり込んで巾3cm程のやや内傾する輪高台風を作る。高台脇まで鉄釉が施される。内面口縁下3cm余のところまで卸し目が稠密に施される。見込みに重ね焼きの痕が残る。胎土は白色気味の炻器質である(図238)。

E類 口縁部に肥厚帯を有し、底部を輪高台風につくるもの。脇部に膨みのある小型の1と、直線的に開く丈高の2がある。1は20条1単位の卸



第21図 指鉢



第22図 挿鉢

し目を半時計回りに密に施し口縁下35cm程を素文につくるが、1部卸し目が残存する。鉄軸がかけられるが高台脇以下底部は露胎である。2は15条1単位の卸し目が反時計回りに密につけられ一部口唇近くにまで達する。更に見込み部分に二度引きして卸し目をつける。内面に鉄漿が、内口端から高台脇に鉄軸がかけられ以下は露胎となる。

第三群 備前系と推されるもの

口縁部外側に発達した凸帯を設け、轆轤成型痕を顯著に残す。

A類 内面に弧を描いて上方へ卸し目が引き揚げられ、見込みにも別に卸し目の引かれるもの。

241は口縁外側を直立させ凸帯を作出し、2条横線を廻らすもの。平底で底部わきに弓痕が残る。口縁内側を凹線で整え隆線を一条作り出す。内面に密に半時計回りに太目の7条1単位の卸し目を引きあげる。一部は隆線直下に達する。見込みに三方向から卸し目が引かれる。外側に大きく引き出して片口をつくり上部平面形は卵円形をなす。口端から内面に鉄漿がかけられる。炻器質である。

図242は内面横気味に7条1単位の卸し目が引かれるもので、見込みにも二方向から引かれる。外面の轆轤成型痕が著しい。径の大きい平底。器

壁は薄い。内外とも表面は赤味を帯び、内部灰青色で炻器質である。使用により卸し目の摩耗が著しい。

243は、斜め右方向に引きあげられる卸し目のある底部破片。平底に小さな凹みが多数つく。5cm程を直立させ張り出し氣味にする。底部の凹みなど一群Fの2とともに後述Ⅳ群越前系とすべきかも推される。

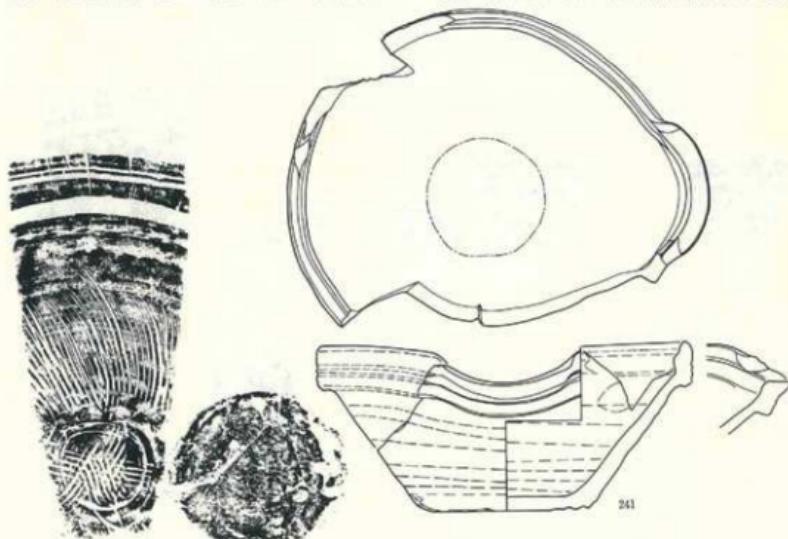
B類 幾分間をおいた卸し目が放射状に引かれるもの。

244は凸帯が外側へ張りだし断面三角形状をなす。口唇から凸帯部に鉄軸がかけられる。頸部はやや膨らみながら底部、内面下位凹線下まで13条1単位の卸し目が反時計回りに引かれる。見込みには井桁状に引かれる。胎土は赤味を帯びた炻器質。

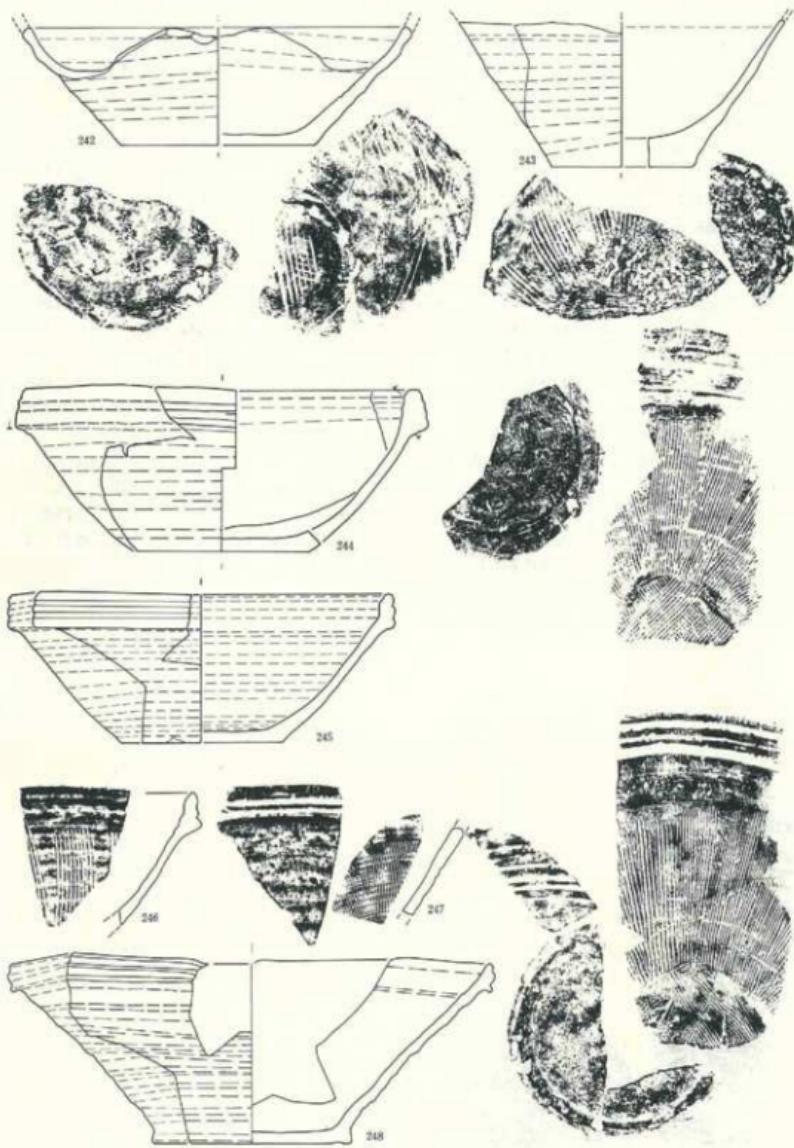
245は10条1単位の卸し目が下位凹線部まで引かれる。無軸で胎土は赤味の炻器質である。

246は口縁部内面の隆線が微かになり凹線一条が残るもの。9条1単位の卸し目が凹線付近まで引かれる。黄色味で陶質に近い。

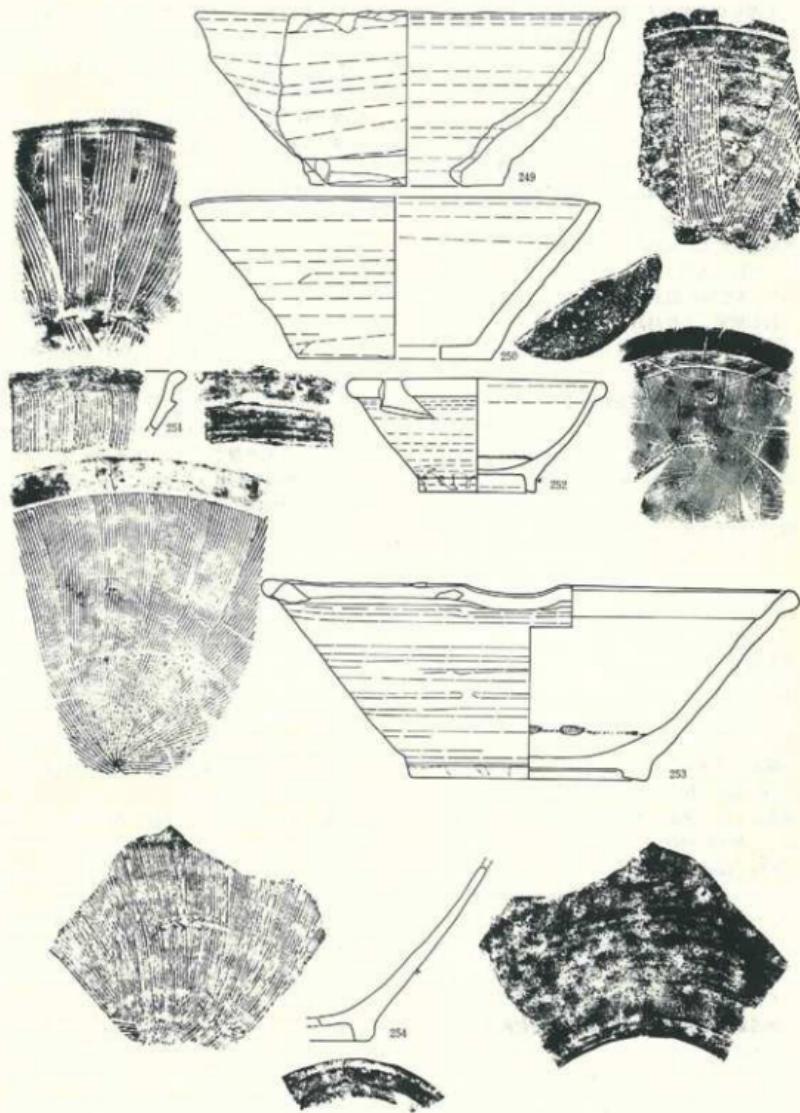
C類 口縁部肥厚帯が幾分縮約して外側に開き、頸部の段がゆるやかになり内面凹線直下まで卸し



第23図 推鉢



第24図 摂鉤



第25図 掘鉢

目が密に引かれるもの (PL. 32)。内側の隆線はなく四線が廻る。その直下まで14条1単位の卸し目が見込みから密に引かれる。見込み中央は別に引かれるらしい。外側・底部角に重ね焼きで付着した卸し目が残る。

D 口縁凸帯が縮約して薄くなり、内側の凹線は3cm余の巾の段をなすもの。外面輻輳引の痕が顕著で、平底部外端が1部四線状に削られる。内面段直下まで7条1単位の卸し目が反時計回りに密に引かれる。見込みには異方向から数回引かれる。丈高・大型。無釉、炻器質である (図248)。

E 黒色味の胎土で、細い密な20条1単位の卸し目が稠密して反時計回りに引かれるもの。外面に3条の凹線が文様風に残る。炻器質で堅い (図247)。

第四群 越前系と推されるもの

A類 上部を直立気味に引きあげて外面に一段をつくり、端反りにさせるものである。底部直上が大きくくびれ体部と画す。口唇は丸味をもって内傾し、上端に四線が一条廻る。内面口縁下1cm程まで14条1単位の卸し目が広い間隔で時計回りに引かれる。胎土に小石を噛み底部に小さな凹みが多数みられる。無釉で灰青色である (図249)。

B類 底部から、やや内抱え気味に口縁に至り、口唇が水平に切られるもの。底部に小さな凹みが多数みられる。内口端まで9条1単位の卸し目が反時計回りに引かれ、見込みは別に引かれる。無釉、茶色味の炻器質である (図250)。

C類 口縁部直下に太い四線を廻らし2条の凸帯風を作るもの。図251は口唇が丸味をもつもので内口端まで10条1単位の卸し目を反時計回りに稠密に引く。無釉、黄褐色味の炻器質である。口縁を三角形に肥厚させる例 (PL. 23) もある。

D類 輪高台風の揚げ底を呈するもの。高台脇を削り、疊付きを面取りする。19条1単位とする卸し目が反時計回りに稠密に引かれる。鉄釉がかけられるが高台脇以下無釉となる。釉薬に長石が混じり白色透明に溶けている。胎土灰青色、硬質の炻器である (254)。

第五群 玉縁口縁、揚げ底、輪高台風につくりだすもの

大きく、大・中・小の三種に分けられ、大とする中にも器形、大きさ等に違いが認められる。茶褐色の釉がかけられるが高台脇以下無釉となる。

一例高台以下に鉄釉がかけられ疊付のみ露胎のものがある。胎土は灰色味の炻器質である。明治以降のものと推される。後述の甕に釉調、胎土等の類似する例がある (252、253)。

甕、鉢、瓶 他 (第26図~28図)

甕 255は鉄釉をかけたもので叩き成形により作られ、内面に青海波の叩き目が残る。256、257は同一個体と思われるもので、やはり叩き目を残す。刷毛状の工具で整形している。共に唐津焼で16世紀末~17世紀初頭と推される。

258は水差しで鉄釉を流しかける。胴下半に波状の沈線が刻まれる。内面、整形痕が密に横走し露胎である。16世紀末~17世紀初の唐津焼。

259は小型の甕と思われる。鉄釉を内外胴下部までかけ、白釉を刷毛塗りして、鉄釉を流しがけする。18世紀~幕末の唐津焼である。

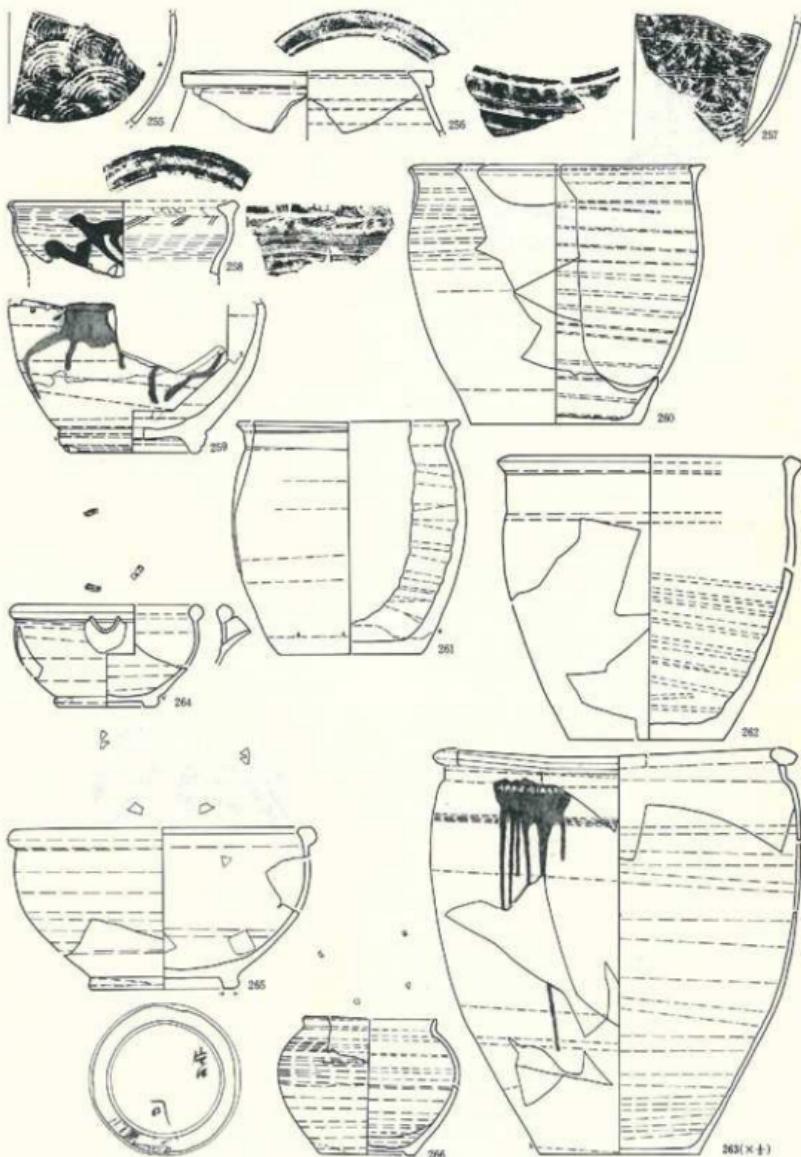
260~262は、頸部を直立させ、口唇を平らにして外へ突き出す甕である。260は突き出した口端から底部脇迄施釉され茶褐色である。外面刷毛状具による調整、内面輻輳成型痕が顕著である。18~19世紀の関西系の焼きである。261、262は輻輳成形のもので唐津系と推される。

264は鉄釉のかけられた大型の甕である。これには他に器高50cm、30cm、20cmの大きさの四種がある。鉄釉が3カ所程口縁から黒く流しがけされる。前述の播鉢の釉調、胎土と類似する明治以降のものである。関西系か。尚甕には図示していないが片口と類似の釉がかけられる高さ30cm、20cm程のものがあり、破片では更に1回り大きなものがある。流しかけの釉が青や薄い茶に発色する。小型のものには蓋がつく。

片口 玉縁口縁で巾広の低い疊付きを有する高台の片口である。高台脇まで薄い黄味の釉がかけられる。内面見込みに重ね焼きの痕が残る。関西系炻器質のものである。大小三種がある。265は高台ウラに、“片口”と“屋号”的墨書きがある。

甕 266は広口の甕である底部はくられて揚底になる。底部脇まで施釉され、内面底に重ね焼きの痕が残る。関西系炻器質のものである。

鉢 267は玉縁口縁で、頸部に軽い段をつくり底部にいたる。がっしりとした高台が作られる。内外とも上半に薺灰釉が流しかけされている。一部黄味に発色する。胎土は赤味の陶質で17世紀の唐津焼である。268は端折れし、体部に段を有す



第26図 磁・その他

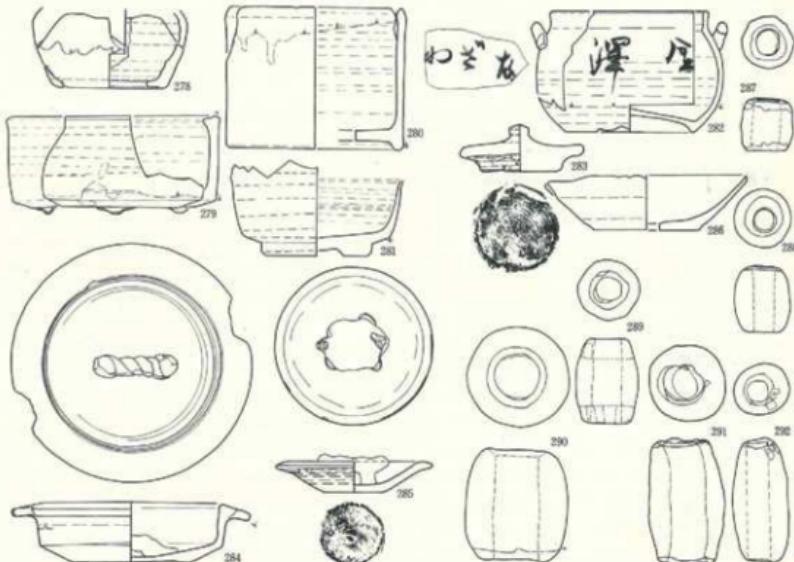


第27図 鉢・瓶・その他

る浅い器形のもので皿（盤）とすべきであろう。高台は底部を割りあげ、角に削り出している。疊付を除く外面口唇5mm以下に鉄漿を塗り、鉄漿で内面に文様を配す。中央に菊花を描き、三条と一条の圓線で、外側の文様帶を画し、渦文を連続させる。体部に鉄漿を塗り、段の上に二条の圓線を回す。その上位口端まで銅緑釉がかけられる。見込みに胎土目の凹みが残る。17世紀中頃の唐津焼である。270は底部を割りあげ高台をつくるものである。疊付外側を削り面取りをする。外面腰部に飛び跑状の削り痕が残る。見込みに砂胎土目の痕が残る。内外面とも刷毛状具で調整され鉄漿が横位に同様の器具で塗布される。17世紀後半～18世紀前半の唐津焼である。269は、口縁部外側へ折り返して肥厚帯をつくり丸味を持って底部にいたる。底部を割りあげて薄身の高い高台を削り出す。高台脇に2mm弱の削りを入れ、疊付が面取りされる。高台ウラ中央は一段削りあげられる。見込みに重ね焼きの目痕が残り中央が幾分高まる。内面に輪轆成形の痕が顯著である。斑唐津風に白い薬灰釉？が脚下部までかけられる。17～18世紀の高取系のものである。

図示していないが口縁を内側に水平に折り上げつば状にし、輪高台のつく鉄軸のかけられた関西系のものがある。陶質で、18世紀以降のものである。

瓶・徳利 28図278は内面輪轆成形の顯著な瓶又は小壺である。底部を僅かに揚底気味につくる。内外面茶褐色の釉がかけられ内面1部露胎となる。外面下半迄黒色の鉄軸がかけられ釉が溜まる。内面露胎部に暗紅紫色の漆状のもののが付着する。16世紀末～17世紀初頭の唐津焼である。27図274は輪轆成形の脚部下半に最大径を有する器形の刷毛状具で調整する瓶で肩に6条、胴に1条沈線が横走する。炻器質の茶色の胎土に貝殻粉状のものが白く噛む。内外とも鉄漿状のものが施され、一部降灰により黄色部分がみられる。17～18世紀沖縄壺屋焼である¹⁰。27図273は肩の張る器形で底部中央があげ底状になる。下部まで灰釉がかけられる。18世紀末～19世紀の瀬戸美濃系である。276は肥厚する口縁から太目の真直な首がつき、やや長円形の脚部から底部にいたる。底部はやや外へ開いた高台がつく。高台疊付を除いて薬灰釉がかけられる。幕末の東北 関西系であろうか。



第28図 香炉・その他

275は肥厚する口縁から頸部を経て上半に最大径を有する卵形の胴部がついて底部に至るもので、底部はあげ底で、中央が兜巾状に膨る。高台脇、覺付き以外施釉、所謂貧之徳利といわれているものである。幕末以降の東北、関西系のものか。

277は肥厚する口縁に短い頸がつき長円形の胴部がつくもの。底部は平底で脇を面取りする。肩の部分に字その左右に「ヲノ」、「ミチ」と鉄軸で書かれる。所謂醉徳利である。18世紀末~19世紀の関西系のものである。PL.23-1、2は17世紀後半~18世紀の肥前、3は19世紀の唐津である。4はやや大形で胴部に草花文を描く19世紀の肥前系のものである。

香炉 280は筒形のあげ底のもので灰釉がかけられ口縁部銅緑釉が流しきかれる。18~19世紀の唐津系である。279はやや低平な器形で内抱え気味に立ちあがる体部で、内そぎの内側を肥厚させた口縁がつく。三足で支える。17~18世紀の瀬戸美濃系のものである。281は底部中央を割りあげ、広い広い蓋付きを有する輪高台をつくりだすものである。高台脇の割り巾は広く、蓋付きも面取りがなされる。内面轆轤成形痕が顕著である。高台脇以下無釉。18世紀の肥前系である。

土壙 282は胴下部がふくらむ、内返りの底部のもの。耳が2か所につくと推される。胴下部、内面無釉で外面胴部に鉄軸で「金澤」、「かなざわ」と書く。関西系の土壙である。283、284、285は蓋である。284は小壺の類、他は土壙類のそれである。285のつまみは省略された丸である。

土器 286は素焼きの皿である。271は縦に張りつけが4ヵ所付くと推されるものでよくわからぬが七輪に乗せる台であろうか。272は焙焼の把手かと推される。素焼きのものには他に薄手、低平なかわらけ、ロストル等がある。

陶錘 種々の形態がある。290は大きく柿輪がかけられた埴器質のものである明治以降であろう。

(5) 出土捲鉢について

第一群を唐津系^{註3}のものとした。A類としたものの年代は、浜通り遺跡出土例^{註4}からその上限を16世紀末葉に、波多江遺跡、富田川河床遺跡出土例^{註5}から下限を17世紀前半に求める事ができるものであろう。唐津皿は砂目積みのものが殆んどであるが、それに溝縁皿の見られないのは一つの目安かも知れない。糸切平底の形態がB群以下

にも見られる事から4類が幾分後出のものかと推する。中多々窯跡物原から青海波叩目痕の徳利と共に採集されており^{註6}、山辺古窯址群第4号窯からは胎土目、砂目積丸皿とともに割り底の本類が出土している^{註7}。

B類について対比し得る出土例を知らない。C類との前後関係に迷うところであるが、C類の玉緑口縁のものの節し目が細い線で密に引かれること、胎土が炻器質の一群がある事等から先行するものとしておく。口縁部外側に凸帯を作り出すのは備前系の影響とし得るのであろうか。

C、D類は瀬戸内チャシ跡から出土している^{註8}。これに前後関係を与え得る出土例その他の資料を有するものではないが、口縁部外側の凸帯が縮約して玉緑状になるという変化を仮想しておきたい。長尾遺跡から17世紀末~18世紀後半迄の伊万里に伴ってC類が出土するようであり概その年代を求め得るであろう。

E類のうち1と3としたものは白老仙台藩陣屋跡^{註9}、松前藩戸切地陣屋跡^{註10}、福山城跡^{註11}等から出土している。白老陣屋は1856年に構築され1868年に撤収し、1870年には廃されている^{註12}。戸切地陣屋は1855年に築かれ1968年に焼亡している。このことよりE1、3にはこの間の年代を与える事ができる。E2、4としたものについては明らかになし得ないが、これと大きく離れることはないと推される。底部の形態からは幾分後出かと推している。

D類については単純にEとCの間を埋める資料として仮定し類例の増加を待ちたい。

第二群に瀬戸美濃系と思われるものを一括した。A類は美濃大庭に、それも末葉に比し得ると推している。16世紀末葉であろう。B類は仙台城三の丸I期(1601~1637)とされるもの^{註13}に比定し得よう。C類以下については発掘調査例、出土例等を知る事が出来ず、C、E-2等については瀬戸美濃系とすることもためらわれたが一応一括した。その変遷についても從って根拠を示し得るところではないが、I群に微い、D類を18世紀に、(C)をそれ以前、Eをそれ以降としておきたい。E-2は施釉、器形等から明治以降と推している。

第三群は備前系^{註14}と推するものを一括した。A類としたものの2点は、内外口縁の凹線、鉢

し目等より備前第Ⅵ期16世紀末葉～17世紀初頭（前半？）に比定し得るものである^{註14}。天正6～18年迄存続した浪岡城^{註15}、胎土目積唐津焼を大量に出土する浜通り遺跡^{註16}、寛永4年迄存続した根城^{註17}等から類似の出土が知られており概その年代を推する事が出来る。尚岬では天正3年焼土層以前にこの種の擂鉢が出土するようである^{註18}。B類としたものは18世紀中葉の肥前系磁器とともに出土している花前II-1遺跡^{註19}例に對比されるであろう。Cは卸し目が細く稠密化したものである。B類の中に含めるべきかも知れないが葛西城址の井戸一括遺物^{註20}中に広東碗と共に伴して卸し目の稠密な本類類似の例があり一応区別した。18世紀末～19世紀前半あたりに位置しようか。B、(C)に口縁内側凹線に種々がある。これが口縁下の広い無文の凹帯になるのをDと推しているところである。

第四群は越前系のものである。

Aとしたものは、卸し目間隔が広く、口端に沈線があるなど豊原寺跡出土遺物に例を求めて得る^{註21}。同書によれば、これは14世紀後半～15世紀中葉の間に位置するという。Bは福井城丸トレンチの遺物に比定し得る。前掲書によれば17世紀後半の年代が与えられるという。Bは根城から出土^{註22}しており上限は17世紀初頭頃とできよう。Cとしたものは豊原寺跡で18世紀の肥前系（？）磁器と共に存している。

第五群は座地等の不明なものである。残存状態が新しい事、昭和30年代迄は上ノ国で伝世されていたものに類似する事などから、明治以降のものと推される。

出土擂鉢を形態その他を中心に分類し、唐津系、美濃瀬戸系、備前系、越前系の四群を抽出し得た。各々16世紀末葉から19世紀の間、いくつかの変遷を想定した。備前系以外のものが17世紀末乃至18世紀頃に口縁外間に凸帯等の肥厚帯をつくりだす様相が同われ、興味深い。

和漢三戈團會に備前の物を最良とし他は土が柔かいと評価されている^{註23}事にはこの間を推測させるものがある。本引用書は1712～1775年の間にその成立を求める事から、18世紀にはその評価がほぼ定まっていると推測されるが、執筆開始の1680年前後をも考慮すべきかも知れない。

備前焼の遠隔地出土例についてはその生産流通

過程等から慎重に扱うべきとの意見がある^{註24}。もとより筆者はそれを同定し得るところではなく「系」と表わした。後述するところでもあるが15世紀頃からの北海道への日本海航路（交易路）は思ったよりも発達していたようであり、物資の流入も広範囲に及んでいる。備前焼に限れば、作見窯の生産量とその技術系統が江戸時代を通じてどれくらい継続されるのか本遺跡の出土状況から興味のもたれるところである。（松崎）

2 その他の遺物

(1) 鋼製品（第29図1～8、11、12、15、16）

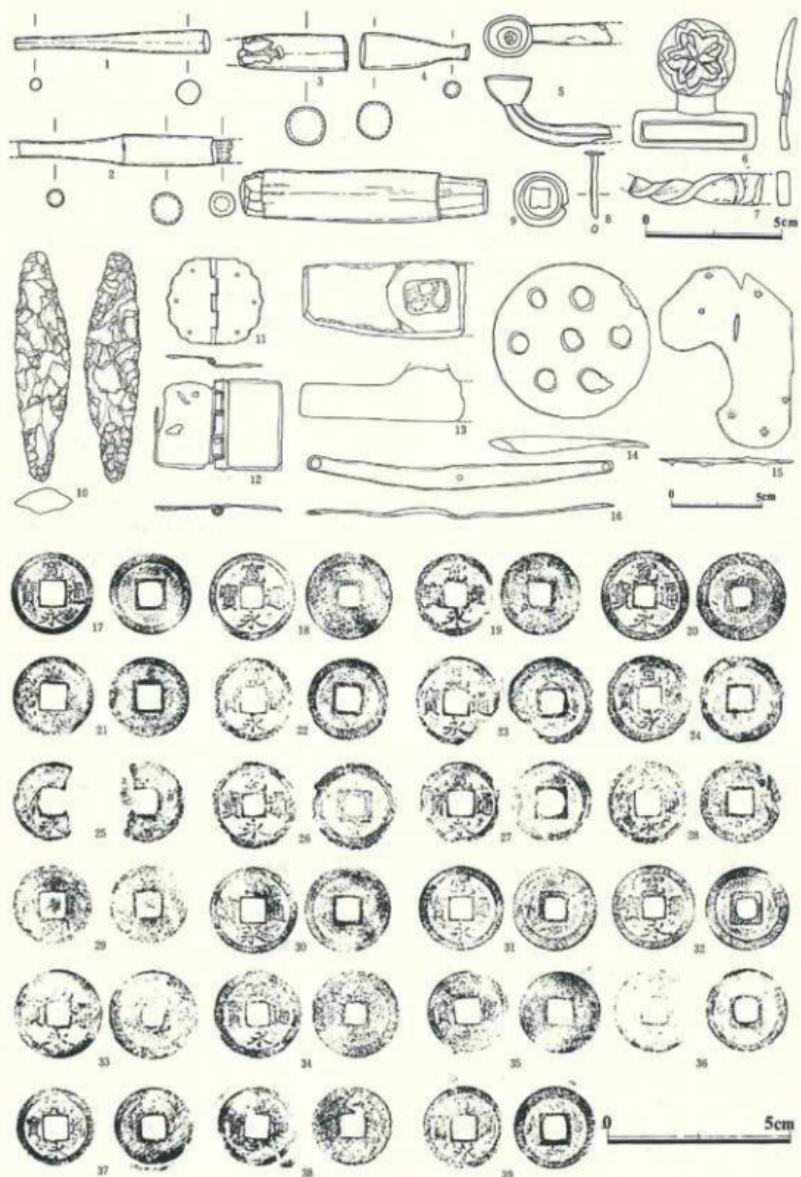
1～5は煙管である。1は吸口部分である。2も吸口部分である。一端には内部の木質部分が残存している。3は中央部分である。内部に外側よりや小径の金属製の筒が入る。4は吸口部分である。吸口部より中央部へかけて急激な径の広がりがある。5は雁首部分である。中央小穴内には炭化物が附着している。6はベルトのパックルと考えられる。7は断面が長方形を呈する左巻のねじれの入ったものである。両端が欠損しており用途は不明である。8は釘である。11は留め金具である。中央部にちようつがいを有し左右にはそれぞれ3つずつ円形の小孔をもつ。全体の形状は上下ほぼ水平、左右縁辺は稜花状を呈する。12は留め金具である。中央部にはちようつがいを有する。左右にはそれぞれ縁辺に縁取りが入る。表面は布目状の斑点が入る。全体に極めて薄く華奢である。15は船金具である。船名の文字板と考えられる。その文字については概報第3図に掲載している。16は左右、中央部に小孔をもつ偏平なものである。用途は不明である。

(2) 鉄製品（第29図14）パッキンのようなものと考えられる。円形を呈し径9mmの小孔を7つもつ。極めて薄い。

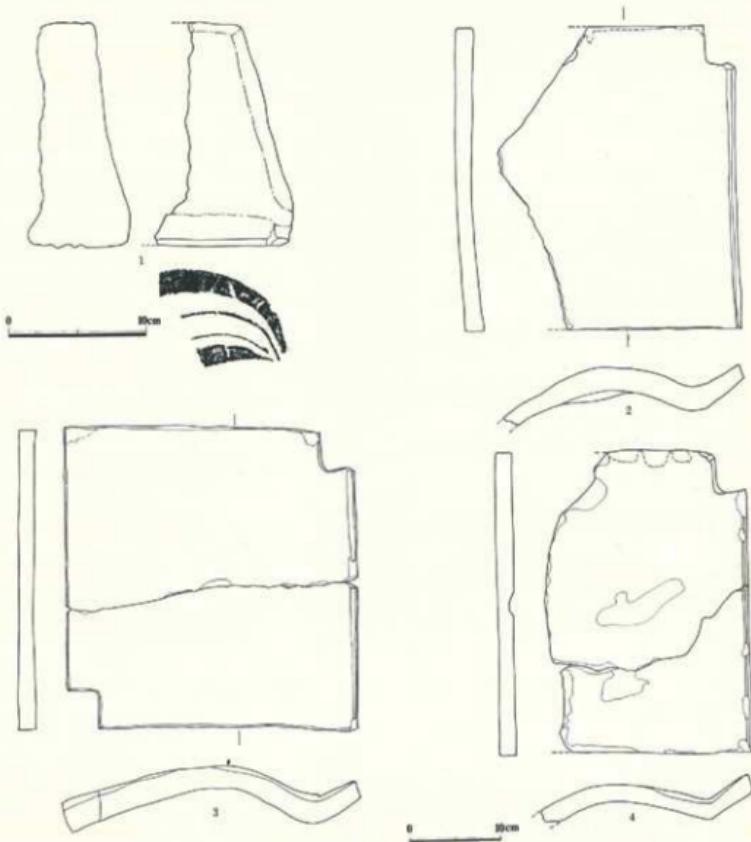
(3) 木製品（第29図9）刺突具の柄と考えられる。断面が円形を呈する筒形のものである。断面中央部には方形の孔があり、そこに金属部を刺し込むと考えられる。

(4) 石製品（第29図18）砥石様の形状を呈する。右側には隆起部があるが頂上部は欠損している。用途不明である。

(5) 石器（第29図10）石槍である。圓上左部分の先端部は未調整のままである。それは先端部よりやや下側は極端に薄くなってしまっておりその部分の加



第29図 金属製品・銭・木製品・石製品・石器



第30図 その他の遺物（瓦）

工に失敗したと考えられ、それ故先端部には細かな調整を施さなかったと考えられる。未成品の可能性が極めて高い。

(6) 銭（第29図17～39）34点の出土があった。すべて寛永通宝である。図には完形に近いもの、判読可能なものの等23点を掲載した。以下字体の大書き、描き方より年代、鋳造地の分類をした^{註3}。18、20、26、33は寛永13年（1636年）の江戸所銅錢で古寛永と呼ばれているものである。ちなみに寛文年間（1661年～1662年）以後のものはすべて新寛永と呼ばれている。23は寛文8年（1668年）江戸亀戸所銅錢、35は元禄～宝永年間（1668年～1710年）の京都所銅錢、31は享保11年（1726年）

京都七条所銅錢、元文年間（1736年～1740年）銅造のものでは17、27、32は江戸亀戸所銅錢、37は江戸深川平野新田所銅錢、39は江戸十萬坪所銅錢、22、34は山城・伏見所銅錢、明和年間（1764年～1771年）では38の山城伏見所銅錢がある。

(7) 瓦（第30図）1は軒丸瓦である。左半分が欠損している。釉調は6yo、2.4の3Sくらいグレイみのブラウン。胎土は6yo、6.5の3Sあさい黄みのブラウンである。瓦当は重弧文である。2～4は平瓦である。すべて縦は33cmである。2、3の釉調は2R、2の5Sくらい赤の上に銀色の釉が塗られる。胎土は6yo、7.5の5Sにぶい黄みのオレンジである。
(齊藤)

- 註1 大橋康二氏からご教示を賜った。
- 2 瓶・徳利については松下亘氏の論考がある。これによれば酢徳利は尾道市稻田伊兵衛商店から販売された酢を運んだものであり、焼酎徳利は新潟市、村上市等から運搬してきたものだという。又焼酎徳利は殆んどそのまま消費者の手に渡るが、酢徳利はその大きさ、酢が比較的せいたく品として位置づけられるものであること等から、ある程度まとめて消費する力を有す大家、又は更に消費者に小売りする商店の存在が想定されるという。
- 「桃内遺跡」「北海道開拓記念館研究年報第5号」「物質文化30」
- 3 唐津焼については、大橋康二氏 盛峰雄氏からご教示を頂戴した。
- 4 下北点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書 1982年 青森県教育委員会
浜通遺跡発掘調査報告書 1984年 青森県教育委員会
- 5 国内出土の肥前陶磁 1984年佐賀県立九州陶磁文化館
- 6 古窯跡分布調査報告書 1984年 伊万里市教育委員会
- 7 佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査（遺物篇） 1983年 有田町教育委員会
- 8 濑田内チャシ 1979年 濑棚町教育委員会、遺田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 1980年 濑棚町教育委員会
出土遺物について森広樹氏から種々ご教示を頂戴した。
- 9 史跡白老仙台藩陣屋跡I~IV 1982~86年 白老町教育委員会
- 10 史跡松前藩戸迫地陣屋跡（56~60年度） 1982~86年 上磯町教育委員会
- 11 史跡福山城跡I~III 1984~86年 松前町
- 教育委員会
出土遺物について久保泰氏から種々ご教示を頂戴し、一部実見の機会を得た。
- 12 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書 1985年 仙台市教育委員会
- 13 備前焼について福田正継氏より種々御指導を賜わり文献の入手等にご配慮を戴いた。
- 14 世界陶磁全集 4 1977年 倉敷考古館研究集報1、2、5、18号 1966、68、84年 倉敷考古館、陶磁大系第10巻 1973年 日本陶磁全集 10 1977年 日本やきもの集成 9 1981年
- 15 浪岡城跡Ⅳ 1982年浪岡町教育委員会
- 16 許2に同じ
- 17 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ 1982 八戸市教育委員会
- 18 埼市文化財調査報告 第十五集 1983年 埼市教育委員会
- 19 常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書 I 1982年 千葉県文化財センター
- 20 青戸・葛西城址調査報告Ⅳ 1976年葛西城址調査会
越前焼について小野正敏氏よりご教示を頂戴した。
- 21 豊原寺跡Ⅱ 華藏院第2次発掘調査概報 1981年 丸岡町教育委員会 県道鰐江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書 1983年 福井県教育委員会
- 22 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ・Ⅳ 1982、83年 八戸市教育委員会
- 23 和漢三戈圖會 1969年
- 24 許14-1、15、北緯の古陶 1976年 小松市立博物館
- 25 郡司勇夫 「日本貨幣図鑑」の分類に従つた。

附

VI 近隣遺跡との関連、並遺跡の性格

1 出土遺物の構成

出土遺物の大半は陶磁器であり、その中でも主体となるのは有田を中心とした肥前窯の一群である。これについては大橋康二氏によってその体系づけがなされ内容が明らかになっている¹²⁾。

本項ではこれに準拠しながら本遺跡出土遺物を概説し若干の傾向を述べようとするものである。

肥前陶磁の変遷は明治までの間をⅣ期に大別しそれに若干の細別を加えて把えられている。即ち第Ⅰ期1580～1600、第Ⅱ期1600～1690、第Ⅲ期1690～1780、第Ⅳ期1780～1860の各年代である。本遺跡出土遺物はこの各期に跨がっているところから本項ではこれに従いⅠ期に少例外のそれ以前のものを加え、新たに明治以降については第Ⅴ期1868～1945年代の五期の大別をあてることとする。

第Ⅰ期 14・15世紀越前播磨、15世紀代青磁端反輪（第6図、PL. 3、24）が出土している。皿A類としたものの大部分が含まれる。志野皿と推されるもの、美濃天目茶碗が各1例ある（PL. 3、24）。唐津の甕、水差、瓶、擂鉢第一～三群Aの大部分等である。この期の特色は碗以外の器種が揃っていること、その過半は唐津系の製品が占めること、備前系と推されるものが散見されることであり、中国製磁器が殆んど無い事とできよう。

第Ⅱ期 碗A、皿B類、擂鉢第一群A-4、B、二群B、第三群Bの1部？、第四群B、唐津鉢、等からなる。唐津、伊万里を中心とする構成は変わらないが、瀬戸美濃系擂鉢の出土が目につく。網手魚（葉？）文、山水・網干碗、砂目積唐津、菊花・芙蓉手皿等の初期伊万里の特色ある文様がみられる。又唐津中皿の優品がある。

第Ⅲ期 碗B、C、D、Eの各類、皿C、D類、擂鉢一群C、第二群D、第三群B、第四群C類、唐津鉢、高取系鉢、沖縄壺屋窯、唐津焼瓶、瀬戸美濃系、肥前系香炉等がみられる。PL. 24右下は美濃白目皿である。

第Ⅳ期 碗F、G、Hの各類、皿E、F類、擂鉢一群D、E類、第二群E、第三群C、D類、第四群D類、小形、唐津系等の甕、関西東北系の徳利等があり道内の幕末～明治の陣屋等の出土遺物に符合するものが多い。尚土器類の中にはⅣ期末～V

期にまたがるものがある。本遺跡ではこの種土器の出土量が少ない傾向にある。

第Ⅴ期 碗I類、皿G類、擂鉢一群E 2、4類？、二群E 2、三群E、第五群、大きな水窓をはじめとする甕、徳利等である。徳利は貧乏徳利、焼酎徳利等とされるが頸が細く短い酒徳利や酢徳利は（27図277）は、道内の幕末の陣屋等から出土しないようであり明治以降に降るものとした。

本遺跡出土遺物はⅠ～Ⅳの各期を通じて、必ずといって良い程に高級品の類や茶器仏具に類するものの等の器種が見られる。

他方貯蔵用の壺甕類、鉢などが欠落するか、量的に乏しいのは瀬戸内チャシ跡の報告での指摘¹³⁾に符合するが、これは又一時代前の勝山館跡の出土遺物の構成とも共通するところであり、或いはこの地方の陶磁器種構成の特徴とすべきなのかも知れない。

又、幕末の陣屋等で多く出土している土器、段重蓋物等の出土が少ないので本遺跡の特徴である¹⁴⁾。

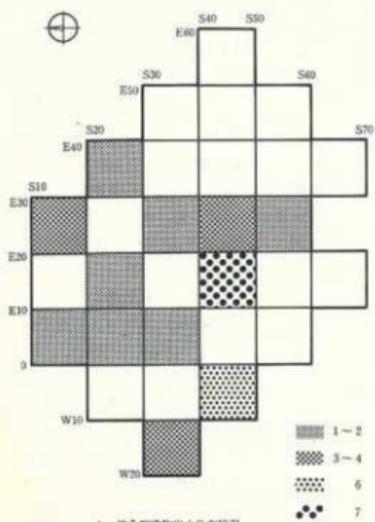
いずれにしても本遺跡の遺物構成は16世紀末葉から近代に至る迄、間断なく連続するものであり、一、二欠落するものもあるが、この間の日常生活に必要な什器類をはじめとする主要な器種を網羅するものであり、その量も多い。

製品別については、碗皿の項で述べられているように、肥前乃至は肥前系中心の江戸時代、瀬戸美濃系中心に転換する幕末～明治以降という大きな傾向が見られ、生産、流通関係等が想起された。

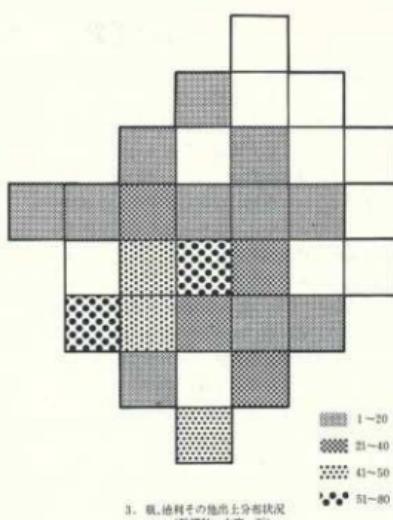
2 遺物の分布状況と埋藏量

遺物の出土状況について全点数を分析したり、接合関係図により遺物の移動状況把握等の作業は時間の関係で断念せざるを得なかった。調査直後に碗皿を中心に概その年代枠をも含めた破片の分布状態を検討した。これによる限り、遺物は必ずしも汀線に近い所に集中するものではない。E10・S10、E20・S30、40といった岸辺からやや離れたある程度の水深のところから多く出土する傾向がある。

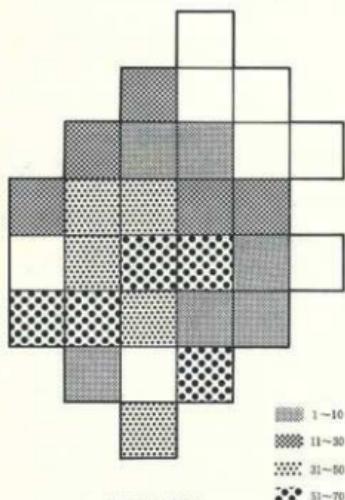
又、当地で漁業を営む森一夫氏の談によれば、磯回りの都度、この付近で“瀬戸戸”のかけらを目についたが中でも、本調査開始時、既に埋め立て



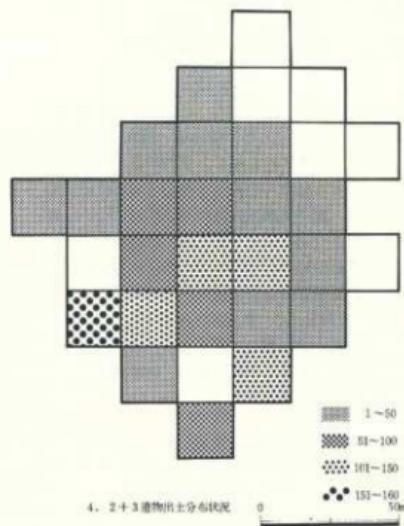
1. 第1類遺物出土分布状況



3. 第2種、第3種遺物出土分布状況
(除標跡、大甕、瓦)



2. 第4種遺物出土分布状況



4. 第4種遺物出土分布状況

表計集器磁陶

第1表 陶磁器灰肝茶

明治期

第一
期

1600年

第二
期

1700年

第三
期

1750年

第四
期

1800年

第五
期

1850年

第六
期

1880年

第七
期

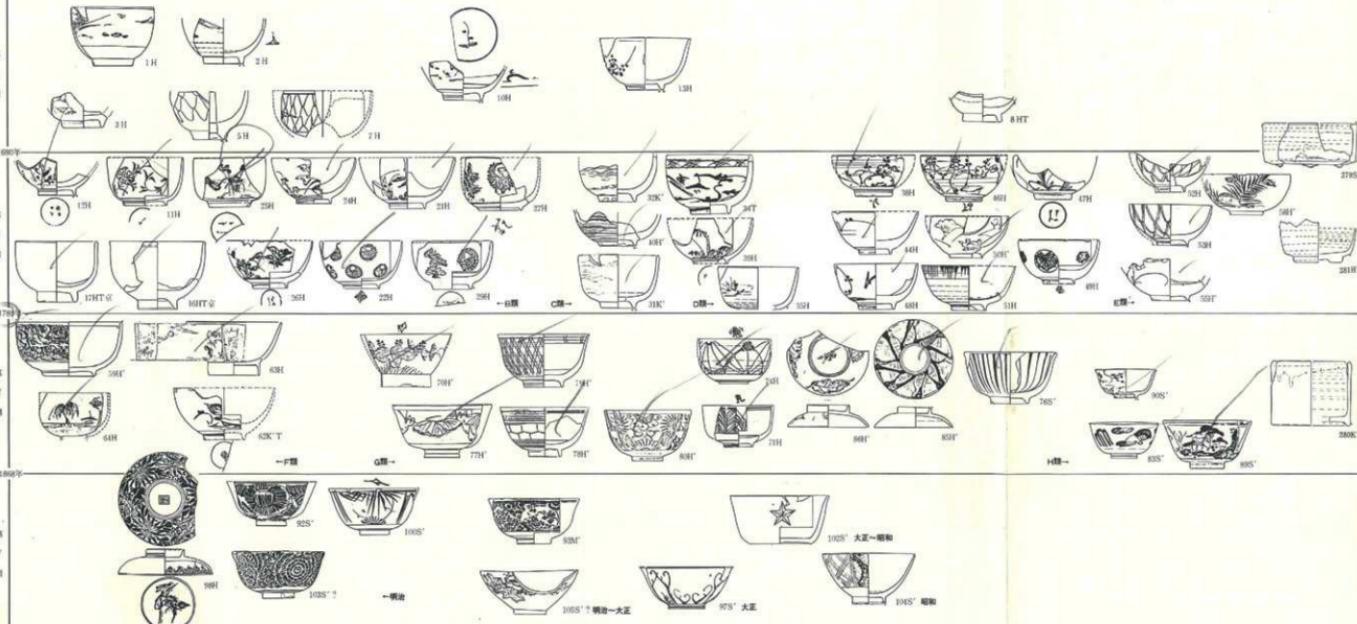
1900年

第八
期

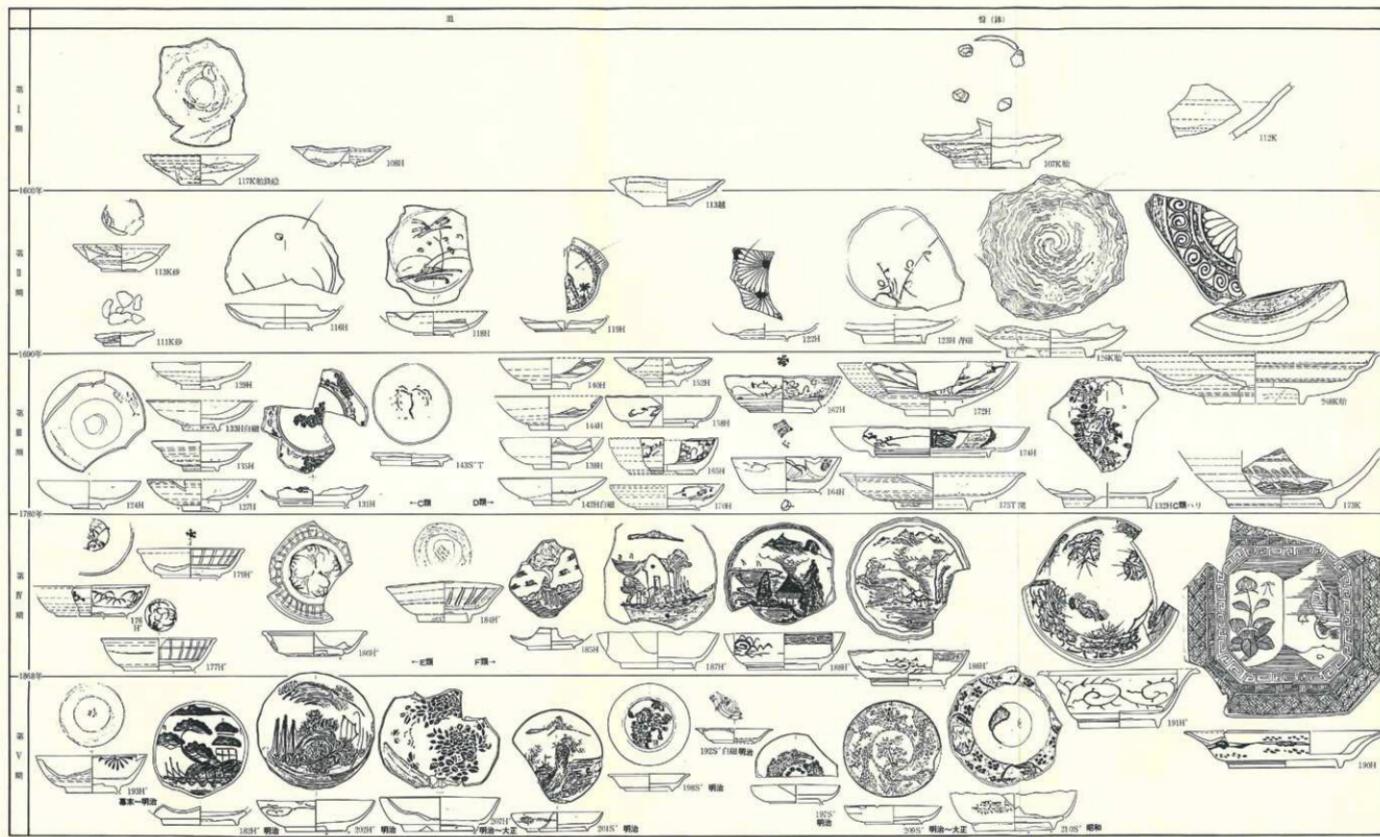
1920年

第九
期

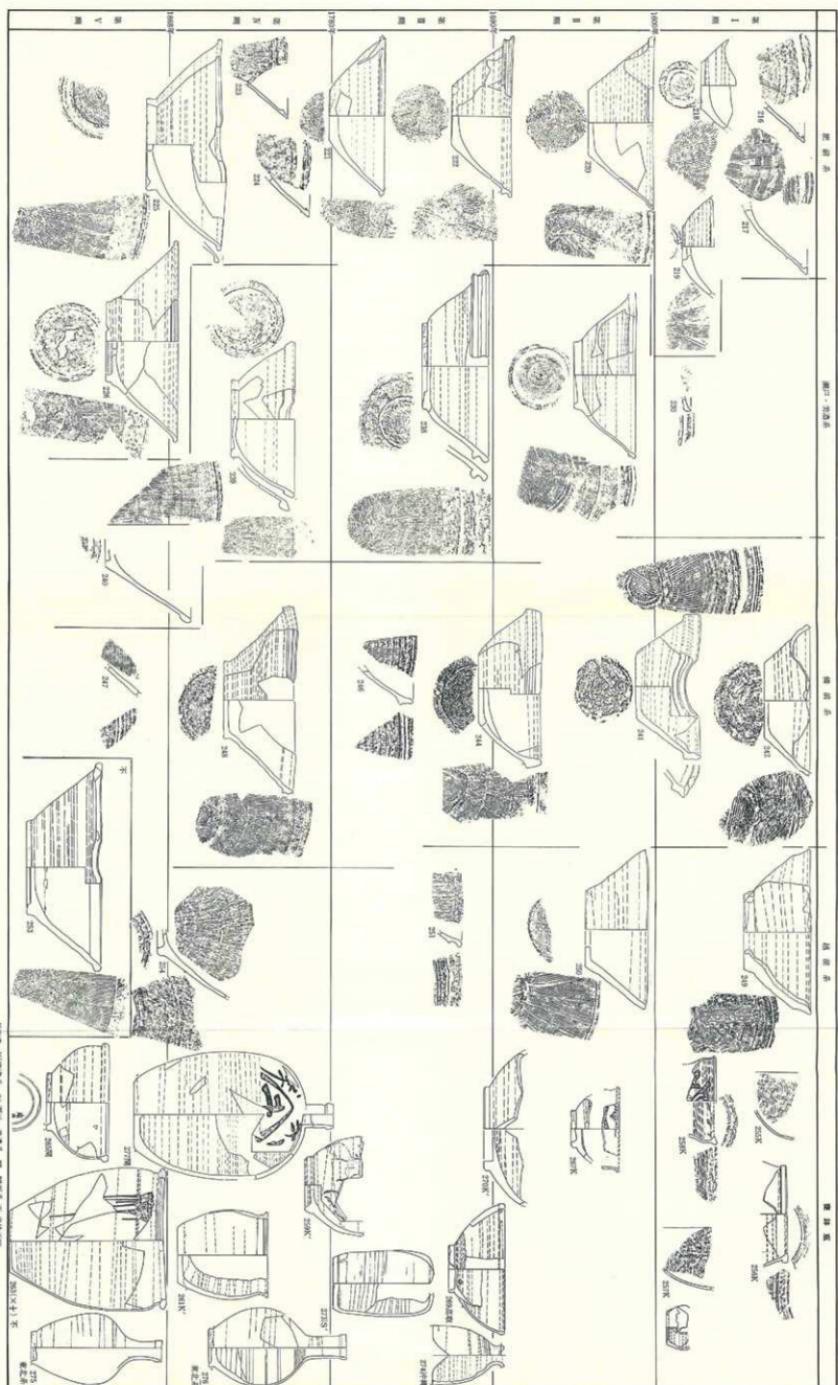
1950年

第十
期

第32圖 出土遺物變遷概念圖表1 (碗・他)



第33圖 出土遺物整理概念圖表 2 (圖・盤)



第34図 出土遺物変遷概念図表3（指鉢・匙・鉢・瓶）

が完了していた地区（W10・N10）のあたりは、海底が真白になる位に密集していて、不思議に思ったとの事であった。

この事からは更に相当量の遺物が此地区に埋蔵されている事が推測される。

3 近隣遺跡との関連

本遺跡から16世紀末葉から近代に至る迄の間の陶磁器を中心とする各種遺物が検出された事は先に見たところであり、それらを又大きくⅠ～Ⅴの五期に大別を試みた。

本項では、各期を通して関連する遺跡とその内容を比較し^{註4}、次項における本遺跡の性格解明に資することを目指すものである。

I 期及びそれ以前

I 期を16世紀後半から17世紀初頭迄としたところであるが、その中には14世紀？15、16世紀の物も散見される。

本遺跡の南、陸上には縄文時代後期、晚期、続縄文、撫文時代に亘る遺物を出土する大洞下遺跡がある^{註5}。東300m程の汀線沿いには珠洲第一期の壺を出土する竹内屋敷遺跡がある^{註6}。函館市志苔館跡からは中国製青磁、白磁、珠洲系擂鉢、瀬戸鉢、越前窯等を主とする遺物が出土している^{註7}。伝世品かと思われる古手の物を除くと殆ど15世紀前半の遺物構成を示す好例である。本遺跡南東600m程には15世紀後半～16世紀後半までの遺物を出土する勝山館跡がある。中国製青磁、白磁、染付、赤絵、美濃碗、皿、越前擂鉢等を主体に若干の朝鮮、珠洲、瀬戸美濃系擂鉢、志野碗、皿、唐津碗、皿等が出土する^{註8}。又表採品ではあるが東700mの1457年築城洲崎館跡からは、この志苔館と勝山館の間を繋ぐ資料が得られている^{註9}。大浜中遺跡からは16世紀前半の青磁を主体にする遺物^{註10}が末広遺跡から16世紀後半の遺跡に見られる陶磁器^{註11}が出土している。以上が、I 期直前迄の関連する遺跡の概要である。

I 期遺物中には、青磁端反り碗、美濃瀬戸系擂鉢、胎土目積の唐津製品等、勝山館出土品と共に通する部分もあるが、唐津焼、砂目積焼成のもの、擂鉢、備前系擂鉢等、勝山館跡では見られない遺物が出土している。胎土の唐津、志野等の製品を勝山館終末期を示す遺物として把えて来たところであり、この両者の差が本遺跡、遺物が本格的に形・構成されていく始源を示すかと推するとこ

ろである。

桧山支管内では瀬戸内チャシ跡から胎土目積の唐津鉄絵大鉢が出土している^{註12}。平取町ボロモイチャシ跡等から胎土目積唐津鉄絵鉢、染付等が出土している^{註13}。千歳釜加遺跡出土の擂鉢^{註14}は第三群Aとしたものに類似し、或いはこの期に属するのかもしれない。福山城から唐津A-2類の擂鉢が出土している^{註15}。

II 期

17世紀初頭から末葉を充てているが瀬戸内チャシ跡から伊万里碗皿、唐津碗皿、擂鉢等の国産品と明の染付が出土している^{註16}。福山城から越前擂鉢その他が出土している^{註17}。

III 期

17世紀末葉から18世紀後半であるが、勝山館跡^{註18}瀬戸チャシ跡、福山城跡、から出土している。又江差港内舟船沈没地点引揚遺物中にもこの期に属するものがある^{註19}。天内山出土遺物は写真によると明末の染付碗皿、擂鉢一群B～C類、内ノ山系陶器等のようでもあり^{註20}、この期の古い段階であろうか。

シノタイ遺跡^{註21}東多来加第1号竪穴^{註22}、出土の皿はこの期の後半のものであろう。後者は見込みの文様からはⅣ期とすべきかも知れない。

IV 期

18世紀後半から19世紀中葉の間である。この期の後半、道内各地に陣屋等が設けられるが、その遺構確認調査が進められており良好な遺物が出土している^{註23}。仙台藩陣屋、戸切地陣屋、五稲郭^{註24}等では、土壙類、段重蓋物等が多く出土するが、本遺跡ではこれらの資料が少ない。又、桃内遺跡でこの期の便利が出土している^{註25}。

4 遺跡の性格

本遺跡の所在する大洞地区は、古来天然の良港として名高く、多くの船の出入りした事は想像に難くない。

江戸時代に

野作ノ城地ヲ「マツマイ」ト云フ一北地
の江湾ヲ「カミント」一略ト名テ一大港ナリ

其港中ノ海底至テ深シ 船ヲシテ能ク其街ニ
進ムヘシ ソノ街中ハ即チ野作總督の居處ア
按ニ松前候ノ居館ヲ云フ一^{註26}

と記されるのも上ノ国のことのようである。

勝山館が15、16世紀に繁栄したのは、日本海側における蝦夷交易の拠点として位置付けられていたからであり、その重要構成要素が本遺跡の所在する大瀬崎の存在である事も既述した所である。

本遺跡出土遺物中に14?15、16世紀の遺物が少數乍ら見られる事は或いはこれに関連するものなのかも知れない。

(1) 船上投棄遺物

江戸時代を通じて本州と北海道との交通輸送手段は全て船である。このことは出土遺物の殆んどが先ず船で運搬されてこの地に到着している事になる。従って出土遺物がこうした運搬の途次、陸揚げ寸前に本地点で堆積した事も想定する事はできる。沈船等の存しない事は調査で確認されており、遺物にもそうした一括性はない。積荷の一部破損、不良品等の投棄も考えられるが、大皿に焼繼ぎの痕跡が認められる事、墨書きのものがあること、灯明皿に煤等の付着が認められること、擂鉢の御し目が摩耗している事など使用の痕跡が顕著であり、陸揚げ直前の投棄の可能性もない。

幕末~明治頃、桧山地方の海岸漁場では『灘商い』と称する江差に拠点を置く商人が物資を船積みして訪れる船上で商いをするのが殆んどであり、稀に仕込み方が直接弁財船を仕立て本州迄航行し直接物資を仕入れる場合があったという^{註27}。

本州方面からの木材積船等はこの大瀬崎に船を停めるが、乗組員等が上陸する事は殆んどなく、船内の積荷で滞在中の生活は充分可能であり、むしろ余剰品を売り捌く事が彼等の業務の一部でもあったという^{註28}。

これらの船上の使用品の堆積とするには、碗皿以外の香炉、紅皿等の器種があること、各時代、多量にあることなどから否定的に考えざるを得ない。

(2) 番屋生活廃棄遺物

上述から本遺跡出土遺物は陸上生活に伴う廃棄物とするのが妥当のようである。

その生活の場としては第一に調査区南方の地点が挙げられる。この地には繩文時代~擦文時代に遺跡が形成されている事は既述した通りであり、その後の居住地の可能性が考えられる。只、旧地形を明らかにする事はできないが現在の面積は極

めて狭く、長期間に亘り大きな集落が営まれた可能性はない。江戸期の紀行文その他からもこの地に主要な集落が営まれた事は伺い得ない。

幕末~明治~昭和に至る迄、鰯、鮭その他の各種漁業の進展に伴い、漁夫の寝泊りする番屋が数棟立っており、その番屋を住むに借りて数年過した人も戦後のある時期に見られたとの事であり、これに伴う遺物の可能性も考えられる。

明治19年頃の上ノ国から洲根子(大崎)迄の間には躉建網15ヵ統、刺網3137放が設けられた^{註29}。これらで獲られた躉は波静かな大瀬崎に運ばれ舟に入れておかれたという^{註30}。

漁場の番屋には親方の家族と雇漁夫がともに寝起きするのが一般的とされる^{註31}が、上ノ国のご能登屋垂浪家は市街地に漁夫も寝泊りする大型の住宅を構え、150m程離れた海辺に別に番屋を有している^{註32}。建構を主とする大型の鰯漁場と刺し網中心の前浜漁業地との差であるのか、その上ノ国の特色であるのかは定かでないが、番屋の形態にも諸種があるようである。

番屋での食生活は、主食、三平汁、味噌汁、焼魚、鰯の切り込み、漬物といった程度であり^{註33}、食器もそれに見合う程度のものであろう。

1ヵ統の雇漁夫は25人程というから^{註34}出土量に問題がないかも知れないが、遺物組成中に番屋生活には無縁と思われるものも見られるようである。

58年春、大瀬崎遺跡の範囲確認調査を上ノ国町教委で実施したが、周辺調査の一環として、番屋跡と推される石積みの平坦地に試掘を試みた。その出土遺物は若干の18世紀後半のものと19世紀以降のものであった。

限られた試掘結果をもとづく結論は控えなければならないが、番屋生活に伴う遺物との断定は、猶保留しておきたい(P.L. 11, 40)。

(3) 市街生活廃棄遺物

大瀬崎以外でこれら遺物の帰属し得る地点を求める得るであろうか。

昭和40年頃迄の上ノ国はゴミ収集車の巡回がなく、各家庭で廃されるゴミは海岸沿いの住宅地の裏手に捨てられるのが普通で、各場所毎にその家の姓や屋号を頭にした「○○のコズゲ」と呼ばれていた。殆んど毎日、朝夕何がしかのゴミがその「コズゲ」に捨てられるのであり、相当の量になっ

た。

このゴミが山をなすようになると大抵、大荒化や天ノ川の洪水等が岸辺を激しく洗い跡形もなく件の山を持ち去っていくのであった。

調査地区は大きな湾が形成され、この地区に堆積した物が容易に外方へ流出していくことはない。

出土遺物破断面の摩耗は少なく、出土破片点数3,000点弱に対し接合部終了後の個体識別点数は1,500点弱と接合例も多い。水流によって運搬される物の摩耗度がどの程度のものなのか、荒化洪水等で持ち去られた物が都合良くこの調査区付近に滞留するのか等について実証し得る所はなく、殊に近代になるにつれて各家庭からはき出されるゴミの量は増大したと思われるが、出土遺物中に電気製品、機械部品等の見られない事は留意すべきかと思われるがなお出土遺物の多様性、時間的連続性はこうした過程での遺物の集積地点が本調査区である可能性を推測させ得るところである。

これらの事から本遺跡の成立は、番屋生活をも含む大湊湾直近での居住に伴う生活廃棄物の集積か上ノ国市街からの生活廃棄物の集積として把え得るであろう。

そのいずれにしても、16世紀末葉以来、この付近の海岸に集落を形成し、居住してきた人達の長年の生活廃棄物が自然の営為によって集積し形成されたのが本遺跡だとすることができよう(PL.12)。

(4) 上ノ国市街の変遷

勝山館跡の終末段階と、本遺跡初頭との遺物構成の差を取りあげて先に両者の年代を推測した。

勝山館は山城の形態をとるとは言いながら、多量の日常什器類、食料残滓とも思われる炭化米、ソバ、獸骨等の遺物、重複して検出される遺構等、かなりの恒常的な居住とその集團数を予測せることとなるところとなっている。

この時の現上ノ国市街部分での集落形成がどのような状態にあったのかは、館の性格を明らかにする意味から、更には当時の社会構成を推測する上でも解明しなければならない事項である。

慶長のはじめに城を松前へ移したとの江戸時代の伝え³⁵は勝山館の終末を語るものであり、慶長元(1596)年上ノ国へ設けたと言う検山番所³⁶は館内から出た現在の市街地のどこかに設けられていると推定される。

現市街地下位から13世紀頃の遺物が出土してお

り³⁷、本遺跡の限られた資料から即断する事は適当ではないが、これらの出土遺物は、或いは勝山館跡から、現海岸線へと集落の中心が移っていく過程を示しているかとも推するところである。

又出土遺物の集計は18世紀にその遺物の三分の一が集中することを示している。

この頃の上ノ国は寛文9(1669)年戸数150戸³⁸で松前以西最大北海道第三の集落を形成して以来、天明6(1786)年210戸余³⁹あるいは家数300軒程⁴⁰と最多を数える時にあたっている。が、この頃から鮫は不漁となり、西蝦夷地へ漁夫として、或いは自ずから船を造って漁夫を雇い⁴¹出稼ぎに出たり、天ノ川沿いに移住して⁴²畑作等を営む者も増し、文化4(1807)年には戸数70戸⁴³と記される程に衰微している。その後は鮫漁の盛衰とともにしながら明治にいたっている。

尚、生産地における動向、流通機構の状況等々は筆者の任とするところではない。(松崎)

◎本稿校正中に竹内茂彦氏から上ノ国市街地発見の唐津砂目皿皿下部破片、16世紀後半越前描鉢等が寄せられた。皿は底部糸切後に削りあげて高台をつくっているものである。急ぎ第1図にマ印でその地点を示した。

註1 国内出土の肥前陶磁 1984年 佐賀県立九州陶磁文化館

2 瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 1980年 瀬棚町教育委員会

3 民俗資料中には伝世品として散見され町郷土館にも収蔵展示されている。

4 北海道出土の中世陶器、舶載磁器については先学の論考がある。本項では主に本遺跡出土資料に関連するところを筆者の知る範囲で述べる。

北海道の中世陶器 吉岡康暢 日本書文化8 1979年、日本海の陶磁貿易 佐々木達夫 日本書文化8 1981年、北海道出土の中世陶磁 松下亘 北海道の研究2 1984年

5 考古学ジャーナル No.213 1983年

6 上ノ国遺跡 大場利夫・渡辺義庸他 1960年 上ノ国村教育委員会及び社1吉岡論文。

7 史跡志苔館跡、同I、II 1986、84、85年函館市教育委員会

- 8 史跡上之国勝山館跡 I ~ IV 1980~86年
上ノ国町教育委員会
- 9 考古学雑誌67-2 1981年
- 10 北海道考古学第9輯 1973年
- 11 未広遺跡における考古学的調査(上)、(下)
1981、82年 千歳市教育委員会 尚出土遺物
について田村俊之氏よりご教示を賜った。
図上復原されている擂鉢は本遺跡四群B類
に比定されるのかも知れない。寛永通宝も出
土しており、18世紀降下火山灰(樽前a)よ
り新しい遺構もあり年代幅を有するようであ
る。
- 12 潤田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 1980
年 潤田町教育委員会
- 13 ユオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡・二風
谷遺跡 1986年 北海道埋蔵文化財センター
- 14 千歳遺跡 1968年 千歳市教育委員会、世
界陶磁全集4 1977年
- 15 史跡福山城跡II 1975年 松前町教育委員
会
- 16 註12に同じ
- 17 史跡福山城跡I ~ III 1984~1986年
- 18 史跡上之国勝山館跡IV 1983年
- 19 江差町史第5巻通説一 1982年 江差町
- 20 天内山 1971年 余市町教育委員会
- 21 日高の文化財第1集 1967年 日高管内郷
土史研究協議会 トニカチャシコツ 1985年
門別町教育委員会 遺物について乾芳宏氏か
らご教示を賜った。
- 22 樺太・千島考古・民族誌2 馬場脩 1979
年
- 23 史跡白老仙台藩陣屋跡 I ~ IV 1982~86年
白老町教育委員会、史跡松前藩戸切地陣屋跡
(56~60年度) 1982~86年 上磯町教育委
員会、史跡福山城跡 I ~ III 1984~86年 松
前町教育委員会
- 24 出土遺物について鈴木正語氏よりご教示を
賜った。
- 25 桃内遺跡 名取武光・松下亘 北方文化研
究報告第19輯 1964年
- 26 東北薩摩諸国図誌 馬場貞由 1809年
- 27 日本海沿岸ニシン漁撈民俗資料調査報告書
1970年 北海道教育委員会
- 28 中村広 京谷昌治(明治42年生)氏談。
- 29 続上ノ国村史 1962年 上ノ国村
- 30 註28に同じ
- 31 鯨漁と番屋 矢島寛
- 32 註29に同じ
- 33 註31に同じ
- 34 註27に同じ
- 35 東遊雜記 古川古松軒 1788年
- 36 上ノ国村史 1956年 上ノ国村
- 37 上ノ国遺跡 1960年 上ノ国村教育委員会
- 38 津輕一統志 卷十 新北海道史第7巻史料
1 1969年 北海道
- 39 蝦夷拾遺 上ノ国村史 1956年 上ノ国村
- 40 遠山村垣西蝦夷日記 1806年 崎川会資料
第13号
- 41 註36に同じ
- 42 註40に同じ
- 43 西蝦夷地日記 田草川伝次郎 1807年

VII 総括

二次に亘る発掘調査と10ヶ月間の整理作業の結果、種々の事が明らかとなった。

本遺跡の調査では16世紀末以降近代に至る400年弱の間の人々の生活内容を伝える貴重な遺物を出土した。

それは恐らくは現在の字上ノ国市街近傍に居住した人達のそれを語るものであり、日常雑器からある程度の高級品をも含むものあり、様々の暮らし振りが伺われるものである。

こうした近世以降400年間に亘る連続した時間の流れを一遺跡の発掘調査で明らかにした例は今の所北海道にはない。しかもその調査例の少ない現状では、本遺跡出土資料の主要部分はその目安になるかと思われる。北海道の近世史を記す文献資料は必ずしも多くなく、北海道近世諸遺跡の実年代を考える資料を提供できたかと思う。

複数の生産地の製品が検出され、各々の量の増減が時間と関係して見られる事は、各生産地での生産量、流通状況と市場等々経済史の面に対する一消費地からの資料となるかと思われる。

史跡上之國勝山館跡の存立と変遷や上ノ国市街の形成を探り、上ノ国町に住む人達の生活のあとを尋ねるとともに、北海道の近世遺跡の調査に若

干の資料を提示し、本州に於ける産業活動に関連する資料も提示し得た事は本調査の大きな成果であり、当初の予想を超える結果であった。

本遺跡は明確な遺構が存する予測ではなく、包含層も波紋等による擾乱があり遺物散布地的性格が強かった。陸上の通例に照するならば工事に際し遺物等を拾集して処理するというところでもある。

荒木は本遺跡の立地条件、周辺の状況等を踏まえ、当初から工事対象範囲の全面発掘調査を基本とし、今回の結果を得た。

遺構、遺物の集中が予想される地点のみが発掘調査の対象とされ、他の隣接地区には独特的の処理方法がとられる事が多いようである。

本調査は海底という条件の違いはあるが、通常の発掘調査とは幾分異った調査例と言えよう。

尚、出土例の乏しい物も含めて、かなりの強引な類推も試みているところであり、誤りも多い事と思われる。

諸先生、諸先学のご指導とご叱正をお願い申し上げますとともに、更に資料の検討を重ね欠を補いたく思うものであります。 (荒木・松崎)

引用参考文献

- 遠山村垣西蝦夷日記 犀川会資料13 1806年
東北縫紉諸國図記／野作雜記訳説 上・下 馬場貞由 1809年
西蝦夷地日記 田草川傳次郎 1944年
桧山南部の遺跡 上ノ国村教育委員会 1955年
上ノ国村史 上ノ国村 1956年
上ノ国遺跡 上ノ国村教育委員会 1960年
統上ノ国村史 上ノ国村 1962年
桃内遺跡 名取武光 松下亘 1964年 北方文化研究報告第19輯
倉敷考古館研究集報第1、2、5、18号 倉敷考古館 1966、68年
千歳遺跡 千歳市教育委員会 1967年
日高の文化財第1集 墓藏文化財篇 日高管内郷土史研究協議会他 1967年
津軽一統志卷10 新北海道史7-1 1969年
和漢三才図会 上・下 寺島良安 1970年
日本海沿岸ニシム漁撈民俗資料調査報告書 北海道教育委員会 1970年
積丹半島調査報告書 茶津4号洞窟遺跡 発足岩陰遺跡 小樽市博物館 1970年
天内山 統繩文・擦文・アイヌ文化の遺跡 余市町教育委員会 1971年
穂内館 北海道中世館跡調査報告書 福島町教育委員会 1972年
陶磁大系第7常滑越前、10備前、13唐津 1972、73年
北海道余市町大浜中遺跡の遺物一特に一括出土した青磁について 松下亘 北海道考古学第9輯 北海道考古学会 1973年
青戸・葛西城址調査報告Ⅱ~Ⅳ 東京都・葛飾区・青戸葛西城址調査会 1974、75、77年
遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書 北海道教育委員会 1975年
史跡小谷城跡環境整備事業報告書 滋賀県湖北町教育委員会 1976年
北陸の古陶 加賀・越前・珠洲・古窯を探る 小松市立博物館 1976年
日本陶磁全集7 越前珠洲、10備前 1976、77年
世界陶磁全集 3 日本中世、4 桃山(一)、5 桃山(二)、7 江戸(一) 1976、77、80年
「鉢の古い容器『鉢徳利』について」とくに
北海道開拓記念館資料を中心の一 松下亘 氏家等北海道開拓記念館研究年報第5号 北海道開拓記念館 1977年
金沢城跡の発掘 佐々木達夫 金沢大学日本海城研究所報告第13号 1977年
上長佐古窯址群発掘調査報告書 宮崎村教育委員会 1977年
「北海道に現存している異色徳利について」 松下亘 物質文化30 物質文化研究会 1978年
史跡 堀越城跡 石川バイパス遺跡発掘調査報告書 弘前市教育委員会 1978年
柿右衛門窯跡 第2次発掘調査概報 有田町教育委員会 1978年
桙太・千島考古・民族誌2、3 馬場脩 1979年
北海道の中世陶器 中世日本海海運史の一鈴 吉岡康暢 日本海文化第6号 金沢大学法文学部 1979年
瀬田内チャシ 砂利採取事業に伴う緊急発掘調査の概報 瀬棚町教育委員会 1979年
史跡根城跡発掘調査報告書 I~Ⅳ 青森県八戸市教育委員会 1979~1986年
史跡上之国勝山館跡 I~Ⅳ 上ノ国町教育委員会 1980~86年
日本やきもの集成3瀬戸・美濃・飛騨、9山陽 1980、81年
旧姓茶菴墓地調査報告 浦河町教育委員会 1980年
瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 瀬棚町教育委員会 1980年
浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡Ⅳ 浪岡町教育委員会 1980年
伊達西部地区遺跡発掘調査報告 福島県文化財調査報告書第82集 福島県教育委員会 1980年
有田古窯跡群と町並 第1次窯跡福財団法人観光資源保護財団 1980年
「駄知座三平皿について」 松下亘 氏家等北海道開拓記念館研究年報第9号 北海道開拓記念館 1981年
日本海の陶磁貿易 佐々木達夫 日本海文化第8号 日本海文化研究室 1981年
北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨 松崎水

- 穂、百々幸雄、中村公宣 考古学雑誌第67巻第2号 1981年
- 瀬戸市史 陶磁史篇2 瀬戸市史編纂委員会 1981年
- 千歳市文化財調査報告書Ⅷ、Ⅸ 末広遺跡における考古学的調査(上)、(下) 千歳市教育委員会 1981、82年
- 下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 青森県教育委員会 1981年
- 村松城跡発掘調査概要報告書 村松町教育委員会 1981年
- 豊原寺跡Ⅱ 草原院跡第2次発掘調査概報 丸岡町教育委員会 1981年
- 長吉谷窯跡 有田町教育委員会 1981年
- 江差町史第五巻通説1 1982年
- 神恵内村觀音2号洞窟遺跡発掘調査報告書 小樽市博物館紀要No4 小樽市博物館 1982年
- 開闢丸 海底遺跡の発掘調査報告1 江差町教育委員会 1982年
- 史跡松前藩戸切地陣屋跡 昭和56~60年度発掘調査概要報告 上磯町教育委員会 1982~1986年
- 史跡 白老仙台藩陣屋跡I~IV 昭和56~60年度環境整備事業概報 白老町教育委員会 1982~1986年
- 村松城跡発掘調査報告書 村松教育委員会 1982年
- 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 館林・水砂・花前Ⅱ-1 財團法人 千葉文化財センター 1982年
- 大坂城三の丸跡の調査Ⅰ 京橋口における発掘調査報告書 大手前女子大学史学研究所 1982年
- 島根県立博物館調査報告第3冊 島根県立博物館 1982年
- 静浦D遺跡と道南地方の擦文文化 久保泰 考古学ジャーナル1月号 1983年
- 下北地点原子力発電所建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査センター 第75集 1983年
- 浜通遺跡発掘調査報告書 東通地点原子力発電所建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 青森県教育委員会 1983年
- 特別史跡一乘谷朝倉氏遺跡 県道鰐江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書 福井県教育委員会 1983年
- 埠市文化財調査報告第15集 埠市教育委員会 1983年
- 北海道出土の中国陶磁 松下亘 北海道の研究第2巻 考古篇II 1984年
- 北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁 佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- 上ノ国漁港遺跡 昭和58年度発掘調査概報 上ノ国町教育委員会 1984年
- 史跡 福山城I~III 昭和58~60年度発掘調査概要報告 松前町教育委員会 1984~1986年
- 史跡 志苔館跡I、II 昭和58、59年度環境整備事業に伴う発掘調査概報 函館市教育委員会 1984、85年
- 豊原寺跡V (推定)僧房跡発掘調査概報 丸岡町教育委員会 1984年
- 特別史跡一乘谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査 福井県教育委員会 1984年
- 伐株山城跡 大分県玖珠町教育委員会 1984年
- 古窯跡分布調査報告書 伊万里市文化財調査報告書第16集 伊万里市教育委員会 1984年
- 床浪海底遺跡 長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書 鷹島町教育委員会 1984年
- トニカチャシコツ 門別町埋蔵文化財発掘調査報告書 門別町教育委員会 1985年
- 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第76集 仙台市教育委員会 1985年
- 下津城跡発掘調査報告書I 稲沢市文化財調査報告書II 稲沢市教育委員会 1985年
- 国指定史跡 「伝堀越御所跡」 御所之内遺跡発掘調査報告書 予備調査~第3次調査 菅山町教育委員会 1985年
- 愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅳ 瀬戸・藤岡(瀬戸古窯跡群) 愛知県教育委員会 1985年
- 水中考古学 荒木伸介 考古学ライブラリー35 1985年
- 波佐見古陶磁文様集 1985年
- ユオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡・二風谷遺跡 沙流川総合開発事業(二風谷ダム建設用地内)埋蔵文化財発掘調査報告書 北海道埋蔵文化財センター 1986年
- 特別史跡 五稜郭跡I 函館市教育委員会 1986年
- 史跡志苔館跡 昭和58~60年度環境整備事業に

伴う発掘調査報告書 南館市教育委員会 1986年
佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査（遺物篇）
有田町教育委員会 1986年

日本貨幣図鑑 郡司勇夫
漁と番屋 矢島音

第2表 陶磁器集計概括表

時期 器種	I	II	III	IV	V	18c～ 幕末	18c 以降	時期 不明	計
碗	2	7	206	104	118			1	438
皿	5	42	181	34	60			8	330
鉢		2	1	1	1		21		26
甕	2	1	1	43		1	57		105
壺		9							9
擂鉢	22	58	33	22	53			2	200
片口					51				51
行平							4		4
土瓶					1		38		39
瓶・徳利	1	1	7	75	24	3	43		154
水注							2		2
水差し	1						2		3
香炉			5				1		6
その他							7		7
器種不明							11	81	92
計	33	111	443	279	318	4	186	92	1,466

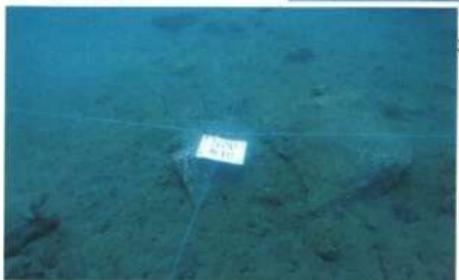
図 版

凡　例
H　　肥前
H'　　肥前系
S'　　瀬戸・美濃系
I~286 掲図Noと符合

1 調査地点



2 グリット設定



3 堆積断面



3 発掘調査



4 遺物検出



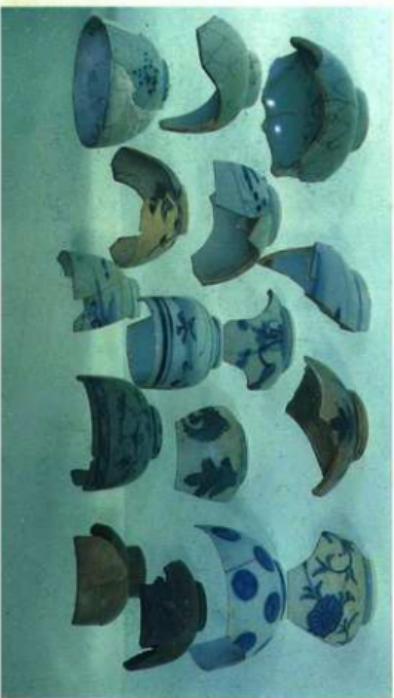
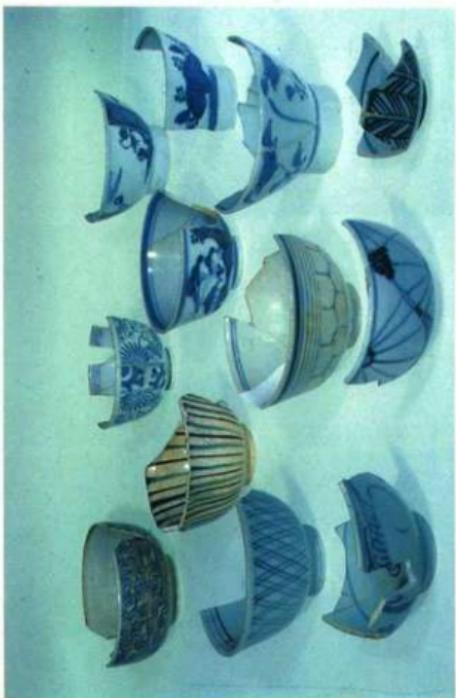
5 発掘調査

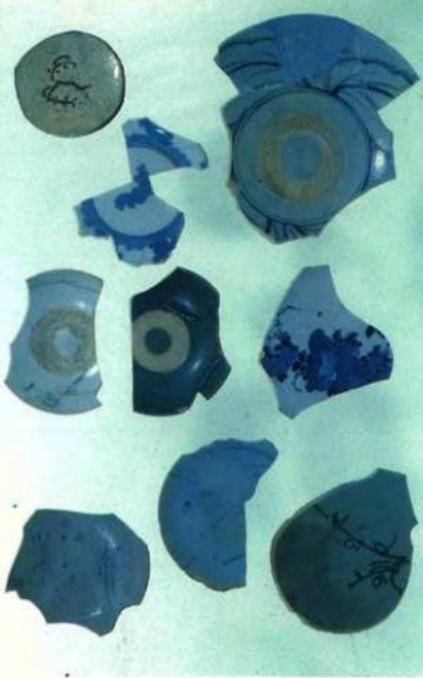


6 遺物の吐出



7 実測作業





屋号合、能登屋久右衛門の墨漬



直径43cm 器高16cm

笠浪家伝世の墨漬体





遺跡航空写真（昭和23年）



遺跡遠景 防波堤工事が始まっている。左上夷王山、史跡上之国勝山館跡（昭和52年）



調査前一後方夷王山（昭和56年）



調査工事終了後（昭和62年）



昭和30年頃

昭和62年





昭和37年



昭和62年

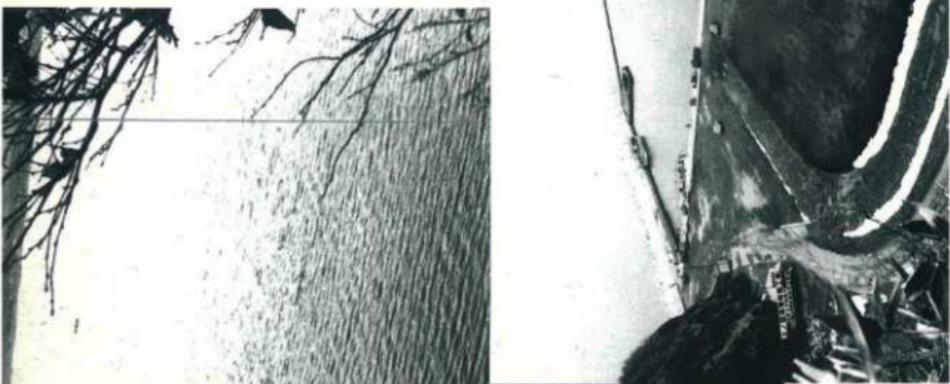


昭和58年 第1次調査



昭和62年 調査工事完了

PL. 10 調査位置



昭和62年 工事終了状況

昭和58年 第一次調査



遺跡にのぞむ
番屋と
ハネダシ



(昭和初期?
久末久義氏提供)

番屋跡石積
(昭和56年)



番屋跡石積
(昭和56年)



PL. 12 天ノ川河口と遺跡



天ノ川河口、上ノ国市街
と遺跡位置

(昭和23年)

天ノ川河口から見た上ノ国市街

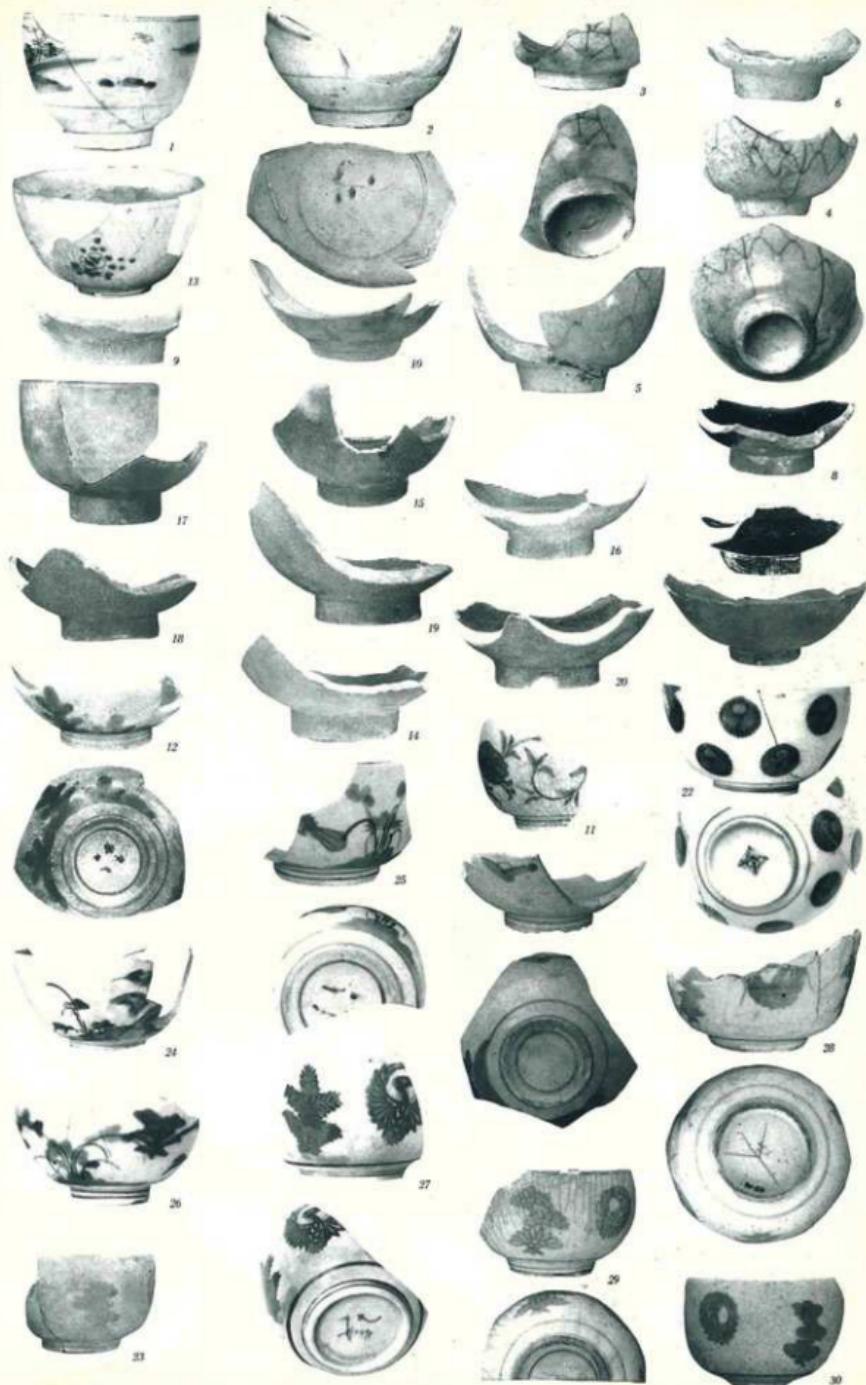
ハネダシが残る
(後方勝山船、夷王山
—昭和30年頃)

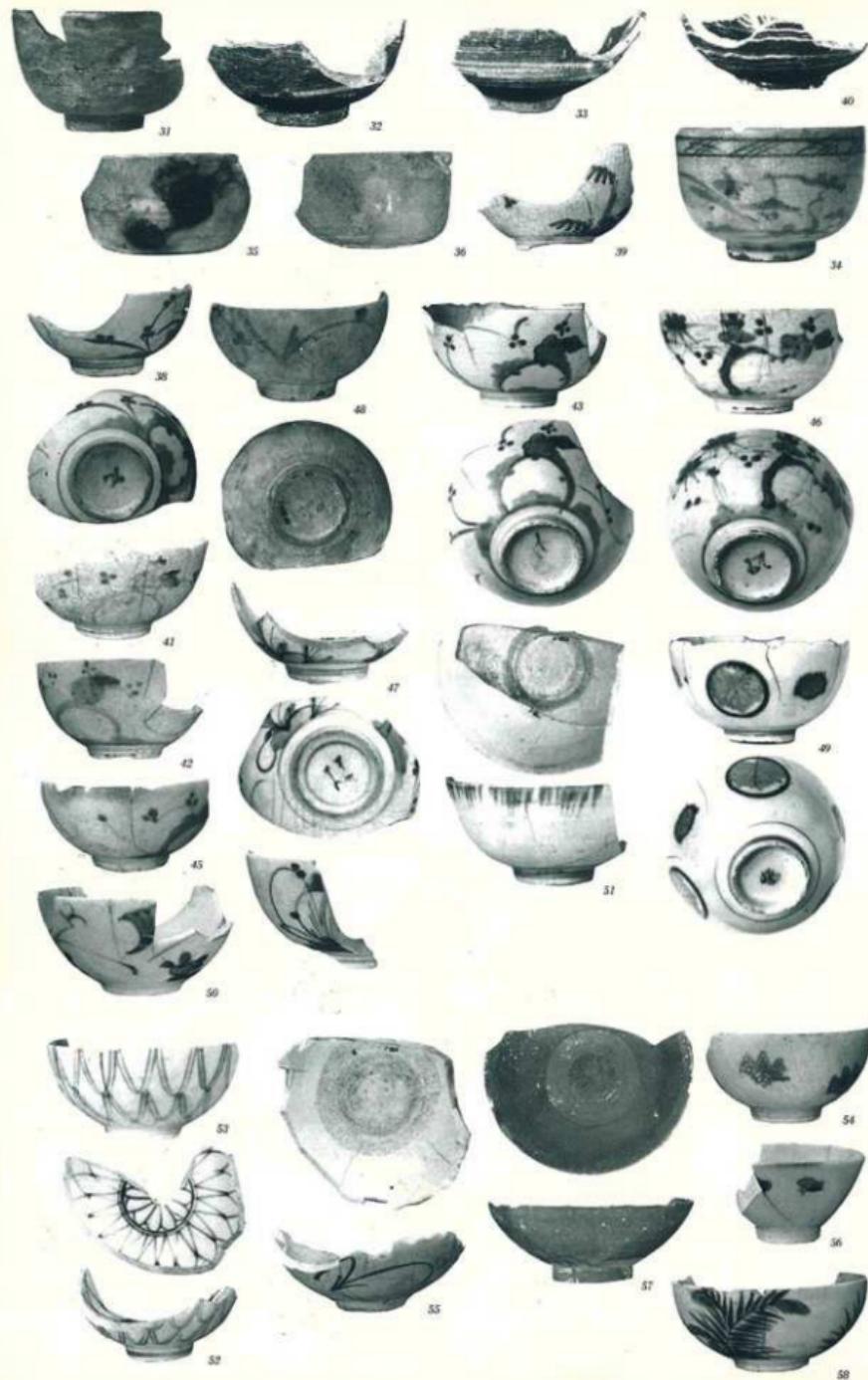


天ノ川河口から遺跡をのぞむ
(昭和30年頃)

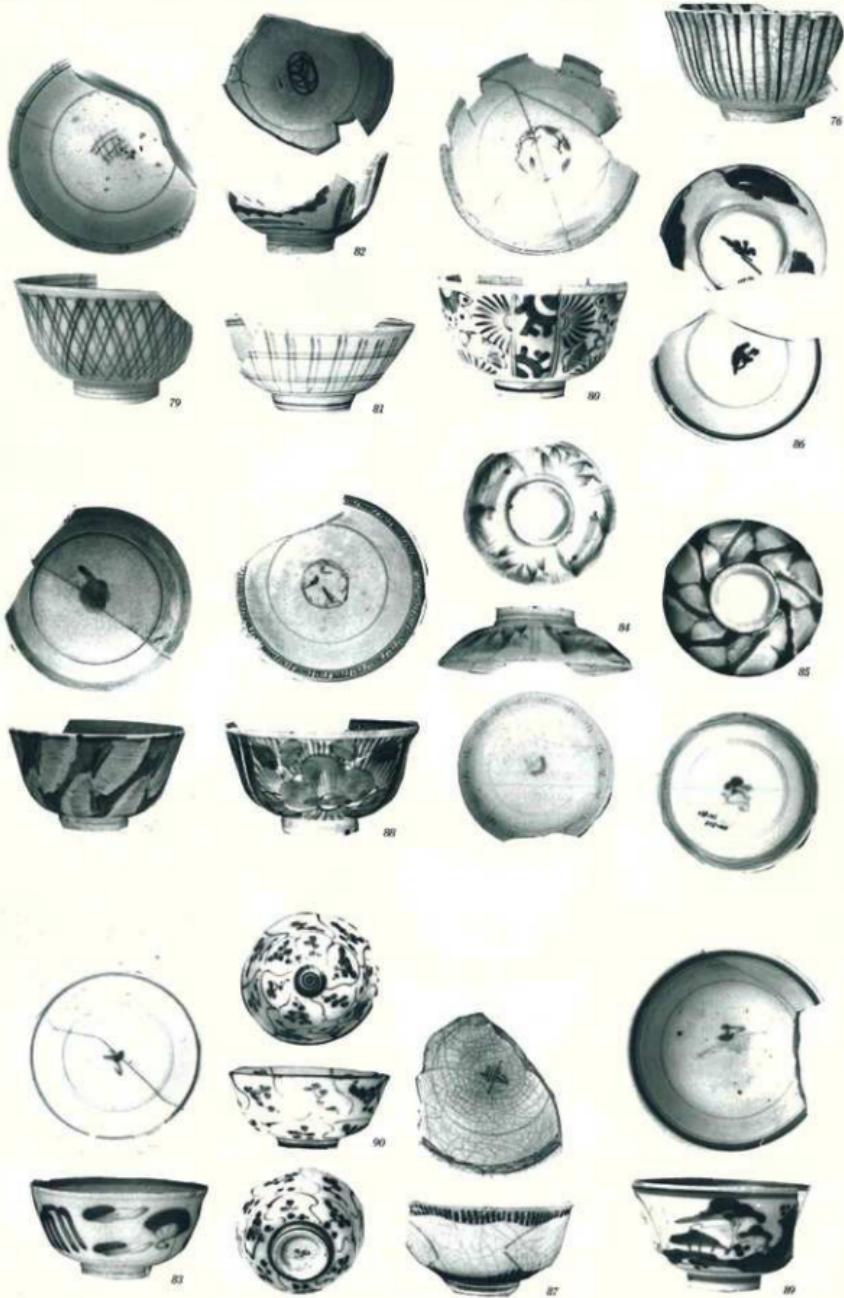
遺跡から上ノ国市街をのぞむ
(左端河口—昭和60年)













91



92



103



96



100



101



102



103



104



93



94



106



95



97

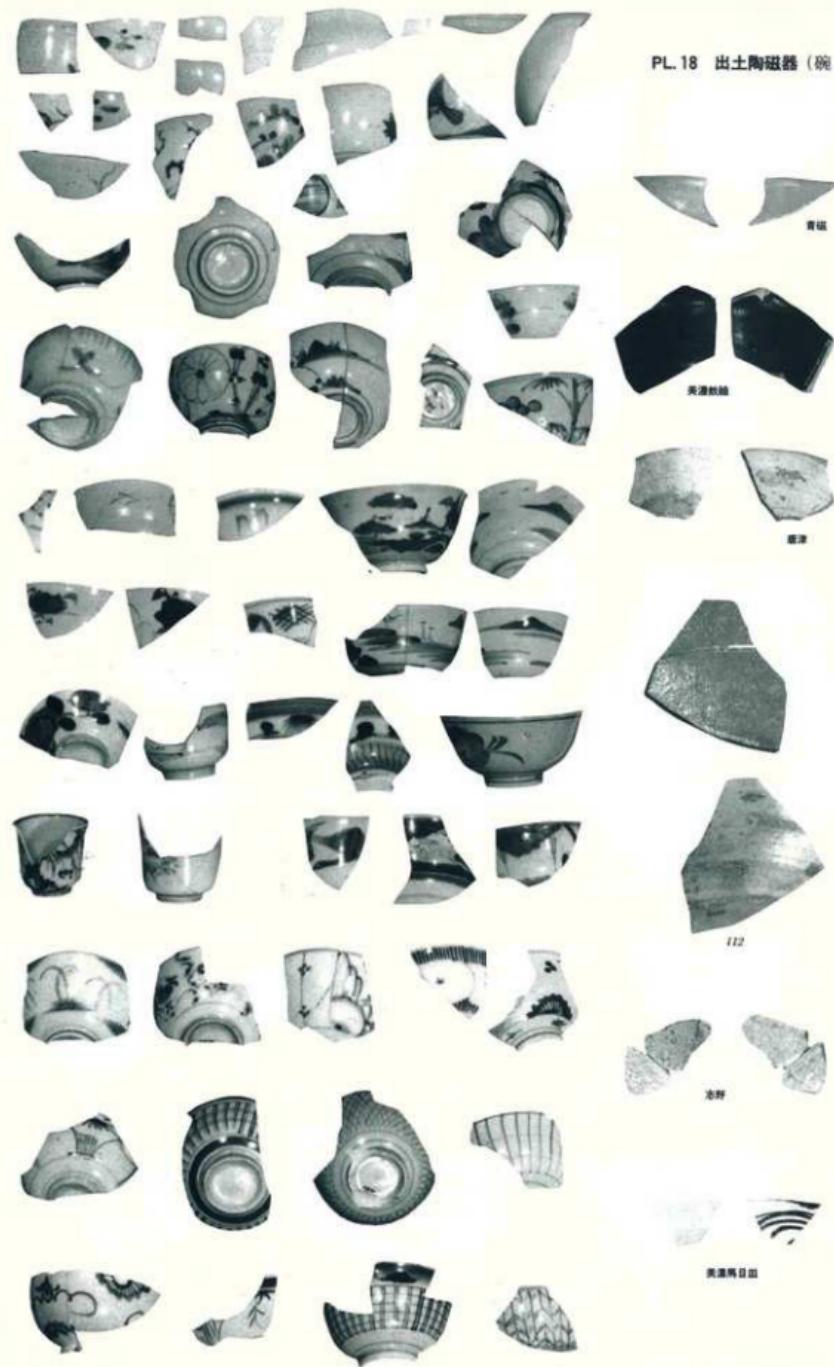


102

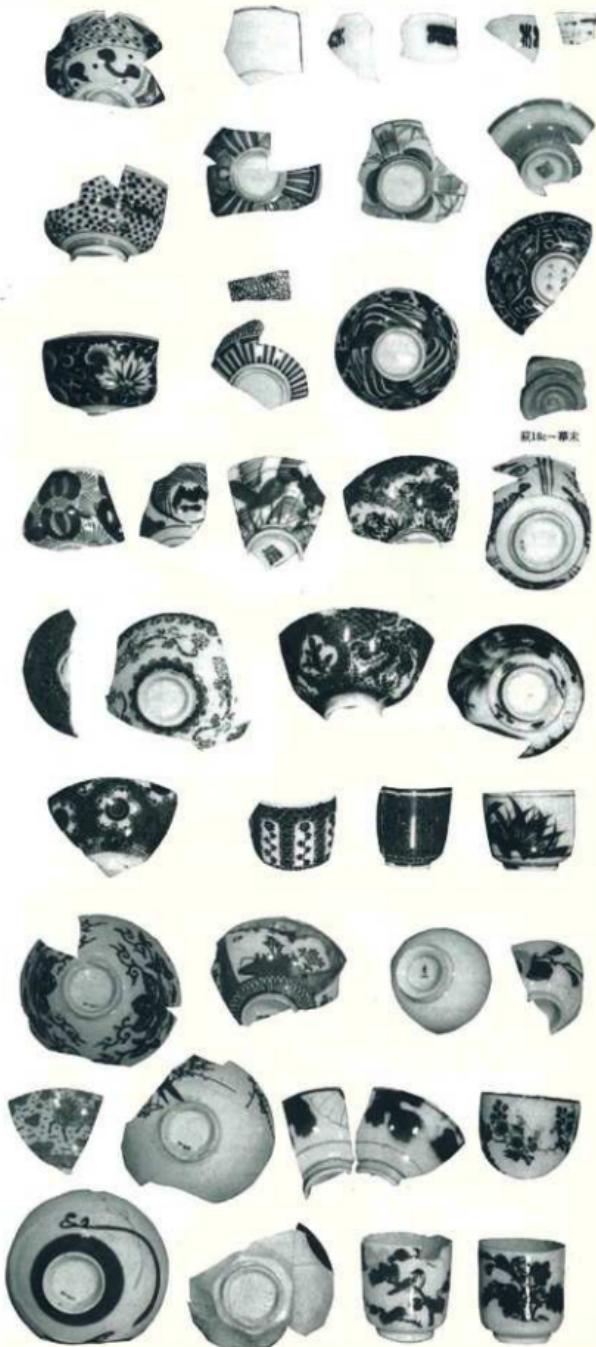


104

PL. 18 出土陶磁器（碗·皿）



PL. 19 出土陶磁器（碗）





107



109



111



113

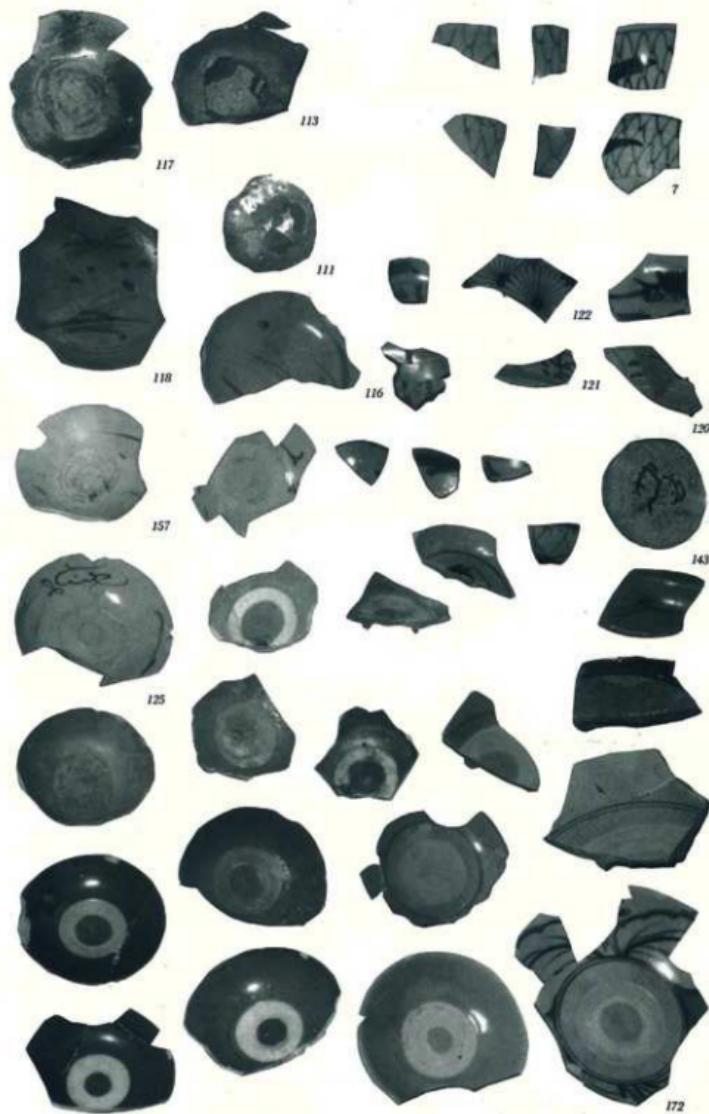


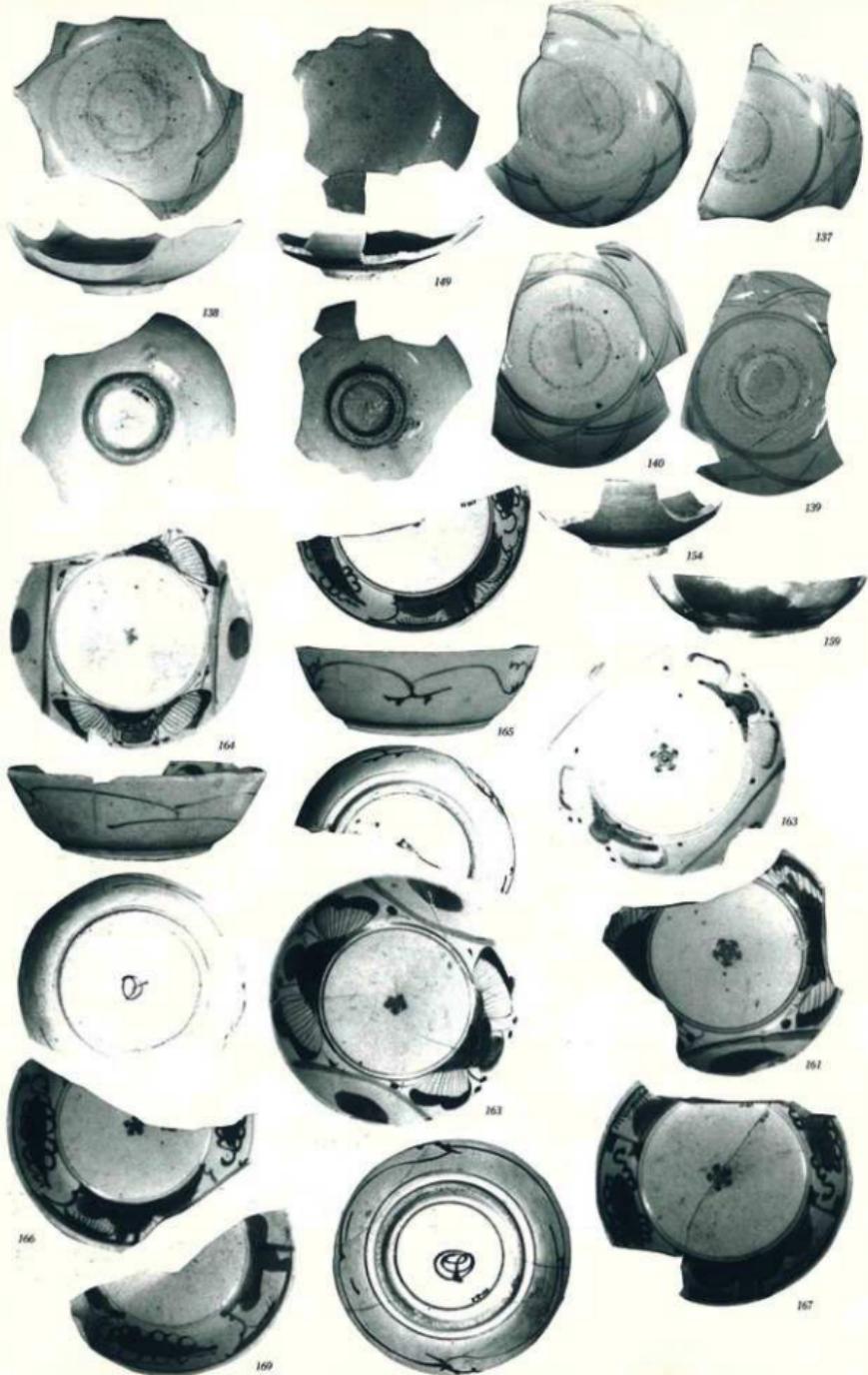
114

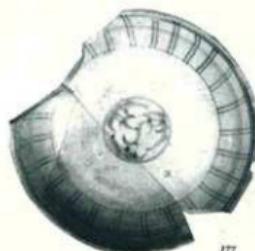


115

PL. 21 出土陶磁器 (Ⅲ)







180



185



186



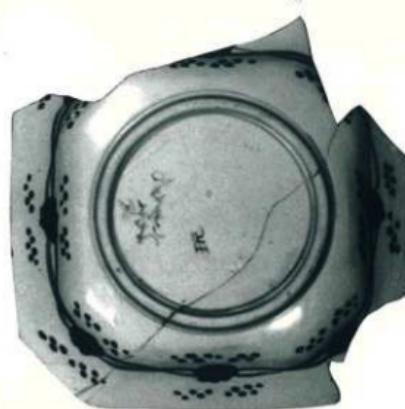
187



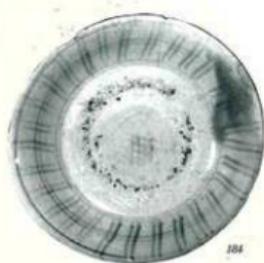
186



190



191



188



189



193



194



196



199



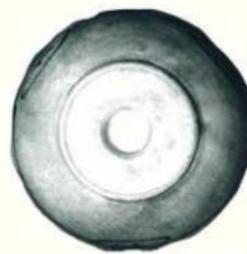
173



174



175



179



180



181



182



184



187









220



222



224



225



245



226



246



227



233



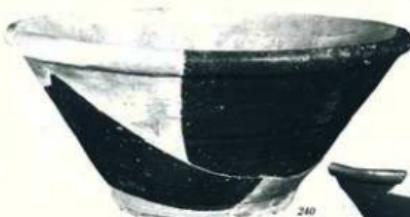
234



239



238



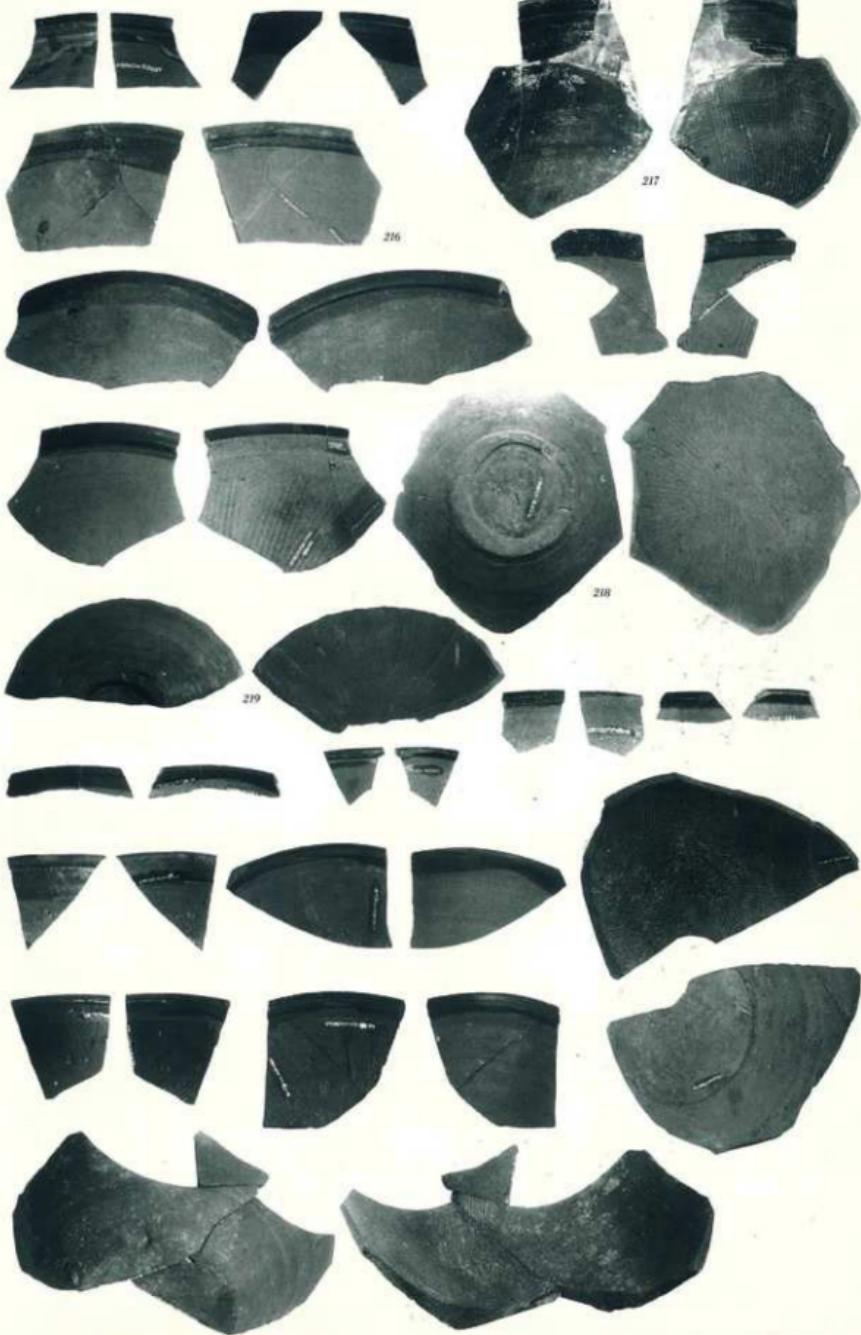
240

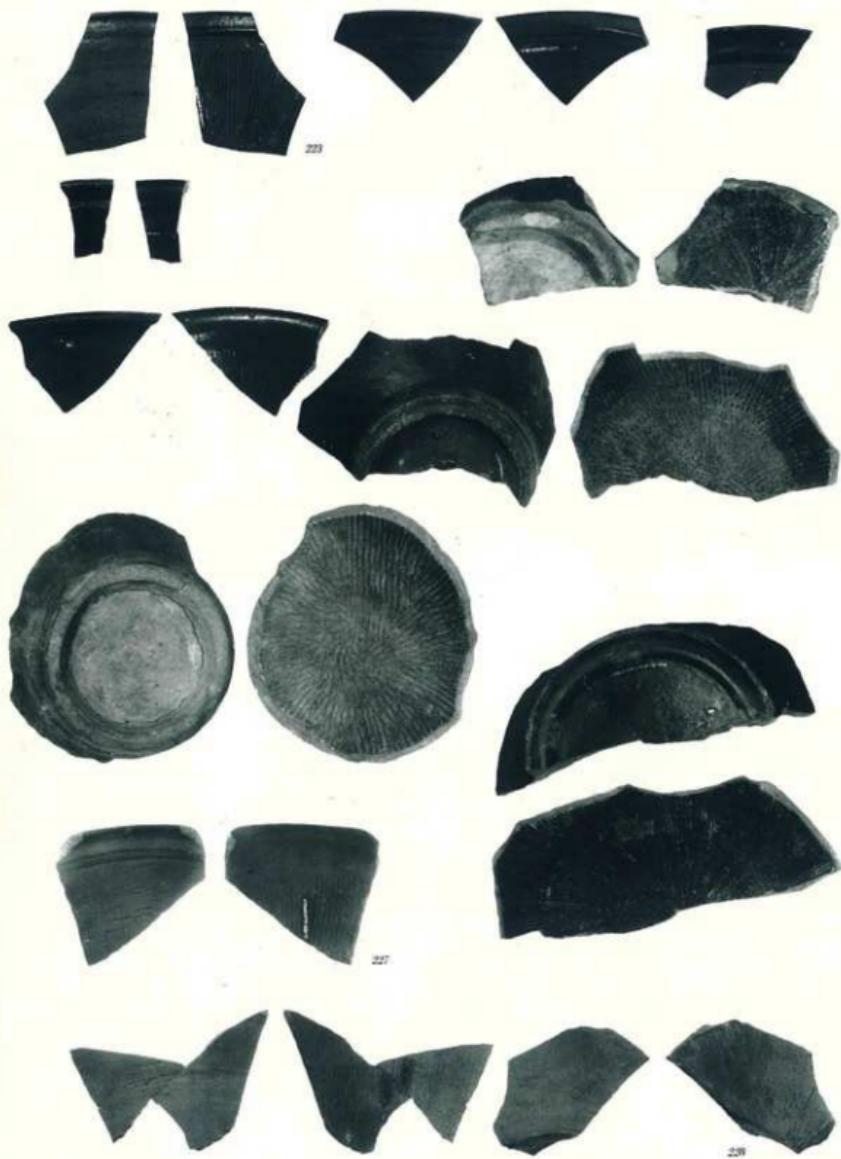


250



253





PL. 31 出土陶器 (擂鉢)



231



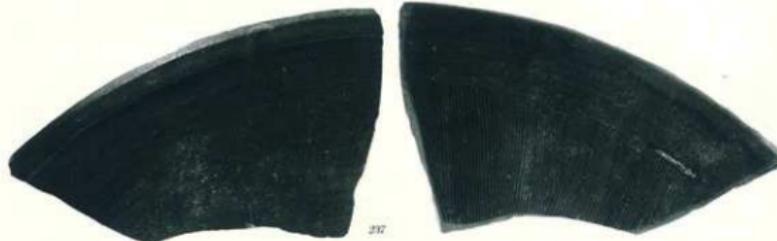
235



233



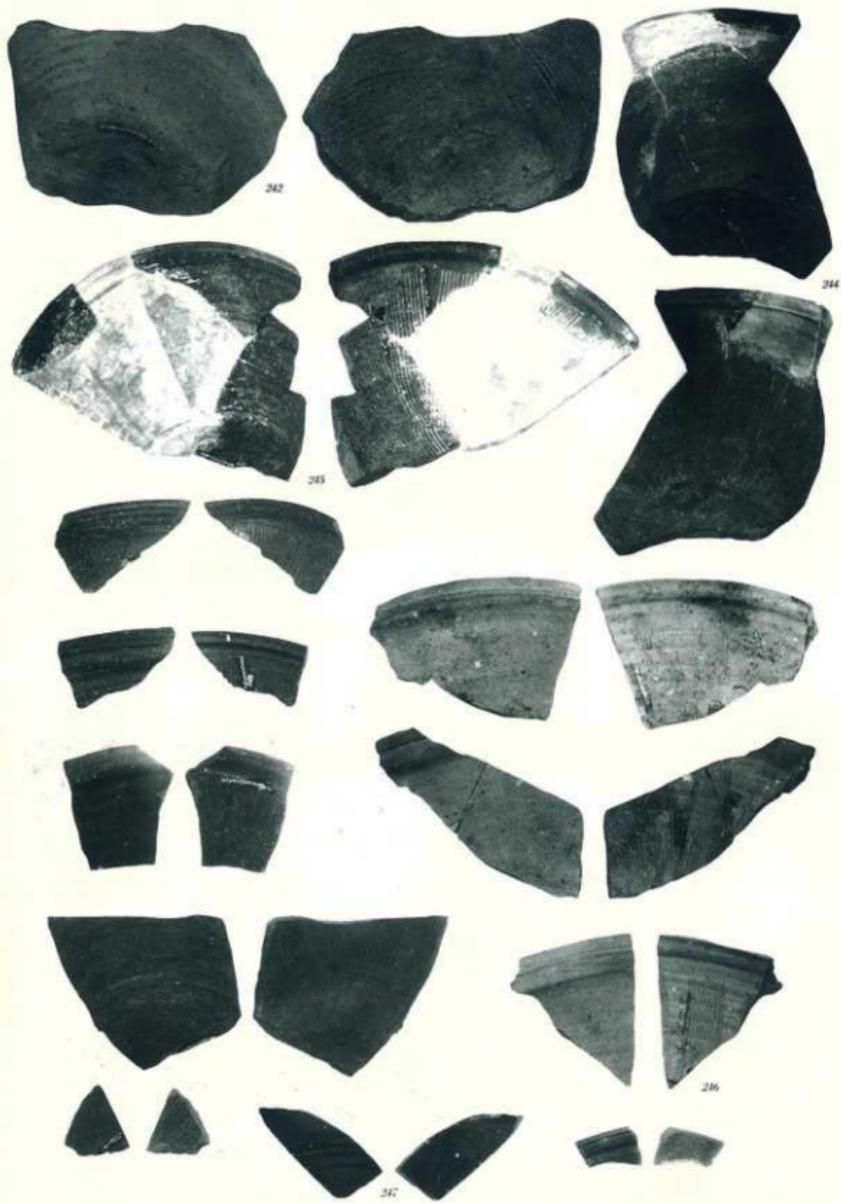
232



237

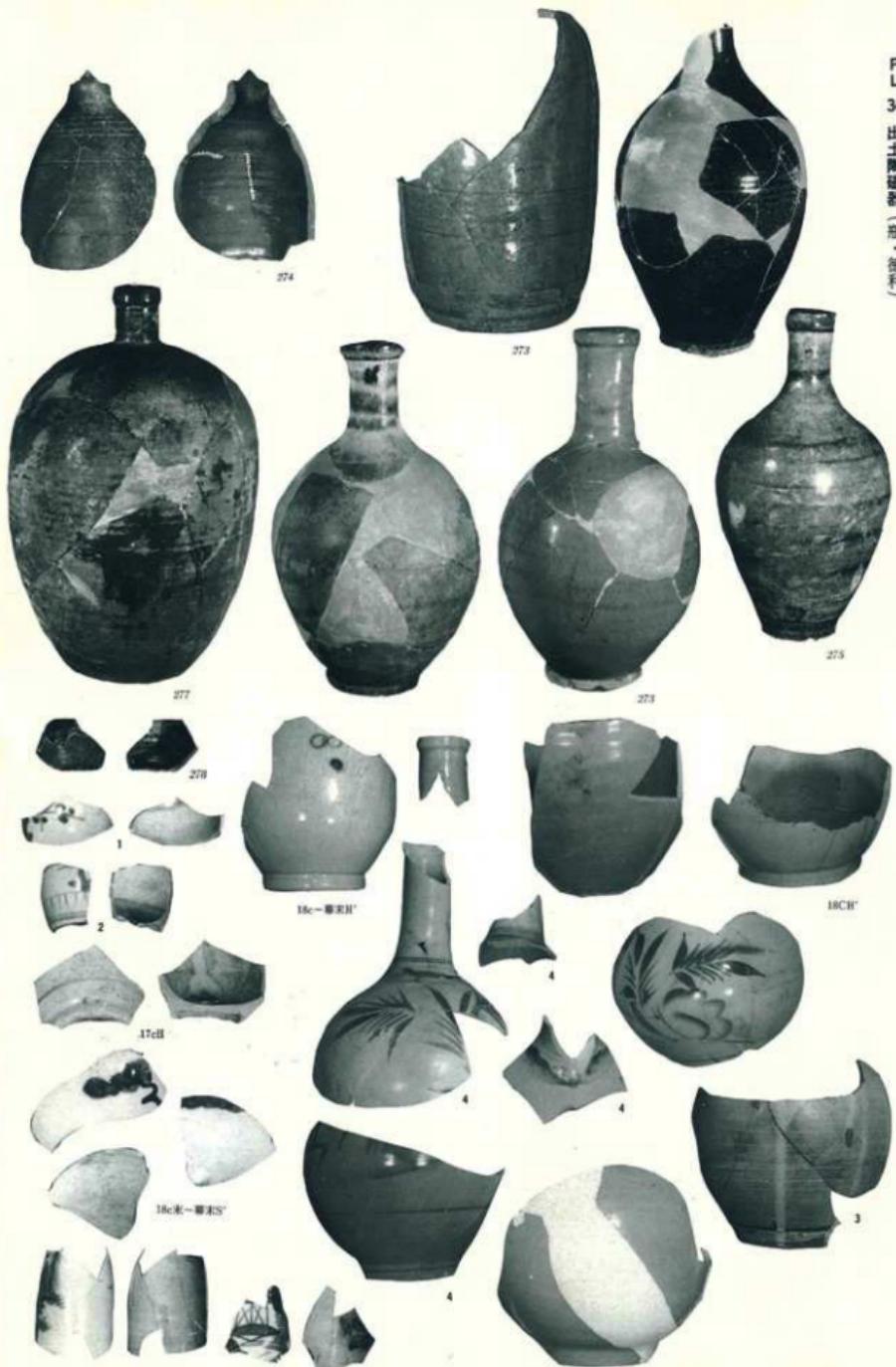


236



PL. 33 出土陶器（擂鉢）





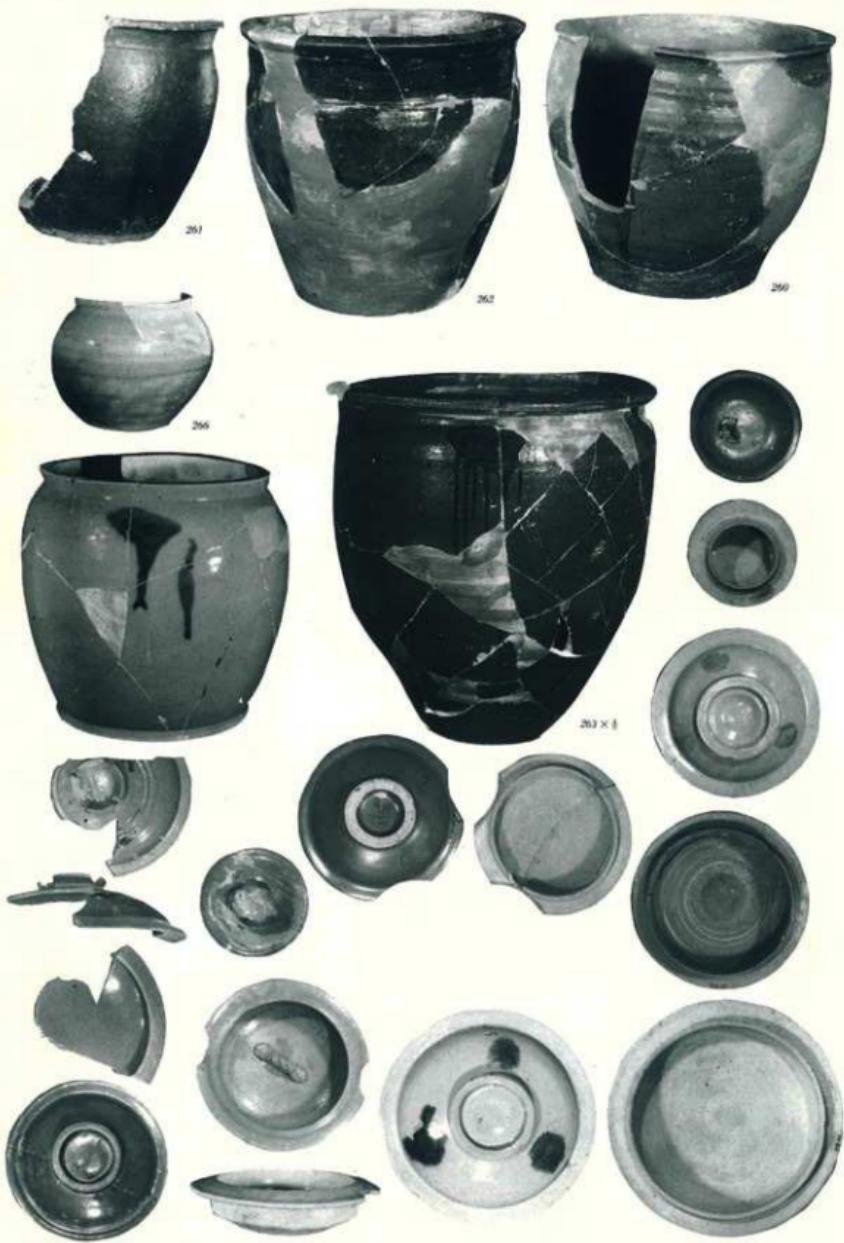
PL. 35 出土陶器（甕・鉢）



關西

越後守家 (17c以前)

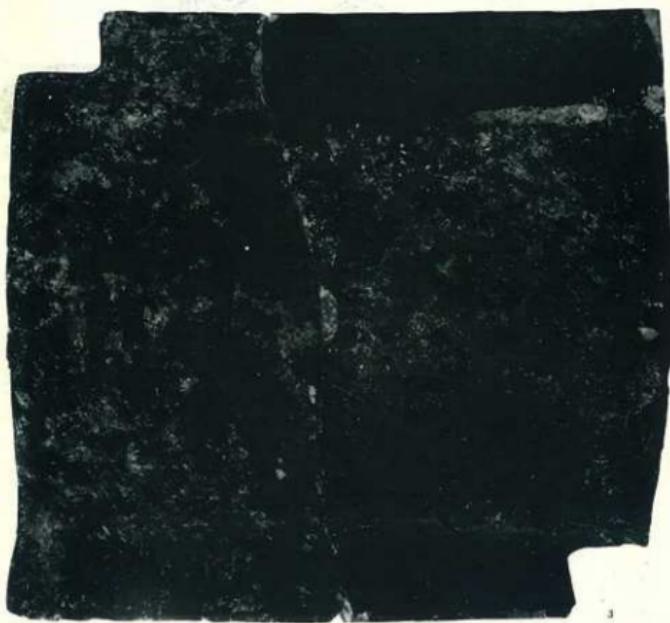
PL. 36 出土陶器 (塞他)

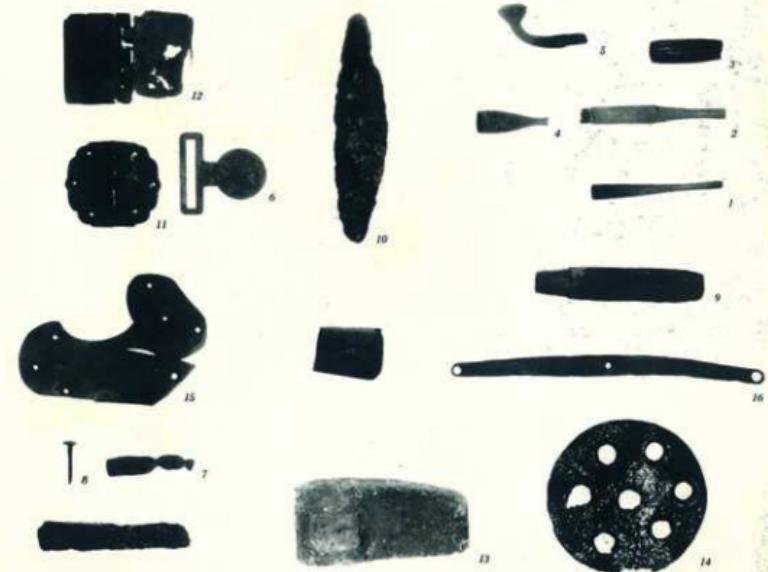
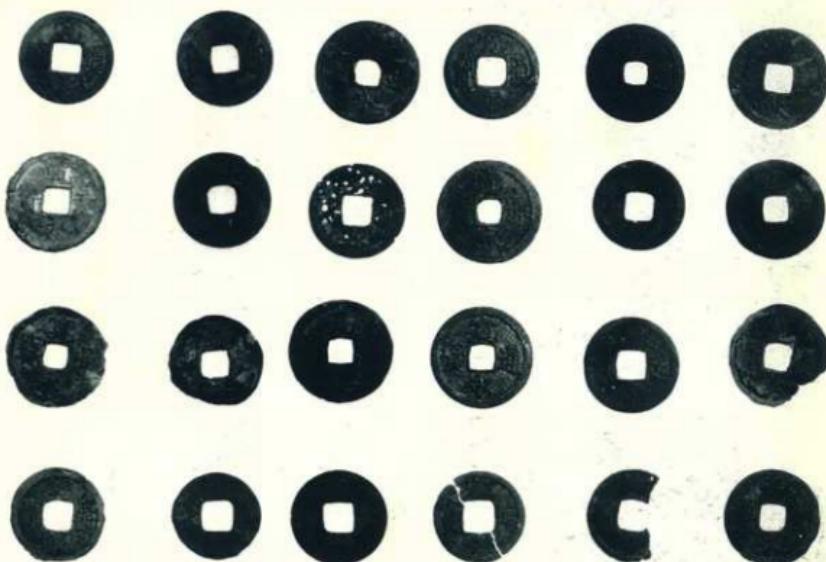


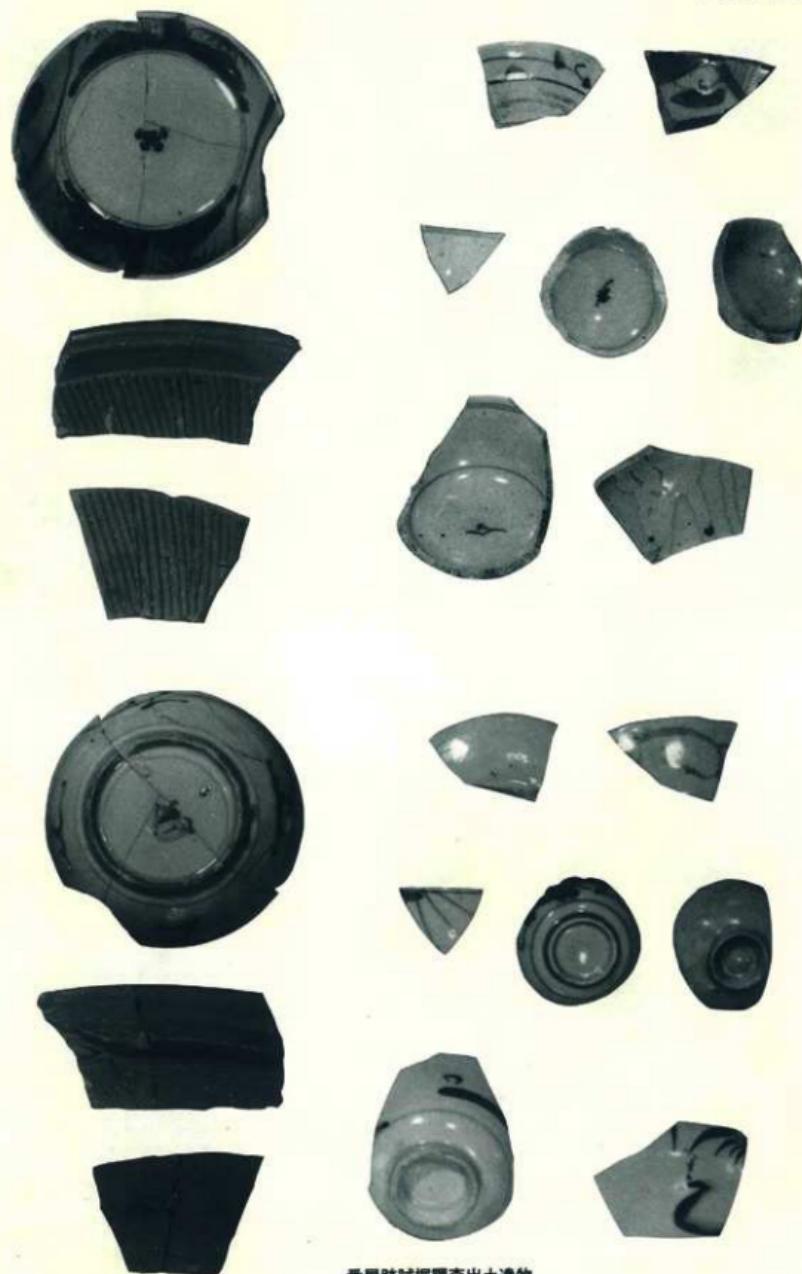
PL. 37 出土陶磁器 (香炉他)



PL. 38 出土陶器 (瓦)







番屋跡試掘調査出土遺物

上ノ国漁港遺跡

—昭和58・60年度発掘調査報告書—

印刷 昭和62年3月20日

発行 昭和62年3月25日

上ノ国町教育委員会

北海道桧山郡上ノ国町大留100

函館土木現業所

印刷所 富士プリント㈱
